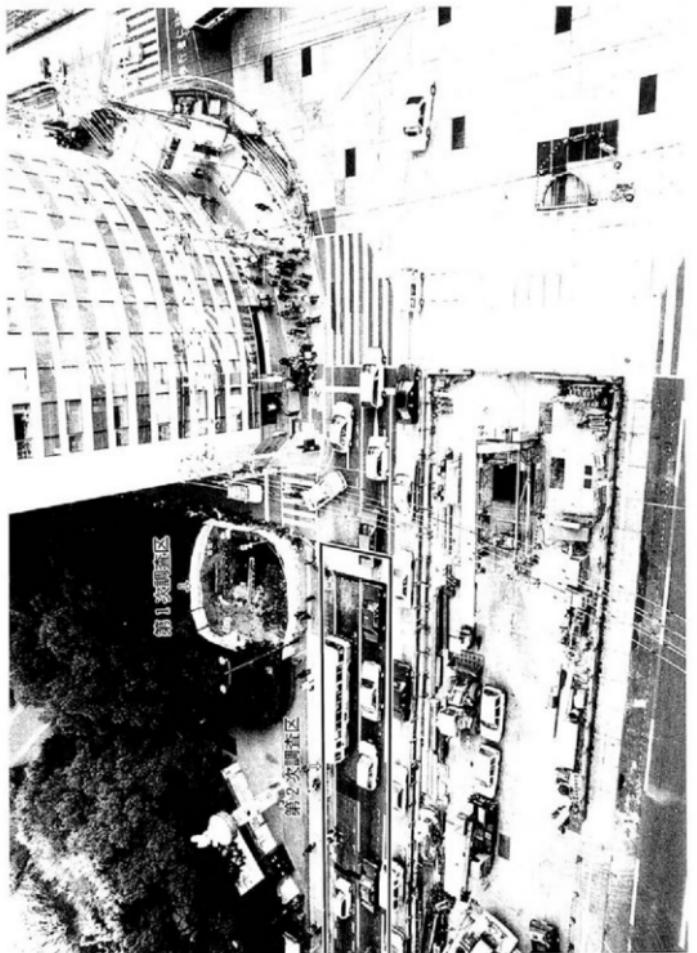


新交通システム建設工事事業地内埋蔵文化財発掘調査報告III

広島市中区基町11番外所在

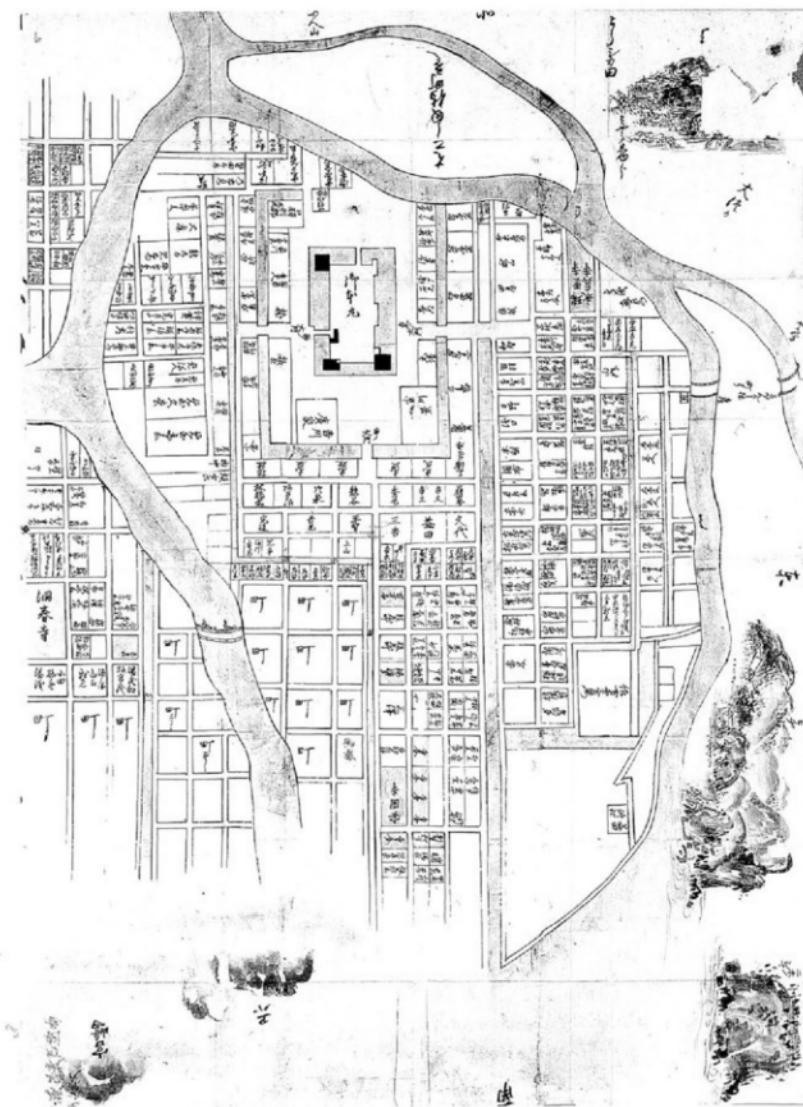
広島城県庁前地点
発掘調査報告

1994・3

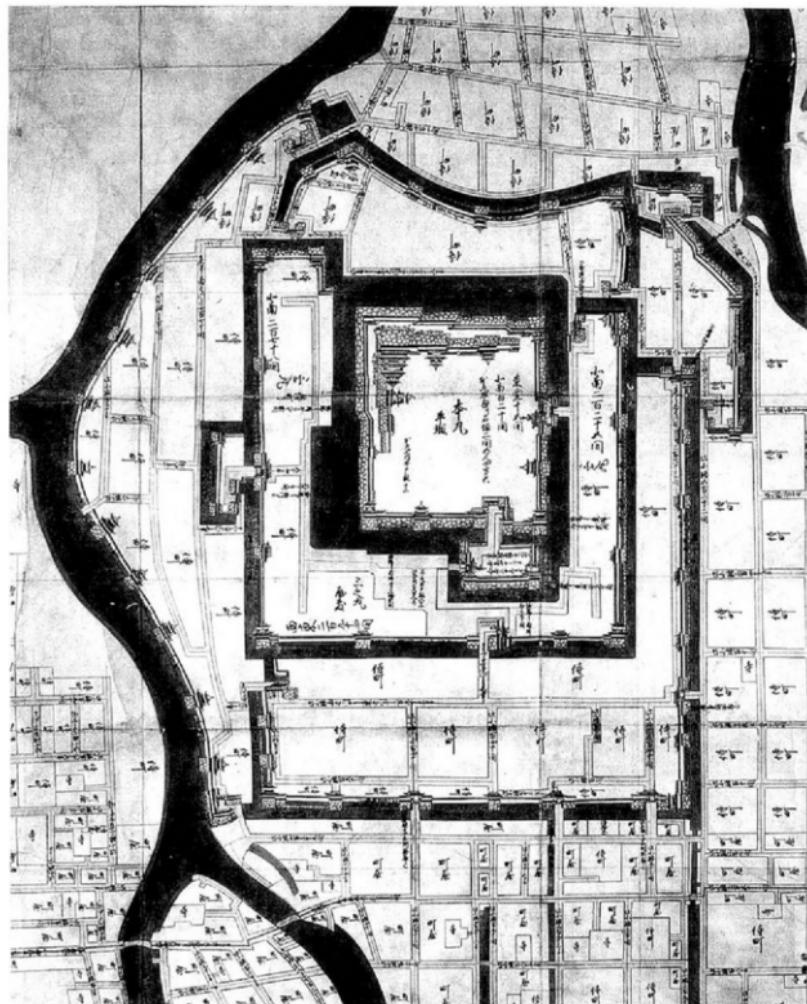


調査区全景 (バスセンタービル屋上から)

卷頭図版2



「芸州広島城町割之図」(山口県文書館所蔵)



「安芸国広島城所繪図」（国立公文書館内閣文庫所蔵）

は　し　が　き

築城400年を迎えた広島城は、二の丸の整備も着々と進み、新しい姿を我々に見せてくれます。こうした整備・復元が進むにつれて、逆に築城当時の在りし日の広島城の姿にも思いを致さずにはおられません。

近年の新交通システムやアジア大会へ向けての諸施設の整備工事の中で、広島城関連の発掘調査も回を重ね少しづつ築城当初の姿にも迫りつつあります。特に今回の新交通システム換気機械室建設に伴う県庁前地点の発掘調査では、遺構・遺物の両面で築城当初の広島城を考える上で大きな成果を挙げることができました。

この報告書が少しでも多くの方々に活用され、市民の皆様が郷土の歴史文化について理解を深められる一助となれば幸いに存じます。最後になりましたが、調査にあたり御指導・御助言いただきました諸先生方、諸機関各位ならびに発掘調査にご協力いただきました関係機関の皆様方に厚くお礼申し上げます。

平成6年3月

財団法人広島市歴史科学教育事業団

例　　言

1. 本書は地下鉄ずい道換気機械室建設に伴い平成4年から5年にかけて行った広島城関連遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は広島高速交通株式会社から委託を受けて、財團法人広島市歴史科学教育事業団が実施した。
3. 第1次発掘調査は県庁内敷地部分（広島市中区基町11番）を平成4年11月12日～12月10日に、第2次発掘調査は県庁前現道部分（広島市中区基町17-1番）を平成5年2月3日～3月5日にそれぞれ行った。
なお、第2次発掘調査はすべて夜間調査であった。
4. 本書は福原茂樹が執筆・編集を行った。
5. 遺構の写真撮影及び実測は、多森正晴、福原、荒川正己が分担して行った。
6. 遺物の実測・トレースは福原が、写真撮影は福原・荒川が行った。ただし、木製品の赤外線写真については広島県立歴史博物館伊藤実氏に撮影していただいた。
7. 遺構の写真測量・図面作成は株式会社バスコに委託して行った。
8. 骨・貝類の同定、珪藻分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。本文中の「動植物遺骸」の記述については同分析における早稲田大学金子浩昌氏の報告を元にしている。
9. 第1図に使用した地図は、広島市都市整備局都市計画課発行の2,500分の1の地形図を複製した。
10. 本発掘調査で出土した遺物については財團法人広島市歴史科学教育事業団で保存・活用している。

目 次

I はじめに	1
II 位置と歴史的環境	4
III 遺構と遺物	8
IV 総括	29

挿 図 目 次

第1図 広島城周辺関連遺跡分布図	2
第2図 遺跡周辺図	3
第3図 遺構配置図	41
第4図 石列遺構及び第1号埋甕遺構出土状況	42
第5図 土層断面図西面、東面	43
第6図 土層断面図北面、南面	44
第7図 第1号溝状遺構	45
第8図 第2号溝状遺構	46
第9図 出土遺物実測図(1)	47
第10図 出土遺物実測図(2)	48
第11図 出土遺物実測図(3)	49
第12図 出土遺物実測図(4)	50
第13図 出土遺物実測図(5)	51
第14図 出土遺物実測図(6)	52
第15図 出土遺物実測図(7)	53
第16図 出土遺物実測図(8)	54
第17図 出土遺物実測図(9)	55
第18図 出土遺物実測図(10)	56
第19図 出土遺物実測図(11)	57
第20図 出土遺物実測図(12)	58
第21図 出土遺物実測図(13)	59

表 目 次

表-1 遺跡周辺居住者一覧表	6
表-2 第2号溝状遺構出土陶磁器・ 土器類産地内訳	23
表-3 第2号溝状遺構出土 施釉陶磁器産地内訳	23
表-4 第2号溝状遺構出土 焼き締め陶器産地内訳	23
表-5 第3号溝状遺構出土陶磁器・ 土器類産地内訳	23
表-6 第2号溝状遺構出土陶磁器・ 土器類産地別器種分類	23
表-7 他の消費地遺跡と第2号溝状遺構出土 陶磁器・土器類産地別比較	25
表-8 他の消費地遺跡と第2号溝状遺構出土 施釉陶磁器産地別比較	25
表-9 施釉陶器観察表	33
表-10 焼き締め陶器観察表	35
表-11 磁器観察表	36
表-12 瓦質・土師質土器観察表	37
表-13 土製品観察表	38
表-14 瓦観察表	38
表-15 焼塩壺観察表	39
表-16 金属製品観察表	40
表-17 木製品観察表	40

図版目次

図版 1 a	第1号溝状遺構遺景（東より）	図版 7	出土遺物(1)
b	第1号溝状遺構近景（東より）	図版 8	出土遺物(2)
図版 2 a	第2号溝状遺構土層断面（10W・北より）	図版 9	出土遺物(3)
b	第2号溝状遺構土層断面（14W・北より）	図版10	出土遺物(4)
図版 3	石列遺構及び第1号埋甕遺構（北より）	図版11	出土遺物(5)
図版 4 a	第3号溝状遺構（西より）	図版12	出土遺物(6)
b	第3号溝状遺構土層断面（東より）	図版13	出土遺物(7)
図版 5 a	第1号埋甕遺構（南より）	図版14	墨書き外線写真
b	第2号埋甕遺構（南より）	図版15	出土遺物(8)
図版 6 a	第3号埋甕遺構（南より）	図版16	出土遺物(9)
b	土坑土層断面（南より）	図版17	出土遺物(10)
		図版18	出土遺物(11)

I は じ め に

昭和61年10月、新交通システムの建設に伴い、建設の主体となる広島市（広島高速交通株式会社）及び建設省中国地方建設局広島国道工事事務所から広島市教育委員会に対して建設予定地内における文化財の有無について照会があった。これを受け広島市教育委員会は試掘調査を実施し数か所で広島城堀跡の石垣等の埋蔵文化財の存在を確認した。再三の協議の結果、計画の変更は困難であり、記録保存も止むなしとの結論に達した。

その結果、平成2年5月に広島高速交通株式会社及び建設省中国地方建設局広島国道工事事務所から財団法人広島市歴史科学教育事業団に発掘調査の依頼があった。協議の結果、紙屋町交差点部分については3回に分けて調査を実施することになり、平成4年度第2回分の調査を2次に分けて行った。第1次調査は平成4年11月12日から12月10日まで、第2次調査は平成5年2月3日から3月5日まで行った。

また、平成5年度に整理作業及び報告書の執筆を行った。

調査の関係者は次のとおりである。

調査委託者 広島高速交通株式会社

調査主体 財団法人広島市歴史科学教育事業団

調査担当課 財団法人広島市歴史科学教育事業団文化財課

調査関係者 松原 明二 常務理事・事務局長

半田 亨 文化財課長（平成4年度）

山出 健志 文化財課長（平成5年度）

調査者（第1次）

多森 正晴 事業係主事 福原 茂樹 事業係主事

（第2次）

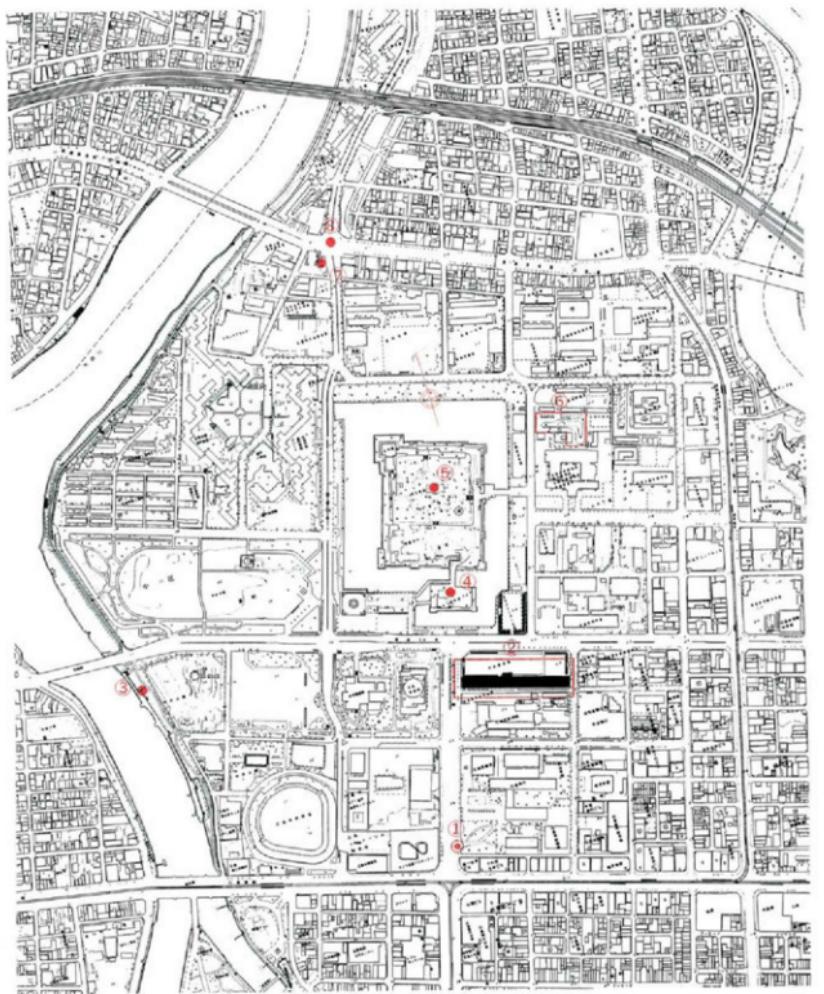
幸田 淳 事業係長 福原 茂樹 事業係主事（担当者）

若島 一則 事業係主査 荒川 正己 事業係主事

多森 正晴 事業係主事（担当者）

調査補助員 河合淳子、佐伯ひとみ、菅原彰子、住川香代子、竹内直子、橋本礼子、山本 都

なお報告書の作成にあたっては、次の諸機関、諸氏から広範な御教示をいただき、なおかつ貴重な資料の提供を受けた。陶磁器全般について佐賀県立九州陶磁文化館大橋康二氏、宇治章氏、広島県立美術館村上勇氏、財団法人大阪市文化財協会森綱氏、備前焼について財団法人倉敷考古館間壁忠彦氏、瀬戸・美濃系陶器について財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター藤澤良祐氏、焼塩壺について名古屋大学渡辺誠氏、木製品並びに赤外線写真撮影による墨書き文字の判読について広島県立歴史博物館鹿見啓太郎氏、伊藤実氏、志田原重人氏、佐藤昭嗣氏、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所下津間康夫氏、瓦質・土師質土器について財団法人広島県埋蔵文化財調査センター篠原芳秀氏、荒木清二氏、藤原彰子氏、瓦について財団法人大阪市文化財協会中村博司氏、名古屋城跡の発掘調査結果について名古屋市教育委員会水野裕之氏、愛知県埋蔵文化財センター松田訓氏、人吉城跡の発掘調査結果について鶴嶋俊彦氏である。また、広島大学藤原健蔵氏には冬季の夜間調査にもかかわらず現地まで御足労頂き堆積学的な御指導を頂いた。ここに記して謝意を表する。（順不同）



第1図 広島城周辺関連遺跡分布図

- ① 県庁前地点遺跡（本遺跡） ② 中堀跡
- ③ 外郭櫓台跡 ④ 史跡広島城跡二の丸
- ⑤ 史跡広島城本丸 ⑥ 土堀跡
- ⑦ 北西隅櫓台跡 ⑧ 西白島交差点地点外堀跡



第2図 遺跡周辺図 (S = 1 : 1,000)

II 位置と歴史的環境

本遺跡は広島市中区基町11番外に所在する広島城関連遺跡である。史跡広島城跡から南へ伸びる国道54号線（愛称鯉城通り）と相生橋から八丁堀に至る愛称相生通りとの交差点より約40m北に位置する。

広島城関連遺跡としてはこれまでいくつかの発掘調査が行われてきた（第1図参照）。これらの調査によつて広島城の正確な縄張りやその構造等が少しづつわかつつつある。しかしながら未だに不明確な部分も多いことも事実である。

本遺跡は広島城の天守閣から南へ約750m、平成3年度に本事業団が発掘調査した中堀跡の西端から南南西へ約300mの位置にある。南側の外堀の位置が確定していないため本遺跡の広島城における正確な位置については若干の疑問も呈されるが、本稿においては從来いわれている現在の相生通りが南側の外堀を埋め立てたものであるとの見解に従つて本遺跡は南側の外堀の北の堀際、すなわち城内の大手郭の一部であると判断した。⁽¹⁾

戦後市街地の様相が大きく様変わりしていることから、本遺跡の位置を正確に近世の絵図上に特定することは不可能であるが、ここでは大手郭の変遷を、本遺跡に相当すると思われる位置を中心に、遺存している絵図に基づき追ってみたい。

広島城及びその城下町の構造はその大部分が福島期のある時点までに整えられたと考えられ、それ以降幕末までほとんど変化していない。このことは現在遺存している多くの絵図からも明らかである。これらの絵図によると大手郭は福島期までに現在の広島城及びその城下町の構造が整えられて以来侍町それも家老を含む大身の家臣の武家屋敷で占められていたことが窺われる。またそれ以前についても、残されている絵図の数も少なくその信憑性についても考察を要するものであるが、やはり同様に大手郭は侍町として描かれている。⁽²⁾このように遺存している絵図文献では大手郭は広島築城以来侍町であったことになり、またその城郭内での位置から考えてもその可能性は極めて高いと思われる。

さて現在遺存している多くの絵図のうち最も正確で、なおかつ広島城及びその城下町の構造が整えられたとの余り時期を離れて成立したと考えられるのが「安芸国広島城所絵図」⁽³⁾（以下「正保絵図」）である。この絵図は正保元（1644）年幕府が諸大名に提出を命じた「城絵図」で、提出にあたっては予め幕府が詳細な基準を示しており、西欧の測量術を採用したものである。特に城郭部についての記載はきわめて詳細で、石垣や櫓、土塁はもちろん、堀の幅・深さ、石垣や土塁の高さ・幅までが示されておりたいへん重要な絵図である。⁽⁴⁾特に近年の発掘調査により記載されている堀幅等が正確であることが確認されたことからそのまま史料価値が高まつたといえよう。正保2（1645）年春に埋め立てられた古川が描かれていないことからその直後の測量になるものと考えられている。⁽⁵⁾

以上のようなことから、ここではこの「正保絵図」と近年の広島市街の図面とを比較して遺跡の位置を考えみたい。

まず、東西の位置についてである。本遺跡は史跡広島城跡から南へ伸びる鯉城通り上にある。正確にはこの東側車線・歩道上及びそれに接する県庁敷地内である。この鯉城通りの紙屋町より南部分は城下町時代の西堂川を埋め立ててつくられたものと言われている。ただし、「正保絵図」では西堂川は「廣九間」とされ両岸に道が描かれているが、現在の鯉城通りは幅は一様ではないものの車道部約25m、歩道部約7.5m（片側）ある。つまり全幅が40m相当であることになる。このように鯉城通りは西堂川の幅よりも広いことから、「正保絵図」で西堂川両岸に描かれている道あるいは町の一部が現在の道路に取り込まれている事になる。

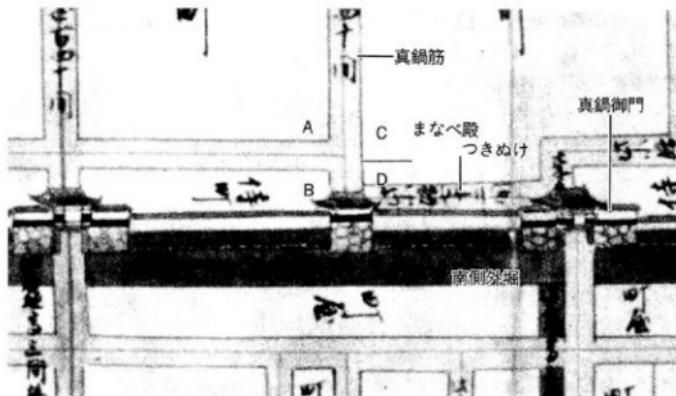
そこで昭和22年と昭和37年撮影の航空写真に見られる鯉城通りを比較してみる。これによると昭和37年にはほぼ現在と同じ道幅になっていることが分かる。しかし昭和22年の写真よりも明らかに道幅は拡大しておりしかも付近の町割りの区画から見ると道路西側の町割りが狭まっており、道路が西へ拡大されたことが確認できる。すなわち、西堂川は現在の鯉城通りの東側部分にあったと考えられる。また、道路東側の町割りは大きく変化した様子は見られないことから、現在の東側歩道部あたりに西堂川東岸の道があったと推定してよからう。さらに白神社は「芸州広島城町割之図」から一貫してすべての絵図においてこの西堂川の東岸の道沿いないしは直接川沿いに描かれている。白神社の本殿は『知新集』が「巨怪岩の上に鎮座ます」と記すように、築城当時の岩礁の上に築かれたものであり、その位置が大きく動いていないことは確実である。この白神社が現在鯉城通りの東に接していることも上述のことを裏付ける。「正保絵図」では西堂川東岸の道は大手郭を南北に走る5本の道の西から3本目の道（いわゆる真鍋筋）と同一直線上にある。すなわち本遺跡は東西位置はほぼこの真鍋筋付近にあたると考えてよからう。

次に南北の位置についてである。明治期になって城内はすべて軍施設となった。大手郭もすべて西練兵場となり一旦整地されているため江戸期の道は大部分がその位置を確認するのは困難である。そうした中で江戸期の道がそのまま残されたと考えられるものもある。そのひとつは大手郭の南北に走る4本の道の一一番東の道（いわゆる立町筋）である。明治期になると大手郭の南東隅、すなわち東と南の外堀とこの道に挟まれた場所に皆行司、済美学校等の施設がつくられている。明治10年から昭和14年の地図まで立町筋の存在が確認できる。その後昭和22年の航空写真でもこの道は確認でき、基本的には現在までその位置は動いていないと思われる。

「正保絵図」ではこの立町筋から西へ向かう「百間」の道が描かれている。明治期の地図によると南側の外堀と立町筋に接して憲兵本部、上水道事務所等の施設が明治27年から昭和14年にかけて確認される。これらの施設の北側に描かれている道がこの「百間」の道であるかどうかは微妙なところであるが、もともとあった道を利用することは考えられることである。また、「正保絵図」ではこの「百間」の道を東へ延長した外堀の東側にほぼ同一直線上に「百十間」の道が描かれているが、明治29年の陸地測量部の地図でも同様の位置に道が描かれており、同一の道である可能性は高い。この憲兵本部、上水道事務所北の道は昭和22年の航空写真でも確認できる。しかし、この道は昭和63年の航空写真と比較すると道1本分ほど南へ移動しているように見える。すなわち「正保絵図」における「百間」の道は現在の相生通り北の小路よりやや北に位置していたようである。本遺跡はこの相生通り北の小路に南で接しているから、「正保絵図」における位置は「百間」の道付近と考えてよからう。以上のようなことから、本遺跡は「正保絵図」上のいわゆる真鍋筋といわゆる立町筋から西へ走る「百間」の道の延長線の交点付近と判断した。前述のように江戸期を通して城内の構造はほとんど変化していないと思われるが、他の絵図においても道の位置を基準にしてその場所を考えた。そうした前提で以下に「正保絵図」と同じ城内の構造を描く主な絵図について、本遺跡に該当すると考えられる場所の住人等についてまとめてみた。なお、「正保絵図」以前の絵図（「芸州広島城町割之図」、「知新集」所収（毛利氏時代城郭内の図）〔福島氏時代城郭内の図〕）についても「IV総括」に述べるような理由から、一定程度の信頼性があると判断されることからここで同時に整理しておく。また、「知新集」では絵図上には示さないものの浅野入国期までの屋敷割りを書いており、これも合わせて整理した。調査区に該当すると思われる場所については以下の表のようにその居住者は目まぐるしく変わっているものの一貫して大身の武士の屋敷地であった。

明治になると城内の大部分は軍用地として使用された。調査区該当地も1873（明治6）年、鎮台練兵場と

なる。その後1890（明治23）年に東練兵場ができると、西練兵場と呼称が変わる。そして戦前はずっと西練兵場として使用されている。その間、1894（明治27）年には日清戦争に伴い西練兵場内に仮議事堂が建設され、帝国議会が広島の地で開かれるといったこともあった。また、1906（明治39）年には日露戦争後の祝賀行事として広島市招魂祭が、1929（昭和4）年には昭和産業博覧会が同じく西練兵場で開催されている。このように、西練兵場は必ずしも練兵場としてのみ使用されたのではなく、種々の行事にも使用され、そのたびにいくつかの施設、建物も建てられたりしたようである。こうして西練兵場も運命の1945（昭和20）年8月6日を迎えたのである。



「正保絵図」より遺跡周辺図

表-1 遺跡周辺居住者一覧表

	時期	A	B	C	D
芸州広島城町割之図	毛利期	平賀	空き	三吉	吉原
毛利氏時代城郭内の図	毛利期	平川	カシノヤマドノ 〇〇	(三野)	粟屋平右エ門
福島氏時代城郭内の図	福島期	酒井信濃	沖長兵衛	福島藤右エ門〇〇	佐々木千左エ門〇〇
知新集(文章から推定)	福島退去時	酒井信濃	林龜之助	大崎玄蕃か 〇〇	佐々木千左エ門か
知新集(文章から推定)	浅野入国時	上田主水佐	上田主殿助	〇〇	日比長門守
寛永年間広島城下図	1625～1632	上田主水助	空き	空き	八島藏人
安芸国広島城所絵図	1645		すべて「侍町」とのみ記す		
広島独案内付図	1725～1736	上田主水	清水勘右衛門	上田主水	鳥井九郎右衛門
家中屋敷割図	1743～1754	上田主水	清水〇〇〇〇	上田主水向屋敷	鳥井〇〇〇〇
知新集(文章から推定)	1819～1824	上田主水	〇〇	(不明)	奥勘十郎
御家中屋敷絵図重宝記	1864頃	上田主水	浅野萬之丞	上田主水向屋敷	遠藤佐兵エ
広島城郭内図	1864後加筆	上田主水	浅野万之丞	上田主水向屋敷	久保田
藩士邸宅明細図	1867	上田主水	浅野内膳	上田主水	久保田〇司
家中屋敷割図	1869頃	上田重〇	浅野内膳	上田重〇	久保田秀雄

注)

- (1) 財団法人広島市歴史科学教育事業団『広島城中堀跡発掘調査報告』1992
- (2) 表一に示した絵図群のうち「寛永年間広島城下図」以下の絵図を指す。
- (3) 表一に示した絵図群のうち「知新集」までの絵図を指す。
- (4) 広島市立中央図書館編『広島城下町絵図集成』1990
- (5) 後藤陽一「広島築城と城下町の発展」「広島城下町絵図集成」1990
- (6) 中堀の調査他(財団法人広島市歴史科学教育事業団『広島城中堀跡発掘調査報告』1992), 外堀跡西白島交差点地点(財団法人広島市歴史科学教育事業団が1993年度調査を実施)でも堀幅を確認した。
- (7) (4)と同
- (8) 米陸軍撮影(財団法人日本地図センター空中写真部「地図展、'91記念空中写真で見る広島の変遷」)
- (9) 国土地理院撮影(財団法人日本地図センター空中写真部「地図展、'91記念空中写真で見る広島の変遷」)
- (10) 広島市教育委員会『史跡広島城跡史料集成』第1巻, 1989
- (11) 『知新集』における呼称(広島市教育委員会『史跡広島城跡史料集成』第1巻, 1989), 以下の通りの呼称もすべて『知新集』によるものである。
- (12) 陸軍測量「広島城之図」(明治10年測量)の昭和12年の写本。広島市教育委員会『史跡広島城跡史料集成』第1巻, 1989
- (13) 「最新大広島市街地図」(昭和14年)著者不明
- (14) 清水庫三郎「広島市街全図改正実測」(明治27年)
- (15) 大日本帝国陸地測量部「広島 2万分の1」(明治29年)
- (16) 国土地理院撮影(財団法人日本地図センター空中写真部「地図展、'91記念空中写真で見る広島の変遷」)
- (17) (4)と同
- (18) (4)と同
- (19) (4)と同
- (20) (4)と同
- (21) (4)と同
- (22) (4)と同
- (23) (4)と同
- (24) (4)と同
- (25) (4)と同
- (26) (4)と同
- (27) 賴誠一「地方社会の自己証明—広島の学際的研究」1992
- (28) (4)と同
- (29) (4)と同
- (30) (4)と同
- (31) 林保登『芸藩譜要』付図 1933
- (32) 『芸藩志』付図其五
- (33) (4)と同
- (34) 「カシノヤマドノ」は『知新集』の本文中では「かみのやま」と見える。
- (35) 「福島藤右エ門」は『知新集』の本文中では「福島左エ門」と見える。
- (36) 「佐々千左エ門」は『知新集』の本文中では「佐々千左エ門」と「佐々千右エ門」の両方が見える。
同一人物か。
- (37) 「大崎玄蕃」は『知新集』の本文中で「大崎玄蕃允」とも見える。同一人物か。
- (38) 「大崎玄蕃允」の屋敷地が「伴孫之進, 竹腰文左衛門, 小宮山忠左衛門, 今中内匠, 佐柿忠兵衛」の5人の屋敷になららしいが、「さたかにハ知かたし」([『知新集』])と記す。
- (39) 堀江大進または浅野多喜馬のいづれかが相当すると思われる。

III 遺構と遺物

1. 遺跡の概要

本遺跡は、広島城の大手郭内の一地点と考えられる。大手郭は広島城築城以来ずっと武家屋敷地、それも家老・重臣クラスの大身の武士たちの屋敷地であった。本遺跡もそうした武士たちの屋敷地及びそれに関連するものである可能性が高い。

調査は県庁の敷地内部分の第1次調査と、現道内部分の第2次調査に分けて行った。第1次調査では調査区の西端から、南北方向に連なる石列が検出され、この石列の東側からは3基の埋甕遺構及び1基の土坑が検出された。同じく石列の西側の版築状に固められた面の下からは第3号溝状遺構が検出された。なお、石列の上から東側には石が散乱しており、石に混じって瓦や陶磁器等の遺物も見られた。表土から一定量の陶磁器類が出土したが、いずれも近世以降のものである。土坑内からは若干の瓦、第3号溝状遺構からは一定量の陶磁器類及び木製品が出土した。

第2次調査では調査区の東半分が埋設管のため搅乱を受けており、全く調査ができなかった。しかし、調査区の西半分から前述の石列と向きを一にする溝状遺構が2本検出された。しかしながら、調査区の西端に掘ったトレーナによる部分的な破壊や、埋設管による搅乱のため完全な形での検出はできていない。北側の第1号溝状遺構からは若干の陶磁器及び多数の木製品が出土した。南側の第2号溝状遺構は本遺跡中最も多くの遺物を伴っており、しかもこれらの遺物は一括りがたいへん高く、比較的短期間にこの溝状遺構内へ投棄されたものと考えられる。また、表土からも一定量の陶磁器類が出土している。

本調査で検出された遺構は共伴する遺物からいざれも1589年の広島城築城開始以後、1873（明治6）年、軍による練兵場建設以前のものと考えられる。すなわち、中世末から近世にかけての武家屋敷に関連する遺構であると思われる。

2. 遺構

(1) 石列遺構（第4図）

第1次調査区の西端部分で南北方向に約9mを検出したが、南北両端とも調査区外に続いている。方向は大手郭の南北方向に平行し、内堀や1991年度の調査で検出された中堀と直交する。現在の国道54号線の走行方向とも一致している。構造は一段の切り石を並べたもので、面は東向きに揃えられている。石列の東側には3基の埋甕遺構及び1基の土坑が確認されたのに対し、西側の面は版築状に固く締められており、その下からは第3号溝状遺構が検出された。すなわちこの石列を挟んで東西でその様相が異なっていることから、この石列は何らかの境界を意味するものと考えられる。また、土層断面（第6図）の観察からこれらの遺構面とこの石列は同時期のものであり、この遺構面を若干掘り窪めて石列を埋置したものと思われる。

本遺構に直接伴うと考えられる遺物は出土していない。しかし、本遺構に先行すると考えられる第3号溝状遺構がその出土遺物から17世紀中頃から幕末頃に機能していたと考えられることや、石列の上から東側にかけて石が散乱し遺構が廃棄された状況を呈していたことから、幕末頃から1873（明治6）年に練兵場がつくられるまでの比較的短期間機能していたと考えられる。

(2) 溝状遺構

第1号溝状遺構（第7図）

第2次調査区で検出したもので、その規模は長さ370cm、最大幅180cm、深さ80cmである。溝の北側は調査区外へ延びており、南側は徐々に深さを減じながら終息する。遺構内には茶褐色の腐食土がレンズ状に堆積していた。土層断面の観察によると、2次的な掘り込みと思われる痕跡が見られることから、塀等の上屋構造物があった可能性もある。

本遺構内からは、若干の陶磁器及び瓦、多数の木製品、骨・貝等の動物遺骸が出土した。陶磁器の出土量が少ないため明確にしがたいが、第2号溝状遺構と同一直線上に位置することや、No.1の胎土目積み皿が出土していることから第2号溝状遺構と同時期の遺構と考えたい。

第2号溝状遺構（第8図）

第2次調査区で検出したもので、その規模は長さ19.6m、最大幅150cm、深さ110cmである。溝の南側は若干調査区外へ延び遺構内には茶褐色の腐食土がレンズ状に堆積していた。

本遺構内からは、多数の陶磁器・土器類及び瓦、木製品、骨・貝・種子等の動植物遺骸、金属製品、ガラス製品が出土した。特に陶磁器は生産年代が16世紀末から17世紀初めの一括遺物である。遺物の詳しい検討については「3. 遺物」で行うが、これらの様相から本遺構は毛利期から福島期にかけて機能していたと思われる。

第3号溝状遺構（第3図）

石列遺構の西側の版築状に固く締められた面の下から検出したもので、その規模は長さ425cm、最大幅90cm、深さ115cmである。溝の北側は調査区外へ延びているが、南側は徐々に深さを減じながら終息している。土層断面（第6図）の観察から本遺構が石列遺構に先行すると考えられる。遺構内には青灰色の粘質土がレンズ状に堆積していた。

本遺構は石列遺構とほぼ平行しており、石列遺構のわずか45cm西側に設けられていることから、石列遺構がつくられる以前にこれと同じ機能を有していたものと考えられる。

本遺構内からは陶磁器・土器類、瓦、木製品等が出土している。そのうちNo.85が最も古く、1630～1640年に生産されたいわゆる初期伊万里である。その他17世紀から19世紀に生産された陶磁器が万遍なく出土している。これらの遺物の様相から本遺構は17世紀中頃から暮末にかけての遺構と考えられ、本遺構の廃絶後に石列遺構がつくられていることから明治期までは機能していなかった可能性が高いと思われる。

（3）埋甕遺構

第1号埋甕遺構（第4図）

石列遺構の東1.6mの地点で検出した。大型の土師質の甕（No.118）を口縁部を上にした状態で埋置していた。甕の内面底部には黄白色の付着物がみられたことから、便所の便槽と思われる。近年各地で常滑産の土師質甕や鉢を用いた同様の施設が確認されており、⁽²⁾本遺構及び第2号・第3号埋甕遺構に使用されていた甕もその器形・色調等から常滑産のものである可能性がある。

第2号埋甕遺構

第1号埋甕遺構の東1mに隣合う形で検出した。大型の土師質の甕（No.119）を口縁部を上にした状態で埋置していた。第1号埋甕遺構のような付着物は確認できなかつたので断定はできないが、同様の性格を持つ遺構と考えられる。

第3号埋甕遺構

第2号埋甕遺構の北1.2mに隣合う形で検出した。大型の土師質の甕（No.120）を口縁部を下にした状態で埋置し、さらにその上に備前産の攝鉢（No.70）を口縁部を下にして重ねる構造になっていた。いずれも底部

は打ち欠かれていた。その構造から汚水処理施設であると思われる。

(4) 土坑 (第6図)

平面プランは確認しえなかったが、北側の土層断面検出の際その断面を確認した。プランは東西方向に長辺を取る長方形を呈していたと思われ、長辺115cm、深さは50cmある。底部には炭化物がみられ瓦が若干出土した。廃棄用の土坑であろうと思われる。時期は不明である。

(5) 小結

最後に本遺跡で出土した遺構群の性格について考えてみたい。まず、3本の溝状遺構及び石列遺構であるが、これらは他地域での出土例等から何らかの境界施設であったと考えられる。ここでは特に武家屋敷のあった三の丸の調査がすすんでいる名古屋城の例を見てみたい。

⁽³⁾新文化会館用地、⁽⁴⁾裁判所合同庁舎用地、⁽⁵⁾合同庁舎用地、⁽⁶⁾名古屋市公館用地等の調査では、多くの溝状遺構が確認されている。そしてこれらの溝状遺構の一部は絵図等との比較から屋敷地どうしの境界施設あるいは道と屋敷との境界施設と判断されている。これらの溝状遺構は比較的短期間に埋め戻されたと考えられるものも見られる。また、溝底部に柱穴列の見られるものが多く、これらは上屋構造として塀や棚が考えられるとしている。

このうち特に屋敷地と道路面との境界が出土している新文化会館用地地点と名古屋市公館用地地点を見る。新文化会館用地地点では屋敷地(b)(c)と西土居筋との境界施設として溝 S D 401を、屋敷地(a)と西土居筋との境界施設として棚列 S A 401を検出している。S D 401とS A 401は平行し、この間の検出面は固くしまっていることから、この部分が西土居筋の道路面であると想定し、その道幅は7mに復元できるとしている。

名古屋市公館用地地点では3軒の武家屋敷跡と南御土居筋と東御土居通がクランク状に合流する部分が検出されている。南御土居筋と東御土居通の両側にはいずれも溝状遺構が検出されており、その間の路面と考えられる部分についてはやはり「いずれも固く締まり版築状に土が重ねられて」おり、これを除くと溝、小ピットが検出されることも多かったという。すなわち、こうした道路と屋敷地の境界は溝、塀、棚等によって設定され、何度も多少の移動を繰り返していたことが窺われ、屋敷地の拡張が図られたこともあったようである。また、ここでは、そうした境界施設の変化の一時期、「1段の切石による低い石列で境が形成された」としていたことを確認している。

こうした名古屋城における発掘調査の結果は、本遺跡の遺構群の性格を考える上でたいへん貴重である。すなわち溝状遺構群及び石列遺構は境界施設の一種と考えられ、もっといいうならば第3号溝状遺構及び石列遺構と第1号・第2号溝状遺構の間は道路面であったと判断できよう。その際、第3号溝状遺構と石列遺構は同一の境界を設定する施設であり、形態を変えて作り替えられたものと推測できる。また、石列遺構の西側遺構面は版築状に固く締められていたこともここを道路面と考える有力な証拠となろう。もちろん第3号溝状遺構及び石列遺構と第1号・第2号溝状遺構はその時期が異なっており同時に存在していたとは考えにくい。第1号・第2号溝状遺構は毛利期から福島期の遺構と考えられるからそれが「正保絵図」に描かれている道と屋敷地との境界施設であるとは言い切れまいが、第3号溝状遺構及び石列遺構が「正保絵図」に描かれている道(いわゆる真鍋筋)と屋敷地との境界施設である可能性は高いと思われる。

次に埋甕遺構についてである。これについても名古屋城跡の発掘調査結果を見てみたい。新文化会館用地地点の調査では「甕を伴う土坑」には「口縁を上に向けた状態」のものと「口縁を下に向けた状態」のものが検出されている。前者は「甕の内面には白黄色の付着物が厚くこびりつくものが多く、便所の糞便を溜める甕」と考えられ、後者は「付着物はみられなく、汚水等を一時蓄え、地面に吸収させるための汚水処理用

の施設の一部」であると報告されている。合同庁舎用地地点の調査でも後者と同様の施設が出土しており、特にS X114は「常滑窯産の甕を配置し、さらに、その上に径30cm、深さ20cm程の大型の植木鉢を底部を上にした状態でかぶせ、二重構造とする」と報告されている。こうした施設は台所のように大量の排水を流す部分での使用は困難で、「断続的に小量の汚水を出す、『手水鉢』等と組み合わされ設置された」としている。そして後者は前者と近接してあることも報告されている。また、関西地方では一般に18世紀末頃になると便槽が木製の機・桶から遠隔地産の土器・陶器甕へと変化すること、大小の排泄物が分離されて便槽に貯められるようになる、つまり便所が2つセットになることが明らかにされてきている。

こうした名古屋城跡にみる埋甕遺構の出土状況や近年の研究の成果から、本遺跡の埋甕遺構群についてもこれらと同様の性格を持つ遺構であるといえよう。すなわち第1号・第2号埋甕遺構が便所の便槽であって、第3号埋甕遺構はそれに伴う「手水鉢」等の排水施設であろう。

3. 遺 物

(1) 施釉陶器

調査区全体から多数の遺物が出土した。生産年代は第2号溝状遺構から出土した16世紀末から17世紀初頭にかけてと思われるものが多くを占めるが、中世から近世全般のものが見られる。産地は肥前系を中心に瀬戸・美濃系、関西系、福岡系、楽その他地方窯のものがある。

全体的に概観すれば、その中でも肥前系陶器の占める割合が格段に多いことは容易に看取できる。また、肥前系陶器の占める割合やそのシェアの変化については広島城外堀跡（西白島交差点地点）の調査で見られた傾向と大きく異なっていないと思われる。

ここでは第2号溝状遺構から出土した良好な一括遺物を中心に生産地ごとに考察を加えたい。

肥前系陶器 第2号溝状遺構からは大量の碗・皿等が出土した。碗については以下の2類に分類した。

A類：口縁部が内湾ないし直立するもの（大坂城分類の碗A類にあたる）。

B類：口縁部が外湾するもの（大坂城分類B類）。

A類にあたるものはNo.2, No.3で、多くの碗はこれに含まれる。特にNo.3のような灰色から緑灰色に発色した灰釉を施したものが目立つが、中にはNo.2のように鉄釉のものもいくらかある。B類にあたるものはNo.4, No.5である。No.5はいわゆる天目碗であるがB類に含めた。No.7はその他の碗がすべて部分施釉なのに対して高台内まですべて施釉しており、なおかつ高台高も高く半磁器化している。

皿については以下の5類に分類した。

A類：体部が内湾しつつ立ち上がり口縁部に至るもの。

B類：内面体部と口縁部の境に明瞭な稜を持つ。腰部が水平ないしやや上向き横方向へ伸び、体部は外湾気味に斜め上方へ立ち上がり、口縁部は内湾気味なもの。胎土目積みのものをB1類、砂目積みのものをB2類とする。

C類：B類のうち口縁部をつまんで変形させるもの。

D類：体部が内湾しつつ立ち上がり口縁部が外湾するもの。

A類にあたるものはNo.9, No.10で、No.9のような皮鯨手のものと、No.10のような赤褐色の胎土でやや縁がかった灰釉を施すものが目立つ。セットもあるのかもしれない。No.9, No.10はいずれも胎土目積みだが、目積みの見られないものもある。B1類にあたるものはNo.11, No.12で、第1号溝状遺構出土のNo.1もこれに含まれる。B1類の中にも内底面の傾斜や広さ、内底面と口縁部の段差の大小、口縁部の幅等でいくつかに分か

れるようである。また、鉄絵の施されたいわゆる絵唐津が多くみられるのもB1類である。B2類は確認できるものはNo13の1点のみである。C類はNo14、No15ともう1点細片がある。No14は胎土目積みである。No16はD類で砂目積みである。第2号溝状遺構出土遺物中で砂目積みを確認できた遺物は4点のみである。

その他の器種としては、大皿(No19～No22)、向付(No23、No24)、瓶(No25)、小壺(No26、No27)、壺鉢(No28)を確認した。大皿の口縁部には大きく分けて、A類：内湾する体部から直線的な口縁部が伸びるもの(No21)と、B類：内湾する体部から口縁部を外湾させ水平近くまで折り曲げた後、口縁端部は折り返されたように上方へ突出し溝状をなすもの(No22)が見られる。No23は水平に伸びる底部から体部は直立し、口縁部は外反する。高級品である。No24は口縁部が全く遺存していないため全体がよくわからないが、伝世品に似たものが見られるようである。¹⁰これも高級品であろう。瓶(No25)は一見いわゆる朝鮮唐津にも似るが、内面には青海波文がみられず、ロクロ成形痕がある。

その他、第3号溝状遺構からは、若干ではあるが肥前系陶器として呉器手碗(No54)、刷毛目碗(No55)等が出土している。

これまで広島城の調査では胎土目積みの肥前系陶器の出土を毛利期(1589～1600)の遺物として扱う傾向があり、またその出土はたいへん少量であった。ましてやこれに先行するのではないかと思われている岸岳系唐津の出土は皆無であった。ところが第2号溝状遺構の出土遺物中にわずかに3点はあるが岸岳系唐津が含まれていた(No6、No17、No27)。そのうちNo17、No27は山瀬窯のものである。No6についても窯は不明であるが、いずれも岸岳系唐津の特徴である薬灰釉を施している。こうした岸岳系唐津は、1594年に岸岳城主波多氏が改易されるとともに陶工たちも離散してしまったといわれており、生産年代も限定できよう。とすれば、これらの岸岳系唐津こそ正に毛利期(1589～1600)のみに生産された遺物であり、毛利期の住人しか広島においては入手できなかったものである。逆に胎土目積みの肥前系陶器はその後もつくり続けられるのであり、福島期の住人も入手できたものである。当然胎土目積みの肥前系陶器の出土を以て毛利期の遺物とはいえず、むしろ他の消費地遺跡の調査例からも胎土目積み肥前系陶器は17世紀に入ってから多く見られるようになり、そのピークは17世紀第1四半期頃である。¹¹今後は岸岳系唐津の出土状況が遺構の絶対年代を推定する上で重要な要因となってくるものと思われる。

瀬戸・美濃系陶器 同じく第2号溝状遺構からは、広島城下で初めてまとまった量の瀬戸・美濃系陶器が出土した。これまで中世の山城の調査等を含めて市内の遺跡からこれだけまとまった瀬戸・美濃系陶器が出土した例はなく、その流通経路とも絡めて注目される。

No31、No32は生産年代が16世紀後葉に比定される大窯期の皿である。No31は体部内面にソギの入る灰釉折縁皿で、大坂城分類では折縁皿B類にあたり、大窯IV期の製品である。No30、No33～No35、No38は長石釉を施したいわゆる志野である。No30は黒茶色と黄白色の2種類の胎土を層状に練りたいわゆる練り込み志野で高級品と思われる。No35も一部しか遺存しておらず全体は不明であるが、外面体部に粒状の粘土塊を張りつける向付である。No38は鉄釉を施した後それを文様状に搔き取り素地を出し、その上に長石釉を重ね掛けしたいわゆるネズミ志野の一種と思われる。No36は黄瀬戸で、独特の淡い黄色の釉薬を施し、外面には花唐草文の一部と思われる陰刻文がある。黄瀬戸の出土はこの1点のみである。No37は織部の向付で、内外面の一部に鋼緑釉による文様がある。織部の出土はNo37を含んで2点のみである。

その他、第3号溝状遺構からはNo57のひょうそく、No58の水壺が出土した。

第2号溝状遺構からの出土遺物を見れば、16世紀末～17世紀初頭の瀬戸・美濃系陶器については、志野を中心とした向付・茶碗等の高級品が多く、いわゆる日常雑器は少なかったことがわかる。出土の絶対量も少

ないことから、瀬戸・美濃系陶器の流通は高级品に限られたごく小規模なものであったことが窺われる。あるいは福島期住人による持込みの可能性もある。

福岡系陶器 第2号溝状遺構からのみの出土である。碗・皿・瓶・壺・擂鉢等が出土した。薺灰釉を施すものが多く見られることが特徴であるが、中でも薺灰釉と鉄釉を重ね掛けしたり混ぜたりしたと思われるものが目立つ（No41, No43, No46）。No39は天目碗の口縁部の一部で漆繕ぎが見られる。No42は薺灰釉を施すが、焼成が悪く剥落しているところがある。No46は鉄釉を施した後、薺灰釉を重ね掛けする。No48は瓶の口縁部の一部であるがやはり薺灰釉を施している。No51は擂鉢であるが、施釉の有無がはっきりしない。これまでの広島城の調査においても福岡系の陶器について報告がなされている。それらも大部分は17世紀前半の生産年代が与えられている。すなわち、福岡系陶器については、量的には少ないながらも16世紀末～17世紀初めないし前半の広島の陶器市場において一定のシェアを確保していたものと考えられる。ただ、流通経路の問題もあるが、圧倒的なシェアを誇る肥前系陶器に対して、「福岡系」陶器という独立した産地として認識されていたのかどうかはもちろん不明である。

関西系陶器 第3号溝状遺構から数点出土した。第2号溝状遺構からの出土はない。すなわち、從来指摘されているように、関西系陶器が広島において一定の市場を占めるようになるのは18世紀後半頃からであるということを示しているのである。

その他 楽焼の高台が1点（No53）出土した他、地方窯のものと思われる遺物も第3号溝状遺構から数点出土している。楽焼の出土は広島では初めてであるが、瀬戸・美濃系の茶陶の出土と合わせて、近世初頭における上級武士たちの生活文化を知る上でたいへん貴重な資料であると思われる。

（2）焼き締め陶器

焼き締め陶器は備前産と丹波産、肥前産、信楽産が出土したが大部分は備前産である。

第2号溝状遺構からは備前産の擂鉢、平鉢、壺、瓶等、丹波産の擂鉢、大平鉢、肥前産の擂鉢が出土した。そのうち多くを占めたのは備前産の擂鉢である。細片ばかりのため全体ははっきりしないが、確認できるものはいずれも擂目は底部と体部の境から口縁部に向かって真っ直ぐ手前に引いた後、さらにその上にかぶさるように同様の位置から今度は斜め手前に引いている。外面口縁部に2条の凹線がめぐるものが多い。第3号埋甕遺構には18世紀の備前産擂鉢（No120）が使用されていた。No62は備前産平鉢である。内面には朱泥が塗られている。No65は丹波産の擂鉢である。擂目は底部と体部の境から口縁部に向かって真っ直ぐ手前に引く。その隙間に擂目と少し重なり合うようにし、隙間がないように引いていく。No68は肥前産の擂鉢である。外面体部に凹線が見られる。底部はくり底である。擂目は底部と体部の境から口縁部に向かって真っ直ぐ手前に引き、放射状に付けていく。その後その隙間に埋めるように再度擂目を付ける。No66は信楽産の擂鉢である。

近世広島における焼き締め陶器市場については報告例が少なくはっきりしない。しかし、第2号溝状遺構出土の遺物の様相から16世紀末～17世紀初頭については備前産が大部分を占めていたことがわかった。近世全体を通してやはり備前産が多いような印象ではある。地理的な条件から考えてもごく自然のことのように思われる。また、幕末頃には堺産の擂鉢も目立つようになる。

（3）磁器

肥前系磁器と中国製輸入磁器及び姫谷焼が出土した。第2号溝状遺構から出土した磁器はすべて中国製であった。このことから、第2号溝状遺構は肥前系磁器の出現前までしか機能していなかったものと考えられ、同遺構の終末時期を考える上で重要である。第2号溝状遺構出土の中国製輸入磁器は、大きく龍泉窯産、景德鎮産、福建・廣東系の3種類に分けられる。龍泉窯産のものはNo72のみである。これは生産年代も15世紀

後半から16世紀中頃までさかのぼるもので、本遺跡出土遺物中最も古いものであるだけでなく、広島城遺跡出土遺物中最古のものである。景德鎮産のものとしてはNo74～No77がある。No74はいわゆる饅頭心の碗の底部で、大坂城では本願寺期（～1583）において出土の多い高台高の高いものである。^四見込部に牡丹唐草文を描くが、主文様の周りをダミで埋め文様部分を白抜きにする。高台内には方形枠に文字を書くがくずしがひどく判読できない。しかし、大坂城出土の類例から「富貴佳器」と思われる。No75は線画を描いた後ダミで塗りつぶしもある。塗りつぶしは他の景德鎮産のものも余り丁寧ではない。No76は唯一の色絵である。赤、緑、褐色の3色を用いて植物文を描く。No84は白磁である。No74と同様に高台にも施釉し、疊付け部分の釉を搔き取っている。高台は内湾するように削り出す。No78～No83は福建・廣東系の青花である。No82は皿の底部で、高台は荒く断面台形に削り出し、高台内には施釉しない。^五No78、79はいずれも粗製の碗で、疊付けにはモミガラが付着しており、大坂城では豊臣後期（1598～1615）から徳川初期にかけて多く出土している。^六口縁部は遺存しないが類例からNo78は内湾、No79は外湾するタイプと思われる。第1号溝状遺構出土のNo72も福建・廣東系の青花である。

広島城遺跡においてこれだけ多くの輸入磁器が出土したのは初めてであり注目される。これまでの調査でも景德鎮産のものや福建・廣東系のものはいくらか出土しているが、^七龍泉窯産のものは前述のように初めてである。また、これまでに出土した中国産輸入磁器は今回出土のものを含めて多くが16世紀末から17世紀に生産されたものである。これは、広島の陶磁器市場において17世紀初頭頃までは輸入磁器が一定のシェアを持っていたことを示しているとともに、その後肥前系陶磁器の生産・流通の拡大とともにそのシェアを失ったことも示している。こうした傾向は大坂城、富田川等の他の消費地遺跡の動向とも一致するものであるが、大坂城等では比較的遅い時期（徳川初期）まで中國産輸入磁器が一定のシェアを占めているのに対し、広島の場合は第2号溝状遺構の出土状況等から比較的早くその転換が進んだのではないかとも考えられる。大坂城では豊臣後期に出土の多い芙蓉手が広島城では全くみられないこともそうしたことを感じさせる。

肥前系磁器は主に第1次調査区から出土した。その大部分は細片で、図示できたものは少ない。No85～No93はいずれも第3号溝状遺構から出土した。これらは、17世紀前半～19世紀前半の生産年代の与えられるものである。No90は碗の蓋で、見込みに五弁花、高台内に二重方形枠の「渦福」を描く。No94、No95は石列遺構の東側に散乱していた礫群中から出土した。No94は型打ち成形によるひだ皿である。No95は瓶の頭の部分であろう。

（4）瓦質・土師質土器

ここでは陶磁器、焼壺壷以外の土器類を瓦質・土師質土器として一括して述べる。ここで特に瓦質土器と土師質土器を分類しなかったのは、鍋・小皿等にわざわざ種々複雑な遺物が存在し、色調・胎土・焼成等によつて両者を区別することが困難であると思われたからである。

まず皿類について述べる。大部分は直径10cm程度の小皿である。第2号溝状遺構からは多数の小皿類が出土したが、その色調・胎土・焼成等の特徴はそれこそ遺物の数だけある。また、底部から口縁部までの全体像がうかがわれる遺物がたいへん少なく、大部分は細片である。そのため器形による分類も困難である。そこでここではこうした特徴による分類をあえてせず、比較的他者との相違が分かりやすい底部の成形方法と糸切り離し痕の観察によっていくつかの群を抽出するに留めた。

A群：内底面には渦巻き状の成形痕が明瞭に残る。外底面は中央部に粘土が残り台状を呈する。右回転の糸切り離し痕が明瞭に観察される。色調は褐色系で胎土はやや粗、焼成は軟調である。No101がこれにあたる。

B群：内底面には渦巻き状の成形痕が明瞭に残る。外底面には水平糸切り痕が明瞭に残る。色調は褐色系で胎土はやや粗、焼成は軟調である。No102がこれにあたる。

C群：外底面は回転糸切りでその上に板目状の痕跡が残る。薄手である。色調は淡肌色から黄白色、胎土はたいへん精緻で焼成も良い。No103がこれにあたる。

D群：内底面は渦巻き状の成形痕をなで消しており、外底面も糸切り痕を消そうとしたものか板目状や刷毛目状にこすったような痕跡が見られる。色調は黒灰色、胎土は精緻で焼成も良い。No104、No105がこれにあたる。

E群：内底面には渦巻き状の成形痕が明瞭に残る。外底面には右回転の糸切り離し痕が明瞭に観察される。色調は黄白色～黒灰色、胎土は精緻で焼成も良い。No106がこれにあたる。

大きく分ければA、B群がいわゆる土師質の特徴を持ち、D、E群が瓦質の特徴を持つといえよう。C群についてはその中間的色合いを持つ。器形については前述のように完形の遺物が少ないため明確にしがたいが、いずれも平らな底部から体部が直線的ないしは内湾しつつ立ち上がるようである。外湾ないし外反していると明瞭に認められるものはなかった。またB群はA群よりも底部径に対して口径が大きく、体部の立ち上がりがゆるやかである。

さらにこれらの5群には含まれない特徴を持ったものもいくつかあり、またこれらの5群もさらに細分される可能性がある。こうした特徴が何に由来するものであるのかここで判断することは困難である。しかしながら胎土、成形方法等が異なる遺物が混在しているのであるから、複数の産地、工人を想定しなければなるまい。特に第2号溝状遺構は毛利期～福島期の遺物を含んでいると考えられるから、福島正則への領主交代に伴う土師質・瓦質器供給体制の変化が反映しているものかもしれない。

No108は内外面に金箔を施したものである。E群に含まれようが少し厚手である。大内氏館跡でも類例が見られ、井戸を埋める際の祭祀用と考えられている。本遺物については実用品であるかどうかも不明であるが、1点のみの出土でありいずれにしても特別な製品であることは間違いない。

その他の器種としては鍋、火鉢、羽蓋、燭台等が見られる。第2号溝状遺構からは3点の鍋が出土した。No98は口縁部を外反させたのち端部を下垂させ把手とする。No99は口縁部が水平になるまで強く外反し内耳が付き径1cmの穴を2か所に穿孔する。No100は体部と口縁部の境に粘土の継ぎ目があり、口縁部は外へ開きながら内湾する。端部は平らにする。内耳が付き径9mmの穴を2か所に穿孔する。いずれも色調は黒色から灰色で焼成も良い。第3号溝状遺構から出土したNo112は器形はNo99と同様であり、現況では内耳は見られないが欠損部分にあった可能性はある。色調は灰白色で胎土も密、焼成も良い。しかし、第3号溝状遺構からは同じ器形で色調が黄褐色、焼成は若干軟調のNo.113も出土している。鍋については市内の中世山城の調査で何点か出土している。池田城、北谷山城等で見られるものは、器形はNo100によく似ているがいずれも口縁端部が水平でなく、中央部が窪むものが多い。しかし同系統であることは間違なく、中世的な流れを引くものと考えられる。このタイプのものは広島城関連の他の調査でも出土例は報告されておらず、近世初頭において姿を消す可能性もある。逆にNo98、No99、No112、No113のような口縁部を大きく外反せるものは中世山城から出土していないことから、これらの器形は近世的な形態であるとも考えられる。類例が外郭櫓台跡及び富田川遺跡から出土している。

No96、No97は火鉢と思われる。いずれも色調は灰色系で胎土は密、焼成も良い。No96は体部に窓状のあきがある。No97は口縁部であるが、外面に菊花文のスタンプが押されており、郡山城遺跡、北谷山城遺跡に類例が見られる。

(5) 焼塩壺

焼塩壺は第2号溝状遺構から身が22点、蓋が8点出土している。そのうちほぼ完形のものはそれぞれ9点、2点である。第3号溝状遺構からも細片が1片出土した。その他にも全体の器形のわかるものが2点出土している。

まず、第2号溝状遺構から出土したものについて見る。これらの身のうちNo1, No2に「ミなと藤左エ門」、No3に「ミなと泉○」の刻印がある。「ミなと藤左エ門」は大坂・難波屋の刻印の最も古いものとして知られ、^昭1654年に同商店が「天下一堺ミナト藤左エ門」の刻印に改めるまで使用されたとされる。「ミなと泉○」については管見によると全国で初見である。ただ、「ミナト」の部分は「ミナト藤左エ門」のものと全く同じ書きぶりであるように見えることや、二重の方形枠内に2段に分けて書かれていること等も全く同じであり、大きく異なった性格の刻印であるように思われる。

器形については完形の身9点のうち6点が渡辺分類のA型である(No1～No6)。A型のもののうちNo1はきわめて精良なつくりで他と一線を画す。内面口縁部を丁寧に幅広につくり出し、内口径が狭くなるのが特徴である。他に同様の細片が1つある。No2とNo3は刻印は異なるがいずれも尻広がりのどっしりしたつくりでよく似ている。No5は内面口縁部にしばり痕が見られ、外面頸部のくびれがほとんどない。以上のように個体によって多少の差異はみられるものの、いずれも輪積み成形で外面全体と内面口縁部にナデ調整を施し、内面には布のくびれ痕が見られる等基本的な器形、つくりは同一である。

しかし、No7～No9の3点はNo1～No6とは器形、つくりが明らかに異なっている。外面は部体から口縁部にかけてすばり撫で肩になるが、内面は口縁部を作り出そうとしている。外面と内面上半はナデ調整を行うが、外面には指頭圧痕が顕著に見られる。胎土は比較的密で焼成も良好である。成形方法は一旦筒状の粘土塊を作った後に、口になる方から工具で中の粘土をえぐり取ったように見受けられ、布目痕は見られない。^昭コップ型の身の成形方法には輪積み成形、板作り成形、ろくろ成形の3種類があるといわれているが、これらはそのいずれにも属さないものと考えられる。A型のものと比べてかなり重く、すなわち内面の空間が少なく、当然その容量もA型のものよりかなり少ない。ただ、こうしたタイプのものも、A型のものと同様に露母の混じった壜のものと思われる土を使用していることから、产地は同じと考えられる。そのため、これら2タイプの身の器形・つくりの違いは身を製造する下請け業者の違いに由来するものとも考えられる。ここでは便宜的に後者のタイプをA'型と呼ぶ。ちなみにA'型のものは大坂城の調査で何点か出土している。

今回第2号溝状遺構から出土した9点の完形の身は、A型の無刻印のものが3点、A型の「ミナト藤左エ門」の刻印を持つものが2点、A型の「ミナト泉○」の刻印を持つものが1点、A'型の無刻印のものが3点、A'型の刻印を持つものはなかった。これらの焼塩壺はすべて調査区の14W区のきわめて集中した範囲から積み重なるように出土しており一括廃棄の可能性は極めて高い。その中でこうしたいくつかのバラエティーを持つ個体がみられるということはきわめて興味深い。焼塩壺がどのような形態で販売されていたのかは定かではないが、A型のものは容器が画一化されておらず、秀品に代表して刻印されていたとの考え方を引用すれば、何個ずつかのセットで販売されており、そのうちのいくつかに代表して刻印があったと解釈できる。また、その1セットの中には作り方の異なった、つまり異なった下請け業者の製品が混在していたのかもしれない。A'型のものに刻印をもつものがなかったことはそうした状況も予想させる。

ただ、いくつかの疑問も残る。まず、もしそうであるなら同じセットの中に内容量の異なる個体が混在していたことになる点である。焼塩壺は一種のブランド品であり、その存在に価値があった贅沢品であるから、内容量については無顧慮であったのだろうか。もうひとつは同じセットの中に異なる刻印のものがあったの

ではないかという点である。出土した焼塙壺は1セットではなく数セットで、「ミナト藤左エ門」と「ミナト泉○」のセットがあったのかかも知れない。

第2号溝状遺構以外から出土した2点の身(№10, №11)はいずれも京都・木野産と思われる。渡辺分類のE型にあたる。いずれも胎土は精緻で焼成も良好である。

蓋についてはいずれも渡辺分類のA型で身のA型に対応すると思われるものである。いずれも内面天井部周縁及び口縁部内外面に比較的強いヨコナデを施し、内面天井部周縁には凹面が巡る。特に№14, 15は外面口縁部のナデが強く、外面口縁部上半にも凹面が巡り、天井部との境には明瞭な稜線が見える。№12, №13は大坂城分類のii類にあたり、№12がその(大), №13が(小)にあたろう。

出土数からいうと身に対して蓋がかなり少なく、果たしてA'型の身にも蓋があったのか疑問が残る。

(6) 瓦

平瓦の破片の出土が最も多かったが、ここでは軒丸瓦を中心報告する。観察表については、最も研究の進んでいると思われる大坂城と比較するため、それと同じ計測数値を示した。№1は外区内縁に圓線の巡る珍しいものである。圓線の巡るもの自体が広島城では初めての出土であるが、外区内縁にめぐるものについては大坂城の調査でも出土例は少なく特異なものとされる。胎土が灰色で他のものと異なっている。巴文は頭部と尾部の境はきわめて明瞭である。尾は細くたいへん長く、先端は他のそれに接続している。文様は全体的に低く、珠文も他のものに比して低く小さい。焼成は軟調でひび割れも入りつくりは決して良くない。これらの特徴は中世的な様相を残すものであると言えるかもしれない。№2は瓦当径が17.6cmもあり、大坂城分類では大型瓦になる。巴文は大きく頭部と尾部の境は明瞭である。外区外縁の瓦当径に対する割合が26.1%と低いのが特徴である。瓦当裏面は周縁部に沿ってナデる。瓦当と丸瓦の接続部は瓦当頂部よりやや下がった位置に接着されており、接着部下端は丸瓦側面に粘土を加えて緩やかに瓦当裏面に接着している。釘穴は玉縁部と丸瓦部の段から2.5cm瓦当よりに穿孔されている。丸瓦部は両端を2回ずつ面取りしたのち角を取るように丸くナデるが一部角の残っている部分もある。丸瓦凹面に布目痕がある。不明瞭であるがコビキBである。№3は瓦当の一部しか遺存していないため、復元推定数値に頼らざるを得ず、そのため数値に若干の違いがあるが、同じ范キズが見られ№2と同范である可能性がある。№4は唯一全長のわかるもので32.8cmある。瓦当裏面の調整や丸瓦との接着方法は№1と同様である。№2, №3と良く似た特徴を示し、外縁比が低い。ただ、これも復元推定数値のためはっきりしないが、№2, №3よりも内区比が低いようである。丸瓦部は両端を2回ずつ面取りをしているが、一方はナデを施し角を取るのに対してもう一方はナデを施さず角が明瞭に残る。丸瓦凹面の中央部に布目痕、玉縁との接着部付近にはゴザ状圧痕が見られる。不明瞭であるがコビキBである。釘穴は丸瓦凸面から穿孔しており、玉縁部と丸瓦部の段から4.0cm瓦当よりに穿孔されている。また、釘穴は丸瓦の頂部からやや下がった位置にある。№5は№2～№4に比べて瓦当径が短く(大坂城分類では中型)、外縁比が高く、内区比が低い。巴長も№2の74.0%に対して59.7%とかなり短くなっている。№2～№4とは明らかに異なる形態のものである。№6は№5よりもさらに一回り小型で(大坂城分類では小型)ある。外縁比が高く、内区比が低い、巴長が短い等の特徴は№5と共通しており瓦当と丸瓦の接着方法は№2と同じである。また、丸瓦凹面には布目痕は見られず、縦方向の長方形の圧痕があり、№2～№4とは製作方法にも明らかな違いが看取できる。№7は第3号溝状遺構出土で瓦当面はかなり粗雑なつくりである。№8は菊文瓦、№9はコビキBの行基瓦である。

これらの瓦を高櫻城の出土瓦分類に当てはめてみると、いずれにもハナレ砂の使用が見られないという大きな違いがあるが、№1は巴文の頭部と尾部の境が明瞭なためそのまま分類すればC群のIVまたはVになる

が、圈線もありその様相は明らかにB群に含まれるものである。No.2, No.3はC群X I, No.4はC群又はD群, No.5はD群X II又はX III, No.6はD群XIVにそれぞれ該当しよう。それぞれC群は珠文の大型化等瓦当文様の形式化がおこったもの、D群は瓦当文様における巴文の割合が著しく小さくなり、個性がなくなり画一化したものと捉えられている。そしてB群は室町から安土・桃山時代の系譜を引くもの、C群は元和から寛永、D群は寛永から正保という生産年代が与えられている。

一方、大坂城における豊臣前期（1585～1598）と豊臣後期（1599～1615）のそれぞれの出土瓦の分析によると前期から後期に移行すると以下のような傾向が見られるという。①瓦当径は短くなる、②巴長は短くなる、③外縁幅は広くなる、④外縁高は高くなる。

以上のような考察から、それぞれの瓦に生産年代を与えることはむずかしいとしても、どうやらこの6つの瓦はNo.1, No.2～No.4, No.5～No.6に大きくグループ分けでき、上記の順に古いと考えられるようである。ただ、No.1については他の5点と比べてかなり特異であり、同列に扱うことが適当ではないかもしれない。

ここで唯一広島城関係で生産年代の押さえられる亀居城出土の軒丸瓦と比較してみたい。亀居城は1603年から築城工事が開始され、1608年に完成したといわれている。しかし、その後1611年には廃城になった。当時瓦は他の建築物から持ってくることも多かったため、もちろん断定はできないが、1608年以前の数年間に生産された可能性が高いものである。亀居城出土の軒丸瓦として3点が、また鳥糞の瓦当として1点が報告されている。この4点について報告書の実測図から計測数値を出してみた。すると内区比は65%～68%，外縁比は36%～38%ときわめて似通った数値が得られた。これらの数値は今回出土した6つの軒丸瓦のNo.5～No.6のグループの値にたいへん近いものである。瓦当面の観察においても特にNo.5と似通っている印象を受ける。もしこれらの亀居城出土の瓦がNo.5と同時期のものとすれば、必然的にNo.1, No.2～No.4の瓦はそれ以前に生産されたものということになる。

今回出土した瓦のうちNo.1～No.5はいずれも第2号溝状遺構から出土したものである。前述したように遺構の年代は共伴する陶磁器から16世紀末から17世紀初頭のかなり限られた時期であることは間違いない。つまりこの限られた期間にNo.1→No.2～No.4→No.5への変化が起こったことになる。そして、先に高槻城の分類で触れたところであるが、室町～安土・桃山時代の系譜を引くB群から、次第に瓦当文様が形式化し（C群）、瓦当文様における巴文の割合が著しく小さくなり個性がなくなり画一化していくという。すなわち、この5つの瓦はそうした瓦の変化を一定程度反映しているとみてもいいのではあるまいか。つまり中世的様相を強く残したNo.1から近世的様相を持ったNo.5への変化である。そして亀居城出土の瓦がすでに画一化された近世的様相を持っているということは、その変化は広島においては毛利から福島へと領主が変わった頃にもたらされたものと考えてよかろう。

また、遺構外からではあるがNo.8の菊文瓦が出土した。広島城の從来の調査では、金箔瓦^切、五三桐文瓦^四、菊文瓦^五がいくつか出土している。これらの瓦は豊臣政権とのつながりが強く指摘されるもので、今後の検討課題となろう。特に、広島城築城にあたっては、秀吉腹心の黒田官兵衛が指揮にあたったとの記述が見られることや、築城中に秀吉自身が広島城に立ち寄りこれを賞賛していること等、文献上も広島築城に対し秀吉がみなみならぬ关心を示していることが想起される。

（7）木製品

箸 第1号溝状遺構から完形品2本を含む21本、第2号溝状遺構から完形品6本を含む61本の箸が出土した。両遺構から出土した完形品8本の長さは、1本21.9cmのものがある以外はすべて24cm台である。ほぼ8寸に揃えてあると思われる。太さは中央部で0.5～0.6cm、両端で0.4～0.5cm程度のものが多い。形状は全体を断

面が長方形から正方形になるように削ったのち、さらに両端を丸くなるように削ったものが多く、個体によって四角張ったものや、丸みがかったもの、扁平なもの等の差が見られる。しかし、いずれもつくりとしては同じ物で分類するほどには至らない。

江戸遺跡では出土した箸を4種類に分類した例がみられるが、それを引用すれば今回出土した箸は寸胴箸の整形が余り良くないものになろう。長さも8寸前後のものが多く一致している。ここでは長さが8寸以上の太両細の箸はハレの席で使用された可能性が高いとしており、本遺物もつくりはやや難ではあるものの、そうしたものであるのかもしれない。

また、No3は、長さが27.8cm、太さが中央で1.05cm、端で0.6cmもありかなり大型である。そのため菜箸等の可能性もあるが他の製品とも思われるため上記の本数には含めていない。

楊枝 No4、No5はいずれも楊枝と考えられる。楊枝についても江戸遺跡出土の例が報告されているが、それによればその形状は箸の中央部を鋭い刃物で切断したように作られているものが多いという。報告したものはいずれも先が尖っているが、この他にも先がこれらのように鋭く尖らないものもあった。

下駄 下駄は第1号溝状遺構から4点、第2号溝状遺構から2点の計6点が出土している。そのうち第1号溝状遺構出土の1点は一部分のみであるので、残りの5点について報告する。No6、No7、No8、No9はいずれも連齒下駄であり、すべて市田分類の「I-1-A」にあたる。そのうちNo7のみは平面形態が丸く、小判型に近く古泉分類の「第I類-2-a」にあたる。他の3点については平面形態がいずれも隅丸長方形を呈し、No6、No8が「第I類-1-a」に、No9が「第I類-1-b」にあたる。この4点はいずれも横縫穴が後歯の前へある。No7は長さが17.6cmと短く、子供用と思われる。横縫穴は完全に後歯の前へあり、ほぼ真下へ穿孔するが、台表からは丸い穿孔が、台裏からは四角い穿孔が行われている。両歯とも磨滅が著しくほとんど遺存しない。No8は左横縫穴が若干前方にある。後歯の方が磨滅が著しい。また、前歯と右横縫穴に鼻緒の植物質が遺存している。No6は長さ、幅ともに広くがっちりしている。台は後方がやや狭まり、台表尻部には「干」状の彫り込みがある。後歯の方が磨滅が大きい。No9の台は後方がやや狭まり、表面が炭化している。前後両歯とも右側の方が幅広になる。No10は差歛下駄で市田分類の「III-1」にあたる。また、古泉分類では「第III類-2-b」にあたる露卯下駄である。平面形態は長楕円形である。台裏の中央部分は同形の平坦面を削り残しており、そこから周縁に向かって斜め下に削り落とした形状になる。ほど穴は前後に1つずつしかなく、上面観は若干左右に長い長方形である。横縫穴は後歯の前へあり、台表から台裏へ前方内側へ穿孔しているものと思われるが、腐食が著しく明確でない。

以上出土下駄について見てきたが、その結果は連齒下駄が4点、差歛下駄が1点となるが、前述した一部のみ出土したものも連齒下駄であるから連齒下駄が5点、差歛下駄が1点と考えてよからう。これらの下駄は共伴する陶磁器から16世紀末から17世紀初頭のものと考えられるが、他地域の出土の様相と比較してどうであろうか。富田川遺跡では市田分類の「I-1-A」(60%)と同「III-1」(36%)で96%を占め、仙台城三の丸跡でも85% (各43%, 42%) を占めている。特に両地域で「III-1」類の割合が多いのは多雪地帯であることが関係していると思われるから、本遺跡においては「I-1-A」類が多いこともうなずけよう。大坂城三の丸跡、堺環濠都市遺跡では「I-1-A」と「III-1」がそれぞれ68%・2%, 43%・15%で各70%, 58%とやはりその大半を占めるが、富田川や仙台城に比べるとその割合はかなり低い。これは「I-5-A」や「I-3-A」等の「庭下駄」に類するものが多いからで、その都市化した様相が窺われるといふ。そうしてみれば、自ずから広島という町の近世初頭における位置がわかるようである。しかし、これまでの広島城の調査全体を通してみると、少ないながらもこうした「庭下駄」に類するものや無歛下駄の出土

も見られる。江戸遺跡では近世中頃以降こうしたものへの嗜好が感じられるといわれているが、広島でも大坂や堺には遅れるものの後にはこうした下駄類も出現してきたものと思われる。

曲げ物 No11, No12は蓋, No13は底である。No11は原型が円形を呈していたと考えられる。縁辺部を「L」字状に削っている。削られて引っ込んだ部分を曲げ物の側板上端にのせたものと思われるが、その外縁は側板の外へ張り出していたものと思われる。中央部につまみのものと思われる穴があり、その周辺が炭化している。No12も縁辺部を「L」字状に削っているが、その形状から考えて外縁は側板上端と一致していたと思われる。外面が丸みを帯びており、炭化している。つまみ穴が無いため明確でないが、外面が丸みを帯びていることから蓋とした。No13はただの円板で木釘の跡等もみられないが、側板内面にはめ込まれた底板と思われる。

樽 No14, No15は樽の蓋である。No14は中央部に墨書が見られ、「正」と書かれている。屋号のようなものであろう。3枚以上の板を木釘によってとめたものである。No15は径2.2cmの穴を持つ。栓があったものと思われる。3枚以上の板を木釘によってとめたもので、木釘は平らな板状である。全体に削り跡が顕著に見られ一部が炭化している。

側板 No16, No17, No18は樽又は桶の側板であると思われる。いずれもややアールのついた尻すぼまりの板材で、外側にはタガのあとと思われるくぼみが見られる。

木簡 No19, No20はいずれも墨書が見られ、いわゆる木簡である。No19は片面に「上之百文」の墨書がある。正札のようなものと考えられる。No20は片方を尖らせ、もう片方にはくびれが見られる。両面に墨書があり、片側には「□□□□斗二升三合」と書かれ、もう一面には一文字書かれているが判読できなかった。その単位から味噌や塩のようなものにつけられた荷札と考えられる。

漆椀 No21, No22は漆椀である。いずれも完形でなく全体は不明である。No21は外面に黒漆、内面に朱漆が塗られ、外面に朱漆で梅の文様を描く。器高が低いので蓋であると思われる。No22も外面に黒漆、内面に朱漆が塗られ、外面に朱漆で桐の文様を描く。高台内の挽き込みは、高台外部の付け根より浅い。

その他の木製品 No23は形はいわゆる羽子板である。しかしながら大きさが実用品とは考えにくいことから形代として用いられたものと思われる。No24はたいへん丁寧に整形されている。断面形は刀の刃のように片面のみ削り落とされており、全体が反っている。全体に墨書のような痕跡が見られるが、はっきりそれとわかるのは3か所「」「」状の印が描かれたものと、判読はできなかったが漢字が一文字書かれたものである。定規のようなものである可能性が高いと思われ、3か所の「」状の印は目盛りとも考えられる。しかし「」状の印の間隔は等しくなく疑問も残る。刀形のようなものとも思われるが確認できなかった。No25は栓と思われる。截頭円錐形で、握りと差込み部分が分かれていないのである。徳利等の栓として利用されたものが多かったと考えられている。No26は箱物の蓋の一部であると思われる。全体に黒漆が塗られ、そのち金泥で鶴や山、庭園と思われる文様を描く、いわゆる蒔絵である。高級品であると思われる。No27は箱物の側板と思われる。両端は組合わせるようになっており下半分が切り落とされている。この部分以外は全体に黒漆が塗られている。組み合わせ部分には木釘の跡が見られる。

(8) 金属製品

釘と火箸が出土した。No1～No7は形状、大きさとも少しずつ異なるが、いずれも釘と思われる。体部の断面形は正方形から長方形を示す。No1とNo5以外は頭巻き釘で頭部を前へ叩き曲げる。No2, No4, No7は体部から頭部にかけて徐々に幅を減じてゆくのに対して、No3, No9は頭部と体部の幅が異なり明瞭に頭部をつくりだす。No8とNo9は火箸である。No8はサビが激しくはっきりしないが断面円形、No9は断面六

角形のいずれも先細りの棒状である。No.9はススが全体に付着し一部赤変している。

(9) ガラス製品

第2号溝状遺構から2片出土した。表面は黄白色で光沢を持つ。

(10) 動植物遺骸

第1号溝状遺構からはマガキの殻、スズキ・マダイ・ガン類・イヌの骨がそれぞれ出土した。第2号溝状遺構からは、サザエ・アカニシ・アカガイ・ハマグリ・テングニシ・アサリの殻、スズキ・ニホンジカ・ウシ・ネコ・ツキノワグマ・ヒメウ・カモ類・イヌの骨及びオニグルミ、モモの種子が出土した。このうち、アカニシは内湾の砂泥低地で多産したもので、殻の背面に焦げた痕跡の見られるものがあることから、地物のものを「壺焼き」のような方法で調理したものと思われる。テングニシは西日本に多く大型の貝であるが、これも食用であったと思われる。スズキ、マダイは出土遺骸がいずれも大型であり、特に食用として選択して供給されていると思われる。本遺跡の性格とも関わりがある。ガン・カモ類については当時盛んに食用に当たられており、同時期の遺跡からの出土例も多い。しかし、ヒメウについては出土例は稀で、出土した頭骨には金属器による切断痕があり食用以外の他の用途への使用も考えられる。ニホンジカは出土個体数も多く噛み跡や齧り跡が見られるものもあり食用であろう。ツキノワグマは出土例は珍しく解体時の加工痕が見られる。イヌ・ネコ・ウシについては一般的な家畜であって出土例も多い。ウシの頭骨には明らかに刃物で切断した痕跡を持つものがあり、食用に解体したものと思われる。オニグルミは当時食用としていたと推定され、周辺部から採集してきた可能性がある。モモについては当時広く国内で栽培されていたと思われ、広島近郊でも近世において栽培されていた可能性がある。

(II) 小 結

ここでは、溝状遺構から出土した一括遺物、特に絶対年代推定の有力な根拠となる陶磁器類を分析し各遺構の絶対年代を推定するとともに、特に良好な一括性を持つ第2号溝状遺構からの出土遺物について検討してみたい。

〔出土陶磁器からみた溝状遺構の年代について〕

第1号溝状遺構 本遺構からの出土遺物はたいへん少量であり、特に陶磁器・土器類の出土が少ない。また、遺構の土層断面から2次的な掘り込みも確認され、調査時にトレンチを遺構上に入れることもあってか出土した陶磁器類の生産年代にばらつきが見られる。こうした事情から本遺構の年代は正確には決めがたい。しかし、少量ではあるが胎土積みの灰釉皿が出土していること、位置的に第2号溝状遺構のすぐ北にあり同一直線上に伸びていることから、第2号溝状遺構と同時期のものである可能性が高いと思われる。

第2号溝状遺構 本遺構からは総数で509点の陶磁器・土器類が出土した。内訳は表-2、3、4のとおりである。本遺構出土の陶磁器・土器類の最大の特徴は肥前系磁器いわゆる伊万里を含まないことである。すなわち肥前系磁器の出現・流通前に埋め戻されていたことになる。肥前系磁器の出土初見時期については大坂城で1631年前後という報告がある。文献資料等から肥前で磁器焼成が始まったのは1610年頃といわれております。今後の調査の進展によりいくらか遡ることはありうるが、現時点ではこの1631年という数字が最も信頼できるものと思われる。さらに本遺構出土遺物の特徴は砂目積み肥前系陶器の割合がきわめて低いことである。一般に肥前系陶器においては胎土積みから砂目積みへ変化していったことが窯跡の調査や消費地遺跡の調査から確認されている。すなわち本遺構出土遺物の様相はこうした変化が起こりはじめた初期のものと理解されうる。大坂城遺跡において砂目積みが出土しあじめるのは1615年の夏の陣の焼土層以前と報告されているが、特に注目されるのはA Z 87-5次調査におけるS X 201からの出土遺物である。この土壤は出土状況

や出土木簡、文献上から1615年以降に掘られ1622年までに埋められた可能性が高いとされるものであるが、出土遺物で目積みの確認される299点中、砂目積みの製品はわずか12点しか確認されていない。わずか3.9%である。本遺構出土遺物で目積みの確認されるものは碗1、小壺1、皿27、大皿3の計32点である。そのうち砂目積み製品は皿の4点(12.5%)である。さらに砂目積み製品の主力である溝縁皿が出土していないことも溝縁皿出現の時期の特定とも併せて重要な点であろう。こうした遺物の様相と近世初頭の広島において土地区画等に最も大きな変化が起こったと考えられるのは、福島から浅野へ領主の交代が行われた1619年であるから、本遺構の下限は1619年の時点と推定してよいと思われる。

本遺構の出土遺物の様相はその他の点でも上述のSX201に似ている点が多い。それは①施釉陶器のうち肥前系陶器の占める割合が圧倒的に高いこと(SX201-8割以上、本遺構-76.6%)、②瀬戸・美濃系の割合が低いこと(SX201-2割未満、本遺構-7.8%)、③福岡系の陶器が比較的多く出土すること、④輸入陶磁器は大部分が青花でV類の碗が多いこと等である。特に肥前系陶器の占める割合が圧倒的に高く、胎土目積みと砂目積みの割合が似ていることから、本遺構も1619年前後の比較的短期間のうちに掘られてまた埋め戻されたとも考えられるのである。

ところが本遺構の上限を考える上でどうしても考慮しなければならないのが、數的には少ないものの明らかに16世紀末及びそれ以前に生産されたと考えられる陶磁器類の存在である。周知の如く、広島では1600年に毛利から福島へ領主が交代している。それに伴い当然本遺構西側にあったであろう屋敷に居住していた人物も代わったはずである。特にここは大身の武士たちの屋敷地であるから領主の交代後もそのまま住人が変わらなかったとは考えられない。するとすれば本遺構に廃棄されていた明らかに16世紀末及びそれ以前に生産されたと考えられる陶磁器類はいつだれが廃棄したものであろうか。考えられる可能性は次の二つである。一つは毛利期の住人がこの地ないし以前の居住地で陶磁器類を購入し、本遺構に廃棄した場合である。二つ目は福島期の住人が以前の居住地で陶磁器類を購入し、本遺構に廃棄した場合である。2番目の場合であれば本遺構の上限は1600年から1619年と考えられる。しかし、以下のいくつかの点からここでは1番目の考えを支持したい。①岸岳系唐津が3点出土しているが、これらは1594年までしか生産されておらず、よって流通もそれ以降はしていないと思われる。消費地遺跡における出土状況は未だ明確ではないが、枚方宿遺跡では1594(文禄3)年頃と思われる遺構面から集中して出土しており、16世紀後半の折縁ソギ皿を伴っている。福島期の住人が持込み廃棄した可能性もあるが、福島の先住地である清洲城からは16世紀代の肥前系陶器の出土がきわめて少なく、岸岳系唐津は出土を見ていないことから、流通していた可能性すら疑われる状況である。②No31は大坂IV期の折縁ソギ皿であるが、大坂城では豊臣前期(1583~1598)において出土例が多い。こちらは福島期の住人が清洲等から持ち込んだ可能性もあるが、きわめてありふれた日常雑器であり、わざわざ遠方から持ち込むであろうか。③No74の饅頭心の皿は高台内に名款を持つが、これは大坂城では石山本願寺期(~1583年)に多く出土するタイプで豊臣前期(1583~1598)ですら出土例は少ないと想定される。

もちろん以上のようないくつかの点を考慮してもなおかつ他の場所から持ち込まれて廃棄されたものであることを完全に否定することはできない。特に明らかに16世紀末及びそれ以前に生産されたと考えられる遺物の数が少ないためになおさらである。結局は可能性の大小の問題になる。肥前系陶器の出現は消費地遺跡の調査によってその初見はほぼ天正年間末頃に限定されてきたように思われる。しかし、あくまでも大量に流通・消費が行われるようになるのは1598年以降になってからと思われる所以、本遺構出土の肥前系陶器もその多くは福島期に廃棄された可能性が高い。そうすると毛利期に廃棄された可能性のある遺物はたいへん少ないことになる。しかしもちろん土師質・瓦質土器が陶磁器の不足をカバーしていたとも考えられ、短絡的に本遺構

表-2 第2号溝状造構出土陶磁器・土器類產地内訳
(509)

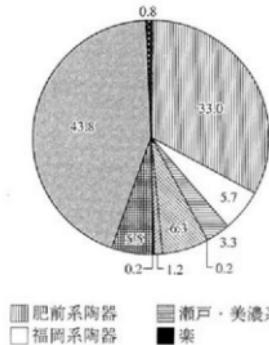


表-3 第2号溝状造構出土施釉陶磁器產地内訳
(246)

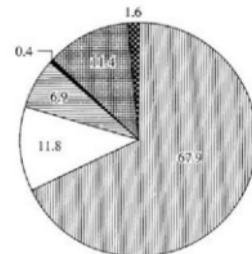


表-4 第2号溝状造構出土焼き締め陶器產地内訳
(40)

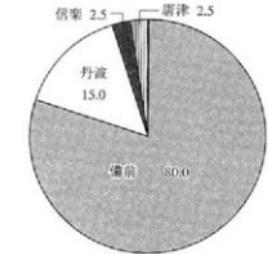


表-5 第3号溝状造構出土陶磁器・土器類產地内訳
(85)

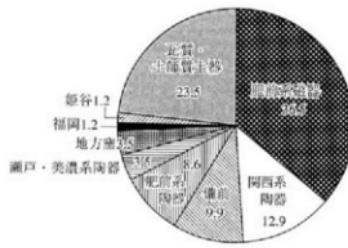
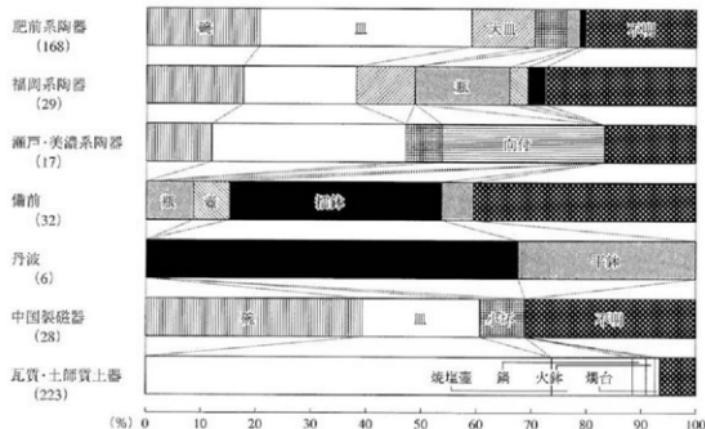


表-6 第2号溝状造構出土陶磁器・土器類產地別器種分類



が毛利期に存在しなかったことを意味することにはなるまい。むしろ毛利期に廃棄された遺物が実際に少なかった、すなわちこの場所に人が居住していた期間が短かったことを意味していると考えるべきではなかろうか。このことは、毛利氏が家臣らの在地居住を容認し、広島の屋敷は自身が藩府に出仕する当座のためのものとの指摘を想起させる。

第3号溝状遺構 本遺構からは総数85点の陶磁器・土器類が出土した。しかし、その生産年代にはかなりばらつきがある。17世紀前半の生産年代が与えられるNo85、No86から18世紀終わりから19世紀前半の生産年代の与えられるNo58、No91、No92まで幅広い。17世紀中頃から19世紀初め頃までは確実に機能していたものと思われる。長期にわたって機能していたにもかかわらず出土遺物数が少ないのは、本遺構が屋敷地の周囲の堀ないし壁の外側を巡っており、屋敷地内からの廃棄がなかったからだと考えられる。逆に第2号溝状遺構の出土遺物が多いのは屋敷地の内側にあった、あるいは屋敷地の内側から投棄できる状況にあったからではなかろうか。

[器種分類について]

第2号溝状遺構出土陶磁器・土器類の器種分類については表-6にまとめた。瀬戸・美濃系陶器に向付の割合が多く茶碗の出土とともに茶陶関係と思われる遺物の出土が目立つ。擂鉢は大部分が備前・丹波の焼き締めである。また、中国製磁器は碗の割合が高く、国産施釉陶器が皿類を中心であると好対照である。鍋は瓦質・土師質土器のみであり、施釉陶器の調理具は見られない。瓦質・土師質土器については皿類が大部分を占めるが、167点の小皿類のうちススやタール状のものが付着するものはわずか19点に過ぎず、灯明皿以外の用途で用いられていたのは確実である。

[他の消費地遺跡の出土例との比較について]

次に第2号溝状遺構出土の遺物を中心に他の消費地遺跡の例も併せて見ながら、当該時期における陶磁器・土器類の様相の特徴について見てみたい。消費地遺跡の類例としてあげたものは、基本的には出土遺物中に肥前系磁器を含まず、肥前系陶器の占める割合が高いものである。ただし、小田原城、仙台城の例については瀬戸・美濃系の割合が高いためほぼ同時期と思われる遺構を選んだ。しかし、仙台城の例は若干ではあるが肥前系磁器を含んでおり、この2例についてはあくまでも参考程度である。時期的には大坂城遺構群1^回が1598年～1615年、大坂城遺構群2^回が1599年～1615年、小田原城下櫛千鶴町遺跡34号土坑が1615年～1630年^回、仙台城三の丸遺構群が1601年～1637年頃と推定され、富田川河床遺跡第7次調査S K184は16世紀後半とするが17世紀初頭とみてよいと思われる。なお、大坂城A Z 87-5次のS X 201は時期的には前述のとおりであるが碗・皿のみの統計である。まず第2号溝状遺構出土陶磁器・土器類の様相であるが、圧倒的に肥前系陶器の割合が多いのが目につく。前述のように施釉陶器中に占める肥前系陶器の割合は表-8から大坂城S X 201が一番近い。豊臣後期にあたる大坂城遺構群1と2における肥前系陶器の割合が若干低いことから、肥前系陶器の普及が広島においては大坂よりも早かった可能性もある。また、瀬戸・美濃系陶器の割合が低いことが指摘される。肥前系陶器の出現後も仙台城や小田原城では瀬戸・美濃系陶器が相変わらず大きなシェアを誇っていたのに対して、地理的原因から広島では肥前系陶器が最初から大きなシェアを獲得したようである。大坂城では、肥前系陶器出現前までは瀬戸・美濃系陶器が施釉陶器市場では30～50%ものシェアを占めていたのであるが、出現後次第にそのシェアを奪われている様子が良くわかる。さらに中国製磁器のシェアが低いことも特徴である。大坂城遺構群1、2は施釉陶器中中国製磁器の割合は40%を越している。富田川河床遺跡でも35.6%ものシェアがある。当然陶器よりも硬質で見た目も良い磁器は陶器とは別の需要があったものと思われ、肥前系磁器の焼成が始まると輸入に頼らざるを得なかつたからである。と

表-7 他の消費地遺跡と第2号溝状造構出土陶磁器・土器類産地別比較

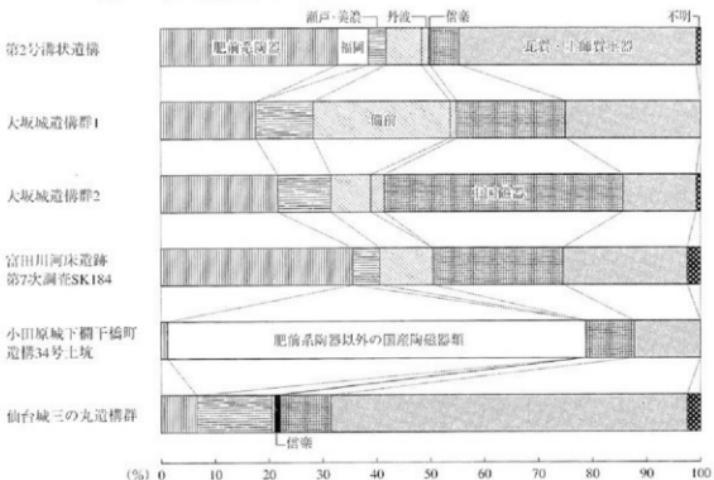
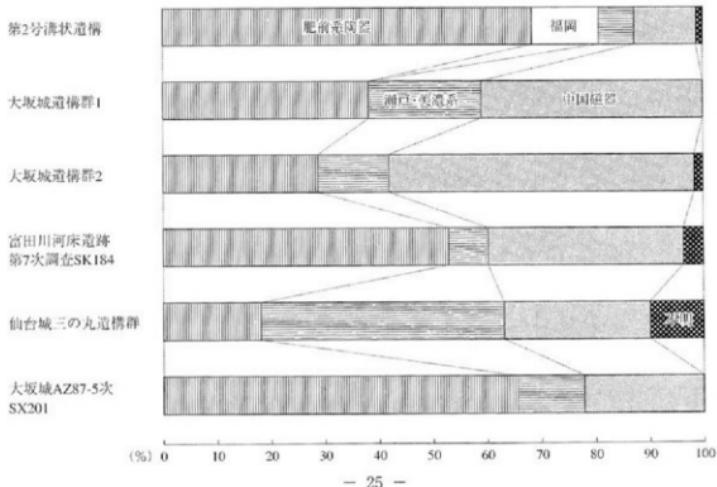


表-8 他の消費地遺跡と第2号溝状造構出土施釉陶磁器産地別比較



ころが、第2号溝状遺構における輸入磁器の割合は飛び抜けて低い。これまでの発掘調査においても輸入磁器の出土はたいへん少^{すくな}量である。広島城の築城まではこの地における陶磁器・土器類の需要はほとんどなかったと思われるから、築城後に急激に高まった需要を満たすためにも肥前系陶器の流通は必要であったのだろう。そしてそれまでの瀬戸・美濃系陶器や輸入磁器の流通が全くと言っていいほどなかったことが、それらとの競合を避けられ早い段階で肥前系陶器の流通を促したと考えられる。福岡系陶器のシェアが目立つのも他都市との違いであるが、これらの流通が多かったことも前述のような理由に原因が求められよう。

第3号溝状遺構出土陶磁器・土器類については、前述のようにかなりの長期にわたる遺物であるためこれ以上の分析はむずかしい。しかし、表-5より肥前系磁器の出現後はこれが陶磁器市場を席巻するようにな^なるという他都市と同様の様相を見せていること、これまでの調査でも指摘されたとおりおそらく18世紀中頃から関西系陶器や地方窯の製品が一定のシェアを占めてくるようになること等が指摘されよう。近世初頭圧倒的なシェアを誇った肥前系陶器は見る影もない。

注)

- (1) 財団法人広島市歴史科学教育事業団『広島城中堀跡発掘調査報告』1992
- (2) 前川要「関西地方における中世から近世への便所遺構」『月刊文化財』文化庁、1992
川口宏海「中・近世都市における便所遺構の諸様相」『関西近世考古学研究III』関西近世考古学研究会、1992
- (3) 愛知県埋蔵文化財センター『名古屋城三の丸遺跡（I）』1990
- (4) 愛知県埋蔵文化財センター『名古屋城三の丸遺跡（II）』1990
- (5) 愛知県埋蔵文化財センター『名古屋城三の丸遺跡（III）』1992
- (6) 名古屋市教育委員会『名古屋城三の丸遺跡—1・2・3次調査の概要』1989
- (7) 前川要「関西地方における中世から近世への便所遺構」『月刊文化財』文化庁、1992
- (8) 財団法人広島市歴史科学教育事業団『広島城外堀跡西白島交差点地点』1993
- (9) 財団法人大阪市文化財協会『難波宮址の研究第九』1992
- (10) 読売新聞社『野趣の美 古唐津の流れ』1993
- (11) 大橋康二『肥前陶磁』ニューサイエンス社、1989
- (12) (9)と同
- (13) (9)と同
- (14) 財団法人広島市歴史科学教育事業団『広島城外堀跡紙屋町交差点地点』1992
- (15) (8)と同
- (16) 1993年度に当事業団によって発掘調査の行われた紙屋町交差点地点で出土している。
- (17) (9)と同
- (18) (9)と同
- (19) (9)と同
- (20) (8), (14)と同
- (21) (9)と同
- (22) 村上勇「島根県富田城関連遺跡群出土の陶磁」『貿易陶磁研究No.7』1987
- (23) 山口市教育委員会『大内氏館跡IV』1982
- (24) 広島市教育委員会『池田城跡発掘調査報告』1986
- (25) 広島市教育委員会『北谷山城跡発掘調査報告』1986

- (27) 広島県教育委員会『広島城外郭櫓跡発掘調査概報』1980
- (28) 島根県教育委員会『富田川河床遺跡発掘調査報告書III』1983
- (29) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『郡山城下町遺跡』1993
- (30) 渡辺誠「物資の流れ—江戸の焼塙壺」『季刊考古学第13号』雄山閣, 1985
渡辺誠「焼塙壺」『江戸の食文化』吉川弘文館, 1991
- (31) (29)と同
- (32) 佐々木達雄「幕末・明治初頭の塙壺とその系譜」『考古学ジャーナル』1977
- (33) 財団法人大阪市文化財協会『大坂城跡III』1988
- (34) 田中一廣「泉州名産『焼塙壺』の足跡」『関西近世遺跡の在地土器の生産と流通』関西近世考古学研究会, 1992
- (35) (34)と同
- (36) (33)と同
- (37) (9)と同
- (38) (9)と同
- (39) 高槻市教育委員会『摂津高槻城』1984
- (40) (9)と同
- (41) 大竹市教育委員会『芸州亀居城跡—第1・2次発掘調査報告』1980
- (42) 広島市教育委員会『史跡広島城跡二の丸第2次発掘調査報告』1989
- (43) (42)と同
- (44) (1)と同
- (45) 静岡県袋井市教育委員会『久野城IV』1993
- (46) 「川角太閤記」『史跡広島城跡史料集成』第1巻所収, 広島市教育委員会, 1989
- (47) 「安国寺惠瓈外二名連署起請文」『史跡広島城跡史料集成』第1巻所収, 広島市教育委員会, 1989
- (48) 萩尾昌枝「江戸時代初期の宴会の食器類」『江戸の食文化』吉川弘文館, 1991
- (49) (9)と同
- (50) 市田京子「江戸時代の下駄」『考古学と江戸文化』江戸遺跡研究会, 1992
- (51) 都立一橋高校内遺跡調査団『江戸』1985
- (52) (50)と同
- (53) (14)と同
- (54) 旧芝離宮庭園調査団『旧芝離宮庭園』1988
- (55) 東京都新宿区教育委員会『三栄町遺跡』1988
- (56) 古泉弘『江戸を掘る』柏書房, 1988
- (57) 第5回関西近世考古学研究大会発表資料, 1993
- (58) 有田町史編纂委員会『有田町史陶業編I』1985
- (59) (9), (11)と同
- (60) (9)と同
- (61) (9)と同
- (62) (9)と同
- (63) 下村節子「枚方宿遺跡第3次調査第4面出土の唐津焼」第4回九州近世陶磁研究会資料, 1994
- (64) 愛知県埋蔵文化財センター『清洲城下町遺跡』1990, 愛知県埋蔵文化財センター『清洲城下町遺跡(II)』1992, 愛知県埋蔵文化財センター『朝日西遺跡』1992
- (65) (9)と同

- (66) (9)と同
- (67) 後藤陽一「広島築城と城下町の発展」『広島城下町絵図集成』広島市立中央図書館, 1990
- (68) (9)と同
- (69) 財団法人大阪文化財センター『大坂城跡の発掘調査 2』1992
- (70) 小田原市教育委員会『小田原城下櫻干橋町遺跡』1993
- (71) 佐藤洋「仙台城三の丸跡出土の陶磁器」『貿易陶磁研究No.7』1987
- (72) (29)と同
- (73) (9)と同
- (74) (8), (10)と同
- (75) (8)と同

IV 総括

今回の調査では、毛利期から福島期のものと思われる溝状遺構を検出した。これは、広島城の歴史を考える上でも極めて重要な手がかりになると思われ注目される。ここでは、遺構の性格等からこの場所にこの遺構が検出されたことがどんな意味を持つのか検討してみたい。

まず検出された遺構の性格についてであるが、前述したように何らかの屋敷地の境界施設である可能性がきわめて高い。特に第3号溝状遺構についてはその西側が版築状に縮まっていたことから道路と屋敷地の境界施設であった可能性が高い。第1号、第2号溝状遺構については第3号溝状遺構と時期がずれるため、これと道路をはさんで反対側の境界施設であったかどうかは断定しがたい。しかし、その方向や規模はそうした施設であると考えるのが最も妥当であると思われ、むしろ屋敷地内にこうした大きな溝が存在していたと考えることは無理があろう。そこで存在した時期は異なるもののこれらの溝状遺構はいずれも道路と屋敷地の境界施設であり、従ってほぼ第2号溝状遺構と第3号溝状遺構の間が道路であったと推定される。ここで重要なことは、第2号溝状遺構が出土遺物から毛利期から福島期のものと思われることであろう。すなわち、「正保絵図」以前の毛利期・福島期にすでにこの位置に道路が存在していたことになる。

ところで「正保絵図」ではこの道（真鍋筋）⁽²⁾は南側の外堀に突き当たるように描かれその先には櫓台を描いている。そして外堀を挟んでほぼ一直線上に西堂川東岸の道を描くのである。つまりここでは「真鍋筋」は櫓台に突き当たってしまうのであり、直接城下町へは続いていない。ところが堀に沿って東向きに「まなべ殿つきぬけ」なる道があり、この道を行けば「真鍋御門」から城下へ出られるようになっている。「正保絵図」に描かれている大手郭の道の中で南側の外堀に沿った道が存在するのはここだけでその意味では特異である。問題は「まなべ殿つきぬけ」という道にある。「つきぬけ」とは「既存の道（それは長い道でも、ごく短い袋小路でもよい）の先端を延長させ、他の街路に、直線的にであろうと直角にであろうと問わずつなげる」という。その「突き抜く」営為によって名を得た道のことである⁽³⁾とされている。つまりこの「まなべ殿つきぬけ」はそれまでは存在しなかったものを新たに「突き抜く」いてつくったのである。これは惣構に何らかの工事が行われたことに伴うものであろう。そしてその道がつくられたのはその道の「突き抜く」いた先に「真鍋」なる人物が居住していた時期であろう。合わせて「真鍋」氏の家の前の門ということで「真鍋御門」、「真鍋御門」へ続く道とすることで「真鍋筋」との名がつけられたのであろうことは想像に難くない。⁽⁴⁾以上のような経緯については「知新集」でも触れている所である。そしてその「真鍋殿」に該当する人物と考えられるのは、「知新集」によれば正に「まなべ殿つきぬけ」の東端、「真鍋御門」の前に居住と記されている「真鍋五郎衛門」である。彼は福島正則が広島から退去した際にこの場所に居住していたとされているが、いつからこの場所に居住していたのかは明らかでない。しかし、少なくとも福島期にこうした城内、特に惣構の改造が行われたことは間違いない。また逆に考えれば、「まなべ殿つきぬけ」が存在しなかつたら、この大手の門から南下する道（真鍋筋）は堀へ突き当たって袋小路となってしまうのである。つまり「まなべ殿つきぬけ」は「真鍋筋」を活かすために新しくつくられた道と解釈できるのであるまい。それでは、「まなべ殿つきぬけ」がつくられる前は「真鍋筋」はどういう状況であったのであろうか。

二つのケースが考えられるが、一つ目はもともと「真鍋筋」は袋小路の道であった場合である。そのため城下へ出るのが困難であることから「真鍋御門」まで「まなべ殿つきぬけ」をつくりて対応したとの推測である。築城当初のこの付近の道のあり方が不明であるため軽々には判断できないが、もしこの道が元々袋小路の道であったとすれば城下へ出るのがたいへん不便であることは当然最初から判っていたはずであり、あ

まりにも安易な町割り計画であった感を免れない。むしろ、何か新しい事態が起こってその結果「真鍋筋」が袋小路になってしまったため「まなべ殿つきぬけ」をつくって対応したと考える方が自然ではあるまいか。そこで二つ目のケースを考えられる。それはこの「真鍋筋」が築城当初は城下町へ直接通ずる一本道であった場合である。その根拠と考えられるのが前述のように「正保絵図」が「真鍋筋」と西堂川東岸の道を一直線上に描くことである。⁽⁵⁾さらに福島期及びそれ以前の3枚の絵図（「芸州広島城町割之図」、「知新集」所収（毛利氏時代城郭内の図）、同「福島氏時代城郭内の図」）がやはり「真鍋筋」の位置に城下町へ直接通ずる一本道が存在したように描くことも注目される。いずれの絵図も当時の正確な面図であるとの確証の得られないものであるから、その扱いには慎重でなければならないのは当然である。特に「芸州広島城町割之図」については、①二の丸・古川が描かれていない、②外堀が中途までしか描かれていない、③西側の外堀が描かれている等の点からおよそすべてが正確であるとは考えにくく、「待屋敷割りを主体とした概略図」や「計画図の一種」とも考えられている。しかし、一方で「大まかには町割りの基本を捉えており、草創期広島を偲ぶ縁とはなる貴重な資料」であるとも位置付けられている。こうした評価を考慮した上でこれら3枚の面図が「真鍋筋」をどのように描いているか見てみたい。

「芸州広島城町割之図」では「南ノ大門」、「知新集」では「南門」と書かれたいわゆる大手の門から南へ下がる道が描かれる。そして「門」から南へ下った道は一旦やや東よりに振れてさらにまた南下する。これがいわゆる真鍋筋である。そして3枚の絵図はいずれもこの道が城下町まで続いているように描いている。

「知新集」の2枚の絵図は城内しか描かれていないためもちろんはっきりわからないが、しかしいずれも外堀を橋でわたりさらに道が続いているように描いている。そしてこれら「真鍋筋」及びそれに接続する道の形状は、外堀で断ち切られている点を除いては「正保絵図」と完全に一致しているのである。こうしたことから築城当初、「真鍋筋」は城下町まで一直線に通ずる道であったものが、周辺の改造工事によって外堀で断ち切られ、その結果この道が袋小路となるために城下へ出る便宜を图って「真鍋御門」へバイパスをつくった。これが「まなべ殿つきぬけ」であると推測できるのである。もしそうであるならば、今回出土した第2号溝状遺構は、「芸州広島城町割之図」や「知新集」所収（毛利氏時代城郭内の図）、〔福島氏時代城郭内の図〕に描かれた城下町まで一直線に通ずる道（のちの真鍋筋）とその西側の屋敷地との境界施設であった可能性も出てくるわけである。

さらに、上述の推測が正しいとするならば以下のような点も指摘できよう。前述のように「正保絵図」では「真鍋筋」が外堀に突き当たる部分には櫓台が描かれている。⁽⁶⁾中堀の発掘調査でも、堀の石垣工事については櫓台をまず造ったのちその間の石垣をついていったようである。とすれば、櫓台を築造する=外堀に石垣をつく、また、櫓台を築造する=「真鍋筋」を分断する=「まなべ殿つきぬけ」をつくる、ことになるから南側の外堀に石垣をついたのも福島期であるということになる。このことは、「知新集」にある「惣構の櫓、大手ハ正則建てられしと也」の記述と完全に一致するし、入国早々正則が石垣の普請を行ったとの「福島太夫御事」の記述とも相違しない。しかし、あくまでもここでいえることは南側の外堀の櫓台、石垣を築いたのは正則らしいということであり、堀自体を掘削したのも正則の時期かどうかは別の問題であると思われる。山県氏覚書は「右之御普請迄者、石垣無之、かき上ケニテ御座候」と記し、必ずしも土手普請と石垣・櫓等の普請が同時ではなかったことを記している。南側の外堀については毛利期に開削が行われたが石垣・櫓台の築造は福島期に行われたとも考えられよう。そう解釈すれば「安国寺恵瓊外二名連署起請文」に秀吉が「御堀きハより一御門を御入候て」とあることから、すでに1592（天正20）年当時外堀（東側の）は存在していたとする従来の説とも矛盾するまい。

また、山陽道が城下町に引き込まれたのはいつかという問題がある。足利健亮氏は、中世（戦国期）の城下町から近世の城下町への移り変わりを「タテ町型城下町」から「ヨコ町型城下町」への変化に見る。「タテ町型城下町」とは大手道すなわち城郭へと伸びる道がメインストリートであり家々がこの道に対して表を開いているような町である。それに対して「ヨコ町型城下町」とは城下町を通る街道がメインストリートであり、家々が街道に対して表を開き大手道には家の横壁を向けるような町である。すなわちここでは「街道の地位を大手通りよりも上位に置く」という大転換が行われているのであるという。そしてこの転換の「画期」となったのが文禄3（1594）年の豊臣秀吉による伏見城の築造であるという。

振り返って広島城下町を見るなら、もし前述のように毛利期に「真鍋筋」が城下町まで伸びていたのが事実であれば毛利がつくろうとした城下町は「タテ町型城下町」だったといえようし、そもそも広島築城時にはまだ「ヨコ町型城下町」はなかったのである。ところが、福島正則はこれを「ヨコ町型城下町」にしようとしたのではなかろうか。山陽道が東西に走りながらも「タテ・ヨコの関係は前者が優位にあった」ように見られ、南北路に町通りの「立町」があり、東西路に主要ならざる脇町の「横町」が見られるのも中途で山陽道が引き入れられたための混乱と考えれば納得がいく。周知のように正則は秀吉子飼いの武将でその意味では最も秀吉の考え方を理解していた人物であるかもしれない。彼が秀吉に散った城下町の経営を行おうとした可能性は充分である。山陽道を城下町に引き込むことによってこれをメインストリートにすれば、大手道は単なる「通過」するだけの道になってしまふのであり、これを中途で断ち切ることはさしたる事ではなくなる。すなわちここでは山陽道の城下町引っ越しと大手道（真鍋筋）の断ち切りはセットで行われるべきことである。とすればこれも間違いなく福島期に行われたことであろう。

今回の調査は、少なくとも毛利期にはすでに大手幕が造成されており、居住者があったことを実証した。なおかつ広島築城当初のきわめて良好な遺物が多数出土し、また金箔張りの皿、蒔絵の蓋、高級茶陶の出土から上級武士の屋敷地であったことも確認された。この結果は近世の遺構面や遺構がほとんど残っていないと思われている状況下で、しかも現道の下から出土したという奇跡的な成果であったかもしれない。しかし、部分的には確実に近世広島の姿が市街地の下に埋もれていることを明らかにしたと思われる。今後の調査によって新しい近世広島像が浮かび上がってくるものと期待したい。

なお、今回調査した地点は平成2年度に調査を実施した地点のすぐ東側にあたる。しかし、前回の調査結果と今回の調査結果に齟齬が見られた。この点については平成5年度に実施した平成2年度調査部分の西側の調査結果も踏まえて、次の報告書で改めて論ずることにしたい。

注(1) 広島市立中央図書館編『広島城下町絵図集成』1990

(2) 『知新集』（広島市教育委員会『史跡広島城跡史料集成』第1巻1989）における呼称である。以下の道の呼称もこれによった。

(3) 足利健亮『中近世都市の歴史地理』地人書房、1984

(4) 広島市教育委員会『史跡広島城跡史料集成』第1巻1989、以下の『知新集』の記事はすべてこれによる。

(5) (1)と同

(6) (1)と同

(7) (1)と同

(8) (1)と同

(9) 財團法人広島市歴史科学教育事業団『広島城中堀跡発掘調査報告』1992

(10) 広島市教育委員会『史跡広島城跡史料集成』第1巻1989

- ⑪ ⑩と同
- ⑫ ⑩と同
- ⑬ 後藤陽一「広島築城と城下町の発展」『広島城下町絵図集成』広島市立中央図書館, 1990
- ⑭ (3)と同
- ⑮ 矢守一彦『城下町のかたち』筑摩書房, 1988
- ⑯ 財団法人広島市歴史科学教育事業団『広島城外堀跡紙屋町交差点地点』1992

表一九 施釉陶器觀察表

番号	出土地点	土産地	器種	法量 cm				特徴	高台	釉薬	露胎部	生産年
				口径	器高	底径						
1	1号溝 2W	肥前系	皿	11.3	3.4	4.2	皿B 1類。	ゴス底 無釉	透明釉 (淡綠灰色)	黄灰色		
2	2号溝 13W	肥前系	碗	11.1	6.9	4.1	碗A類。	断面三角形 無釉	鉄釉 (黄褐色)	赤褐色	1600～ 1640	
3	2号溝 14W	肥前系	碗	(10.4)	6.3	4.9	碗A類。	無釉	灰釉 (灰色)	橙褐色		
4	2号溝 13W	肥前系	碗	—	—	—	碗B類。鉄絵あり。	遺存せず	灰釉 (綠灰色)	黄橙色		
5	2号溝 14W	肥前系	碗	—	—	—	碗C類。口縁部に鉄釉を重ね掛けする (黒褐色)。	遺存せず	灰釉 (綠灰色)	灰褐色	1580～ 1610	
6	2号溝 13W	肥前系	碗	—	—	—	岸岳系。釉薬は光沢があり、胎土はさ きくれ立つ。	無釉 内側 の削り深い	薺灰釉 (白色)	橙褐色	1580～ 1590	
7	2号溝 11W	肥前系	碗	—	—	5.0	全面施釉。高台が高い。 半磁器化する。	施釉	透明釉 (灰白色)	灰白色		
8	2号溝 13W ?	肥前系	碗	—	—	—	口縁部の一部のみ遺存。口縁部に黒釉 を重ね掛けする。福岡かも。	遺存せず	薺灰釉 (白色)	灰色	16C末	
9	2号溝 15W	肥前系	皿	12.5	3.1	5.9	皿A類。皮鰌手。 胎土目。	輪高台 無釉	灰釉 (淡綠灰色)	黄橙色	1580～ 1610	
10	2号溝 14W	肥前系	皿	(10.1)	2.9	4.2	皿A類。 胎土目。	無釉 内側 の削り深い	灰釉 (暗黃緑色)	赤褐色	1580～ 1610	
11	2号溝 11W	肥前系	皿	(12.2)	3.6	(5.4)	皿B 1類。体部が短く口縁部が長い。 鉄絵あり。	無釉	透明釉 (淡綠灰色)	灰色		
12	2号溝 13W	肥前系	皿	(11.2)	2.4	4.1	皿B 1類。口縁部が短く器高が低い。 目痕は放射状で長楕円形。鉄絵あり。	無釉	透明釉 (淡綠灰色)	黄白色		
13	2号溝 12W	肥前系	皿	—	4.3	4.3	皿B 2類。	無釉	灰釉 (淡青緑色)	赤褐色		
14	2号溝 14W	肥前系	皿	(13.0)	4.4	4.5	皿C類。内面口縁部に草文？焼成甘 し。外面にスス付着。灯明皿に使用か。	無釉 内側 の削り深い	透明釉 (黄灰色)	黄橙色	1580～ 1610	
15	2号溝 14W	肥前系	皿	(13.0)	4.7	3.8	皿C類。皮鰌手。体部と口縁部の境に もう一段棱を持つ。内面口縁部に草文。	無釉	灰釉 (綠灰色)	黄白色		
16	2号溝 12W	肥前系	皿	(11.8)	3.3	4.4	皿D類。砂目積み。	三日月高台 無釉	灰釉 (綠灰色)	黄灰色		
17	2号溝 12W	肥前系	皿	—	—	4.1	岸岳系。山瀬窓。釉薬は光沢あり。	無釉	薺灰釉 (灰白色)	黄白色	1580～ 1590	
18	2号溝 14W	肥前系	皿	—	—	4.3	胎土目積み。目痕が丸くて小さい。内 底面に一段の棱がある。草文？	無釉	透明釉 (淡綠灰色)	黑茶色		
19	2号溝 14W	肥前系	大皿	—	—	7.2	胎土目積み。体部は内湾しつ立ち上 がる。	輪高台 無釉	灰釉 (綠灰色)	橙褐色		
20	2号溝 14W	肥前系	大皿	—	—	8.0	18と同。内面に鉄釉を重ね掛けする。 外面上には鉄絵。高台内に植物質。	輪高台 無釉	灰釉 (灰色)	赤褐色		
21	2号溝 14W	肥前系	大皿	—	—	—	大皿A類。口縁部の一部のみ遺存。燒 成不良か。	遺存せず	灰釉 (白色)	黄橙色	16C末 17C初	
22	2号溝 13W	肥前系	大皿	—	—	—	大皿B類。口縁部の一部のみ遺存。	遺存せず	灰釉 (綠灰色)	黄灰色		
23	2号溝 14W	肥前系	向付	(16.3)	5.7	4.2	高級品。見込み部に芦文、内面口縁部 に梅文、蔓草文？	無釉	灰釉 (灰色)	赤灰色	1580～ 1610	

番号	出土地点	產地	器種	法量 cm			特徴	高台	釉薬	露胎部	生産年代
				口徑	器高	底径					
24	2号溝 14W	肥前系	向付	—	—	4.7	外面体部に鉄繪あり。内底面に降灰。	施釉 面土粒付着	外底 灰釉 (緑灰色)	黄褐色	1590~ 1610
25	2号溝 14W	肥前系	瓶	—	—	—	体部は内汚しつつ立ち上がる。	平底 無釉	鉄釉? (黒灰色)	黒茶色	17C前半
26	2号溝 14W	肥前系	小壺	—	3.0	—	体部は内汚しつつ立ち上がり口縁部に至る。	糸切り磨し 無釉	灰釉 (灰色)	赤褐色	
27	2号溝 12W	肥前系	小壺	—	—	—	山瀬窓。口縁部の一部のみ遺存。	遺存せず	満釉 (白色)	赤褐色	16C末
28	2号溝 13W	肥前系	擂鉢	—	—	—	施釉。棒状工具による撲目。	遺存せず	灰釉 (緑灰色)	黄褐色	
29	2号溝 13W	肥前系	不明	—	—	—	要の腹部か。内外面施釉。内面に降灰。	遺存せず	鉄釉? (黒茶色)	茶褐色	
30	2号溝 11W	瀬戸・ 美濃系	碗	—	7.2	—	底部は水平に伸び腰部で直立する。体部と口縁部の境に段がある。黒茶色の胎土が部分的に残り色に見える。志野。	遺存せず	長石釉 (白色)	黒茶色 黄褐色	17C初め
31	2号溝 14W	瀬戸・ 美濃系	皿	—	—	—	折線皿。体部内面にソギあり。大業IV期。	遺存せず	灰釉 (暗黃緑色)	白色	16C後葉
32	2号溝 14W	瀬戸・ 美濃系	皿	—	1.9	—	体部は内汚しつつ口縁部に至るが、端部は若干外薄する。大業製品。	施釉	灰釉 (黄白色)	灰白色	16C後葉
33	2号溝 11W	瀬戸・ 美濃系	皿	—	—	—	志野皿。口縁部は内汚しつつ立ち上がる。	遺存せず	長石釉 (淡黃白色)	灰白色	
34	2号溝 12W	瀬戸・ 美濃系	小壺	—	—	3.7	高台のみ遺存。志野。	施釉 断面 三角形	長石釉 (白色)	淡黃白色	16C末 17C初
35	2号溝 13W	瀬戸・ 美濃系	向付	—	—	—	体部は内汚しつつ立ち上がり、口縁部には「く」の字状に曲がる。志野。	遺存せず	長石釉 (白色)	白色	16C末 17C初
36	2号溝 14W	瀬戸・ 美濃系	向付	—	—	—	体部は内汚しつつ立ち上がり、口縁部は外反する。外面に臉刻文。黄釉。	遺存せず	黄瀬戸釉 (淡黃色)	淡黃白色	16C末 17C初
37	2号溝 12W	瀬戸・ 美濃系	向付	—	—	3.7	底部は水平に伸び体部は外上方へ立ち上がる。内面底部に段あり。織部。	外面底部無釉	透明釉 (黄灰色)	黒灰色	17C初め
38	2号溝 11W	瀬戸・ 美濃系	不明	—	—	—	体部は内汚しつつ立ち上がり、口縁部は短く外反する。ねずみ志野。	遺存せず	長石釉 (灰色)	淡黃白色	17C初め
39	2号溝 11W	福岡系	碗	—	—	—	天目窓の口縁部の一部。漆巻ぎ。	遺存せず	鉄釉 (黄褐色)	赤褐色	
40	2号溝 14W	福岡系	碗	—	—	—	体部は内汚しつつ立ち上がり、口縁部は直立する。外面に鉄繪。	遺存せず	鉄釉 (淡綠灰色)	灰褐色	16C末 17C初
41	2号溝 14W	福岡系	碗	—	—	—	鉄釉に薺灰釉が混じる。	遺存せず	鉄釉 (黄褐色)	黄灰色	
42	2号溝 11W	福岡系	皿	—	—	—	体部は内汚しつつ立ち上がり、口縁部は外側。内面口縁部と体部の境に板。	遺存せず	薺灰釉 (白色)	灰色	16C末 17C初
43	2号溝 11W	福岡系	皿	—	—	—	口縁部は外薄する。42と同器形か。鉄釉に薺灰釉が混じる。	遺存せず	鉄釉 (黄褐色)	赤褐色	
44	2号溝 13W	福岡系	皿	—	—	—	口縁部は外反したのち内汚氣味に立ち上がる。施成悪し。	遺存せず	鉄釉 (緑灰色)	黄褐色	
45	2号溝 11W	福岡系	皿	—	—	4.7	底部の一部のみ遺存。高台内に砂粒付着。	無釉 断面 三角形	灰釉 (緑灰色)	灰色	16C末 17C初
46	2号溝 13W	福岡系	大皿	—	—	5.6	底部は内汚しつつ外上方へ伸びる。薺灰釉(白色)を重掛けする。	輪高台 無釉	鉄釉 (黄褐色)	灰褐色	16C末 17C初

番号	出土地点	产地	器種	法量 cm			特徴	高台	釉薬	胎部	生産年代
				口径	器高	底径					
47	2号溝 13W	福岡系	大皿	—	—	—	高台の一部のみ遺存。内底部に縫刻文様あり。	無釉	黒褐色(黒褐色)	黄灰色	16C末 17C初
48	2号溝 13W	福岡系	瓶	(5.8)	—	—	口縁部の一部のみ遺存。	遺存せず	黒褐色(黄白色)	灰色	17C?
49	2号溝 13W	福岡系	瓶	—	—	—	叩き成形。	遺存せず	灰褐色(緑灰色)	灰褐色	
50	2号溝 14W	福岡系	壺	(18.7)	—	—	体部は道「くの字」状に内反する。口縁部は粘土紐張りつけによる玉縁状。	遺存せず	透明釉	茶褐色	16C末 17C初
51	2号溝 14W	福岡系	擂鉢?	—	—	—	擂目状の縫刻線が多数施される。他座地の擂鉢より薄手。無釉にも見える。	遺存せず	透明釉	茶褐色	16C末 17C初
52	2号溝 14W	福岡系	壺?	—	—	—	—	遺存せず	灰褐色(緑灰色)	灰色	17C前半まで
53	2号溝 14W	楽	碗	—	—	6.0	薄手の高台。軟質の粗い胎土。高台内にロクロ成形痕。	施釉	黒灰褐色(黄白色)	白色	16C末 17C初
54	3号溝	肥前系	碗			(5.3)	呉器手碗。体部は内湾しつつ立ち上がる。	施釉 壁付 輪剥ぎ	灰褐色(暗緑色)	不明	18C
55	3号溝	肥前系	碗	—	—	(4.5)	刷毛目。体部は内湾しつつ立ち上がる。	施釉 壁付 輪剥ぎ	透明釉(灰褐色)	灰褐色	
56	3号溝	瀬戸・美濃系	碗	—	—	—	口縁端部は強く外反し平坦面をつく。	遺存せず	灰褐色(淡緑灰色)	黄白色	18C?
57	3号溝	瀬戸・ 美濃系	ひょう そく			(4.4)	底部中央に焼成前の穿孔。受部中央の脇欠損。	糸切り底 施釉	黒褐色(茶褐色)	不明	18C
58	3号溝	瀬戸・ 美濃系	水臺	—	—	—	口縁部は強く外反する。	遺存せず	灰褐色(淡緑灰色)	灰白色	19C
59	3号溝	関西系	碗	—	—	3.6	底部のみ遺存。高台脇の釉を搔き取る	無釉	透明釉(黄白色)	灰白色	18C
60	3号溝	関西系	不明	—	—	—	—	—	カキ釉(橙褐色)	橙褐色	18C

表-10 焼き締め陶器観察表

番号	出土地点	产地	器種	法量 cm			特徴	色調	胎土	焼成	生産年代
				口径	器高	底径					
61	2号溝 14W	備前	擂鉢	(27.2)	11.3	12.0	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は直立する。擂目9本。外面口縁部に2本の凹線。	茶褐色	やや粗	良	17C
62	2号溝 11W	備前	平鉢	—	—	—	体部は内湾しつつ立ち上がり口縁部に至る。端部は内側へ突出する。内面体部に朱泥を塗る。	黒褐色	やや粗	良	
63	2号溝 12W	備前	壺	—	—	—	体部は内湾しつつ立ち上がり口縁部に至る。端部は丸くおさめる。外面体部に凹線。	茶褐色	密	良	
64	2号溝 14W	備前	瓶 or 壺	—	—	—	水平な底部から、体部は内湾しつつ立ち上がる。外面底部に縫刻。	茶褐色	やや粗	良	
65	2号溝 11W	丹波	擂鉢	—	—	—	外面体部に指頭圧痕。底部がうすい。	黃褐色	やや粗	良	16C末 17C初
66	2号溝 11W	信楽	擂鉢	—	—	—	外面口縁部に四脚が巡る。擂齒状工具によって擂目を付ける。胎土が粗く焼成も甘い。	茶褐色	粗	軟	
67	2号溝 13W	丹波	平鉢	—	7.0	—	体部は直線的に外上方へ伸び口縁部へ至る。外面体部に指頭圧痕。内面口縁部は削面台形状に突出。	茶褐色	やや粗	良	

番号	出土地点	产地	器種	法量 cm			特徴	色調	胎土	焼成	生産年代
				口径	器高	底径					
68	2号溝 14W	唐津	擂鉢	—	—	8.4	外面体部に凹線が3本巡る。くり底。	灰褐色	密	軟	16C末 17C前
69	3号溝 備前	壺	(9.4)	8.0	5.8	—	水平な底部から体部が内湾しつつ立ち上がる。口縁部は内湾する。筋縫が外因体部に見える。	明赤褐色	密	良	
70	3号埋 甕遺構	備前	擂鉢	36.2	12.8	—	体部と底部の境から手前には腰間なく都歎状工具で擂目を付ける。	茶褐色	密	良	

表-11 磁器観察表

番号	出土地点	产地	器種	法量 cm			特徴	高台	文様	生産年代
				口径	器高	底径				
71	1号溝 2W?	肥前系	青磁	—	—	—	厚手。口縁部の一部。	遺存せず		17C?
72	1号溝 2W	福建・ 広東系	青花 碗	—	—	—	口縁部が外反する。	遺存せず	外一植物文	17C前半
73	2号溝 13W	鹿児島 窯	青磁碗	—	—	—		遺存せず	外一蓮弁文の陰刻	15C後 16C中
74	2号溝 13W	景德鎮	青花 碗	—	—	—	底部のみ遺存。いわゆる饅頭心。	施釉 肋付軸刺 ぎ 内湾する	外一唐草文 高台内一「富貴佳器」	16C後半
75	2号溝 14W	景德鎮	青花 碗	—	—	—	口縁部の一部のみ遺存。	遺存せず	外一牡丹唐草文	
76	2号溝 12W	景德鎮	色絵 碗	—	—	—	赤、緑、褐色の三色を用いる。	遺存せず	外一植物文	
77	2号溝 14W	景德鎮	青花 小叶	—	—	—	口縁部は若干外湾する。	遺存せず	外一花卉文	
78	2号溝 14W	福建・ 広東系	青花 碗	—	—	5.1	体部は内湾しつつ立ち上がる。	施釉 肋付けに もみがら付着	見込一花卉文	
79	2号溝 14W	福建・ 広東系	青花 碗	—	—	4.8	体部は内湾する。	施釉 肋付けに もみがら付着	外一人物文 見込一花卉文	
80	2号溝 11W	福建・ 広東系	青花 碗	—	—	—	体部は内湾しつつ立ち上がる。	遺存せず	外一花唐草文	
81	2号溝 14W	福建・ 広東系	青花 碗	—	—	—	体部は内湾しつつ立ち上がる。	遺存せず	外一不明	
82	2号溝 14W	福建・ 広東系	青花 皿	—	—	6.0	底部は水平である。	施釉せず	見込一花文	
83	2号溝 11W	福建・ 広東系	青花 皿	—	—	—	陶胎染付け。胎土は橙褐色。	遺存せず	内外不明	
84	2号溝 輸入磁 11W	白磁 皿	—	—	6.9	底部の一部のみ遺存。	施釉 肋付軸刺 ぎ 内湾する			
85	3号溝 肥前系	染付 鉢	—	—	—	—	口縁部は内湾する。	遺存せず	内一花文 外一不明	1630~ 1640
86	3号溝 肥前系	染付 皿	—	—	—	—		遺存せず	内一花卉文	17C前半
87	3号溝 肥前系	染付 碗	—	—	—	—		遺存せず	内一牡丹文? 外一唐草文	1670~ 1700
88	3号溝 肥前系	染付 碗	—	—	3.9	底部がたいへん厚手である。	施釉 肋付軸刺	外一花文?		18C

番号	出土地点	産地	器種	法量 cm			特徴	高台	文様	生産年代
				口径	器高	底径				
89	3号溝	肥前系	白磁碗	—	—	3.0	白磁か。体部は内湾しつつ立ち上がる。	施釉 疊付釉剥ぎ		18C
90	3号溝	肥前系	染付 碗蓋	9.8	3.1	3.9	体部は内湾しつつ口縁部に至る。	施釉 疊付釉剥ぎ 油墨の文様	外—松竹梅文、見込—五弁花、内—四方襷文	18C中葉
91	3号溝	肥前系	白磁 皿	2.1	1.3	1.2	型打ち成形。体部は内湾しつつ立ち上がる。	施釉せず	外面に二枚貝の放射脈を文様として表す。	18C終 19C前
92	3号溝	肥前系	染付 合子 蓋	—	1.2	なし	体部は内湾しつつ立ち上がり端部は合わせ口になる。陶石目積み。	なし	外—花文	18C終 19C前
93	3号溝	姫谷	白磁碗	—	—	5.4	体部は内湾しつつ立ち上がる。底部薄手。	施釉 疊付釉剥ぎ		1660～ 1670
94	石列遺構西側	肥前系	染付 皿	8.2	2.1	4.4	手塙皿。体部は内湾しつつ立ち上がる。型打ちひだ皿。	施釉 疊付釉剥ぎ	内—不明	1800～ 1860
95	石列遺構西側	肥前系	染付 瓶	—	—	—	瓶部は外湾しつつ立ち上がり口縁部は外反する。	遺存せず	外—草花文	18C

表-12 瓦質・土師質土器観察表

番号	出土地点	器種	法量 cm			特徴	色調	胎土	焼成
			口径	器高	底径				
96	2号溝 18W	火鉢	—	—	(10.0)	外面体部は丁寧な磨き。内面はヨコナダ。	灰褐色	密	良
97	2号溝 11W	火鉢	—	—	—	口縁部のみ遺存。外面ヨコナダ。口縁端部ハケ目。内面斜め方向のハケ目のちナダ。口縁端部は内側へ突出する。	明灰色	密	良
98	2号溝 11W	鍋	(29.8)	—	—	内面ハケ目のちナダ。口縁部上面ヨコナダ。外面体部に指頭圧痕あり、またススが付着。	灰色	やや粗	良
99	2号溝 14W	内耳鍋	—	—	—	口縁部上面ヨコナダ。外面体部はススが付着し調整不明。	黒灰色	密	良
100	2号溝 14W	内耳鍋	(27.8)	—	—	全面ヨコナダ。口縁端部は水平で若干内側へ突出する。外面体部にスス付着。	明灰色	やや粗	良
101	2号溝 11W	皿	(9.2)	1.7	5.9	A群。体部から口縁部は直線状。	茶褐色	やや粗	軟
102	2号溝 12W	皿	—	—	5.9	B群。底部と体部の境が厚手。	肌色	やや粗	軟
103	2号溝 13W	皿	—	—	—	C群。体部から口縁部は内湾する。内底面ナダ。	黄白色	精緻	良
104	2号溝 11W	皿	(10.4)	1.9	6.4	D群。体部から口縁部は直線状。内外面にタール状の黒変。	黒灰色	密	良
105	2号溝 12W	皿	(14.3)	2.6	8.7	D群。体部から口縁部は内湾する。外面底部には板目状痕。	灰色	密	良
106	2号溝 12W	皿	9.2	1.4	5.6	E群。体部から口縁部は直線状。薄手。外面底部中央に粘土が台状に残りその部分だけ右回転糸切り痕。	黒灰色	密	良
107	2号溝 14W	皿	8.2	2.0	5.6	体部は内湾しつつ口縁部に至る。右回転糸切り痕。胎土は白色と茶褐色が層状をなす。	淡肌色	やや粗	軟
108	2号溝 13W	皿	—	—	—	金落皿。底部の周縁部の一帯のみ遺存。外底面には糸切り痕。厚手。	灰白色	密	良
109	2号溝 13W	皿	—	—	—	確認できる唯一の左回転糸切り痕。	黄白色	やや粗	良

番号	出土地点	器種	法量 cm			特徴	色調	胎土	焼成
			口径	器高	底径				
110	2号溝 12W	燭台	—	—	4.4	皿状に周縁部が高い底部から柱状の体部が外湾しつつ立ち上がる。外面全体に泥状のものを塗布している。外底面に右回転糸切り離し痕。	肌色	密	良
111	2号溝 14W	不明	—	—	—	口縁部の一帯のみ遺存。外へ折り返す。全体に赤色のものを塗布している。	黄褐色	やや粗	軟
112	3号溝	鍋	(32.6)	—	—	内外面は丁寧なナデ。	灰白色	密	良
113	3号溝	鍋	—	—	—	112と同形。内面ハケ目のちナデ。口縁部上面ナデ。外面指頭圧痕。	黄褐色	密	良
114	3号溝	羽釜	—	—	—	肩部の一部のみ遺存。外面ハケ目のちナデ。内面ナデ。	黄灰色	やや粗	良
115	3号溝	皿	5.2	0.9	4.3	たいへん小型で浅い皿。平らな底部から体部は内湾しつつ立ち上がり口縁部に至る。外底面に右回転糸切り離し痕。	赤褐色	密	良
116	3号溝	不明	4.1	2.7	2.4	検のようなものか。	肌色	密	良
117	17E	皿	(11.1)	2.2	2.6	手づくね成形。	橙褐色	やや粗	良
118	1号埋甕	甕	—	—	—	外面肩部に凹鏡が遺る。下半部には指頭圧痕あり。内面はタタキ成形、ハケ目のちナデ。青海波文あり。口縁部は折り返す。	赤褐色	やや粗	良
119	2号埋甕	甕	—	—	21.4	内外面にハケ目のちナデ。底部に体部を貼り付ける。	黄褐色	やや粗	良
120	3号埋甕	甕	(11.1)	2.2	2.6	外面肩部に突起蒂が遺る。外面全体にナデ。内面はタタキ成形、ハケ目のちナデ。青海波文あり。口縁部は折り返す。	黄褐色	やや粗	良

表一三 土製品観察表

出土地	器種	大きさ		特徴						色調	胎土	焼成
		長さ	幅	中央部に	内区	外区分縁	外区分縁	瓦当	内区			
121	2号溝 13W	土鉢	長さ4.4cm、肩部最大径 1.2cm	0.35cmの孔があく。						黒灰色	密	良

表一四 瓦観察表 (単位cm)

出土地点		瓦 当												全長	丸瓦厚	コピキ		
		直径 a	文様 区径 b	内区			外区分縁			外区分縁			瓦当厚 d	内区比 c/b %	外区比 2d/a %			
				径 c	巴 卷	巴長 %	幅 c	巴 卷	%	株文	幅 数	径 c	高 高					
1	第2号溝次 遺構・14W	(15.6)	(9.4)	(6.6)	左	不明	1.4	(18)	0.8	0.15	3.1	0.7	2.0	70.2	39.7	不明	不明	不明
2	第2号溝次 遺構・14W	17.6	13.0	9.8	左	74.0	1.6	16	1.2	0.2	2.3	0.6	2.4	75.4	26.1	不明	1.9	B
3	第2号溝次 遺構・14W	(18.0)	(13.6)	(10.2)	左	不明	1.7	不明	1.3	0.3	2.2	0.7	2.5	75.0	24.4	不明	不明	B
4	第2号溝次 遺構・13W	(16.6)	(12.6)	(8.4)	左	不明	2.1	不明	1.2	0.4	2.0	0.6	2.7	66.7	24.1	32.8	1.6	不明
5	第2号溝次 遺構・13W	15.6	9.8	6.0	左	59.7	1.9	(15)	1.2	0.3	2.9	0.7	2.5	61.2	37.2	不明	不明	不明

出土地点		瓦 当												全長	丸瓦厚	コビキ			
		直径 a	文様 区径 b	内 区			外区内縁			外区外縁		瓦当厚 d	内区比 c/b %	外縁比 2d/a %					
				径 c	巴 巻	巴長 %	幅 数	幅 径	高 高										
6	第1号溝状道橋・1W	13.6	8.2	5.2	左	43.0	1.5	9	0.9	0.4	2.7	0.6	2.3	63.4	39.7	不明	2.0	不明	
7	第3号溝状道橋	(13.0)	(8.6)	6.2	左	48.0	1.2	(12)	0.8	0.4	2.2	0.45	1.3	72.0	33.8	不明	不明	不明	
8	10W	(12.8)	8.8	7.5	菊文, 弁数16枚					2.0	0.5	1.6	85.0	31.3	不明	不明	不明		
9	第2号溝状道橋・13W			な し												不明	2.2	B	

表-15 焼塙壺観察表

番号	出土分類	法量(cm)					特徴						色調	胎土	焼成		
		口径	内口	器高	胴大	底径											
1	2号溝 14W	身 A	5.5	3.5	9.2	7.0	4.9	外面の面取り痕が顕著。「ミなと藤左エ門」の刻印。						橙褐色	密	良	
2	2号溝 14W	身 A	5.5	4.6	9.1	7.0	5.4	外底面に植物纖維痕。「ミなと藤左エ門」の刻印。						橙褐色	やや粗	やや軟	
3	2号溝 14W	身 A	5.6	4.0	9.3	6.6	5.7	外底面に植物纖維痕。「ミなと泉○」の刻印。						黄灰色	やや粗	やや軟	
4	2号溝 14W	身 A	5.7	4.7	9.0	6.7	4.4	外面の面取り痕が顕著。内面は橙褐色からピンク色に変色。						黄灰褐色	やや粗	やや軟	
5	2号溝 14W	身 A	5.9	4.3	9.2	6.9	4.0	頸部のくびれが小さい。						橙褐色	やや粗	やや軟	
6	2号溝 14W	身 A	—	4.1	—	7.0	(6.0)	露誠が著しい。内面ピンク色に変色。						橙褐色	粗	軟	
7	2号溝 14W	身 A'	5.6	なし	9.6	7.0	5.2							橙褐色	密	良	
8	2号溝 14W	身 A'	—	なし	—	6.8	4.6							茶褐色	密	良	
9	2号溝 14W	身 A'	—	なし	—	6.8	4.8	外底面に焼成後と思われる穿孔あり。						橙褐色	密	良	
10	表探	身 E	3.5	なし	6.9	5.5	4.6	外底面がへこむ。						淡橙褐色	精緻	良	
11	1W 表土中	身 E	4.5	なし	6.4	5.4	3.8							淡橙褐色	精緻	良	
12	2号溝 13W	藍 A	7.2	なし	1.8	なし	6.0							橙褐色	やや粗	やや軟	
13	2号溝 14W	藍 A	6.7	なし	1.8	なし	4.9	大きな石(8mm)を含む。						赤褐色	密	良	
14	2号溝 14W	藍 A	7.3	なし	2.1	なし	5.1	内面がピンク色に変色。						橙褐色	やや粗	良	
15	2号溝 14W	藍 A	7.1	なし	2.1	なし	5.4	全体に黒変。						黒褐色	やや粗	良	

表一六 金属製品観察表

	出土地点	種類	現存長	頭部
1	2号溝・12W	釘	8.9	なし
2	2号溝・12W	釘	5.5	0.9×0.5, 圓丸長方形
3	2号溝・11W	釘	6.8	1.0×0.5, 不整長方形
4	1号溝・12W	釘	6.4	1.5×1.3, 圓丸長方形
5	トレンチ11W	釘	5.8	0.5×0.3, 不整長方形
6	不明	釘	8.8	1.3×0.7, 不整台形
7	1号溝・11W	釘	7.7	1.2×0.3, 長梢円形
8	1号溝・2W	火箸	17.3	
9	1号溝・2W	火箸	27.8	

表一七 木製品観察表 (単位 cm)

箸, 楊枝

	出土地点	種類	長さ	径(中心)	径(端)	特徴
1	1号溝・1W	箸	24.9	0.6~0.7	0.55	
2	2号溝・14W	箸	24.1	0.45~0.6	0.45	
3	2号溝・11W	菜箸	27.8	0.65~1.05	0.6	羹箸か?
4	1号溝・2W	楊枝	9.2	0.8		一部炭化する。
5	2号溝・11W	楊枝	19.0	0.7		断面長方形に削った後一端を尖るように削り出す。

下駄

	出土地点	種類	長さ	幅	厚さ	平面形	横 繋 穴	特 徴
6	1号溝・2W	運搬下駄	21.2	9.1 ~8.2	1.0	圓丸長方形	台表から台裏へぼぞ真下、やや内側へ穿孔。	台表尻部に「干」の彫り込み。台表先端部に指圧痕。
7	1号溝・2W	運搬下駄	17.6	7.8	1.2	小判形	ぼぞ真下へ穿孔し台表からは丸い穿孔、台裏からは四角い穿孔。	こども用か。台表先端部に指圧痕。
8	2号溝・12W	運搬下駄	21.6	8.0	1.4	圓丸長方形	左がやや前にある。台表から台裏へ前方やや内側へ穿孔。	前歯と右横縫穴に鼻緒の植物質が遺存。台表先端部に指圧痕。
9	2号溝・13W	運搬下駄	20.7	6.8 ~7.7	1.2	圓丸長方形	台表から台裏へ前方やや内側へ穿孔。	表面が炭化する。
10	1~3W トレンチ	差曲下駄	20.1	(7.2)	1.6	長梢円形	台表から台裏へ前方内側へ穿孔するとぼぞ穴は前後に1つずつ。腐食が著しい。	

()は復元長

曲げ物・棒

	出土地点	種類	径 厚さ
11	2号溝・17W	曲げ物・蓋	(28.9) 1.0
12	2号溝・10W	曲げ物・蓋	19.8 1.5
13	2号溝・14W	曲げ物・底	12.0 0.5
14	1号溝・2W	樽・蓋	24.6 1.1
15	1号溝・2W	樽・蓋	(35.6) 1.1

()は復元長

側板・木簡・その他

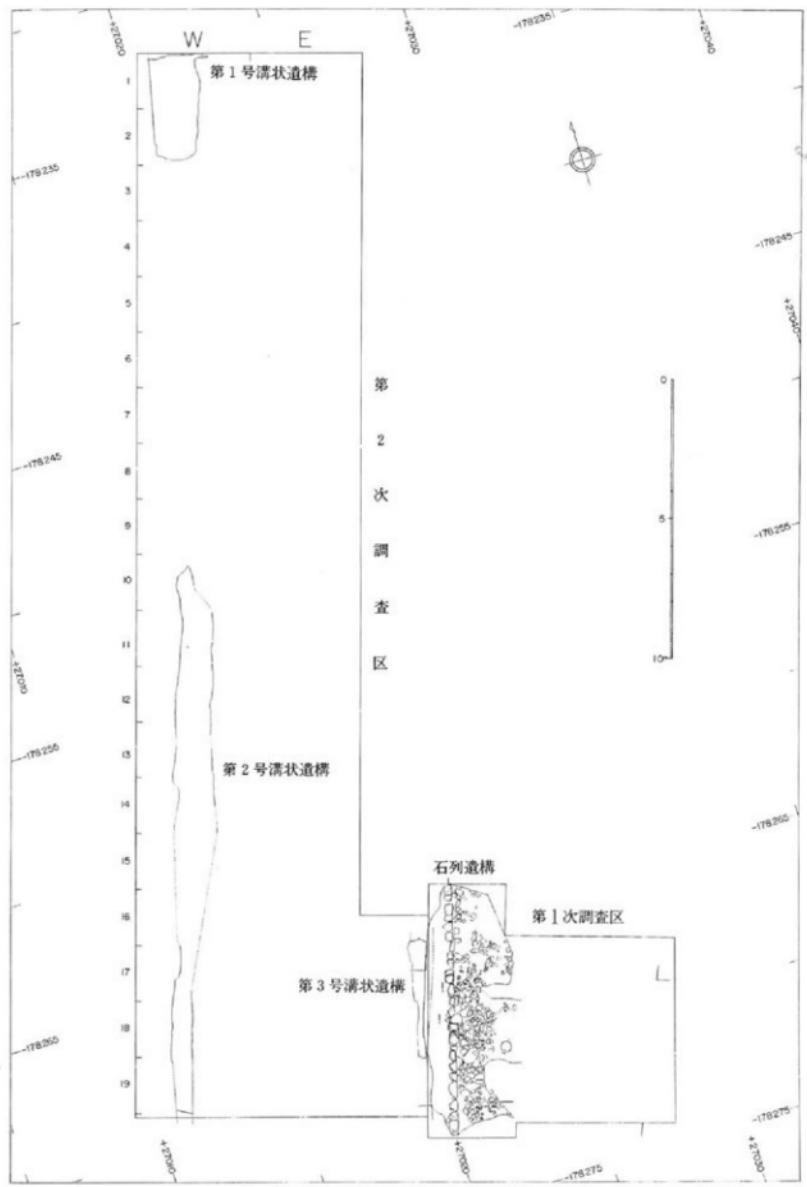
	出土地点	種類	長さ	幅	厚さ
16	1号溝・1W	側板	7.7	3.0	0.85
17	1号溝・2W	側板	13.9	4.3	0.8
18	2号溝・14W	側板	17.2	6.7	0.7
19	1号溝・1W	木簡	(22.4)	2.5	0.3
20	2号溝・14W	木簡	13.8	2.3	0.6
23	2号溝・13W	羽子板状	16.1	6.2	0.6
24	1号溝・2W	刀状	(32.0)	2.7	0.7
25	2号溝・13W	棒	5.7	逐	3.0
26	2号溝・13W	箱物・蓋	(19.8)	4.3	0.3
27	2号溝・13W	箱物・側板	20.5	(3.4)	0.6

()は現存長

漆椀

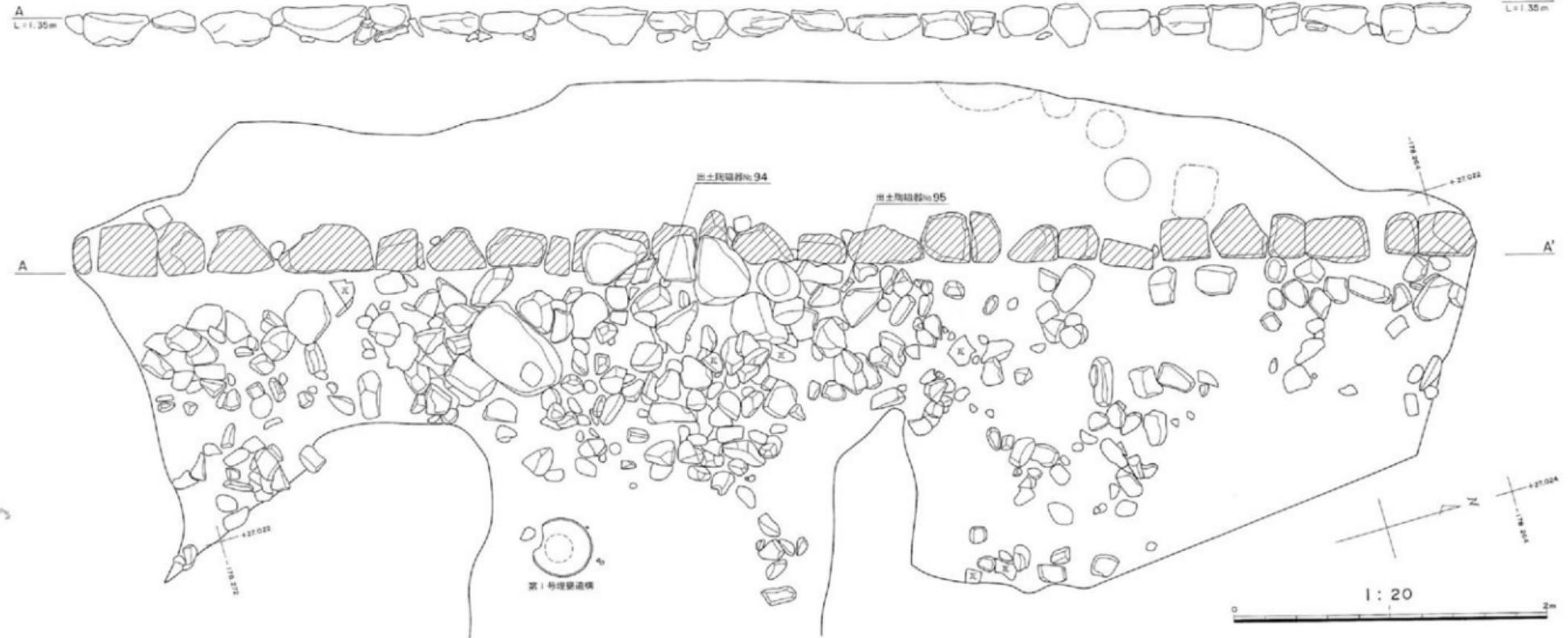
	出土地点	口 径	高 底	外 面	内 面
21	1~3W トレンチ	蓋 (11.5)	—	(4.6)	黒漆、朱漆 で梅文
22	2号溝・13W	身	—	—	黒漆、朱漆 で桐文

()は復元長



A
L=1.35m

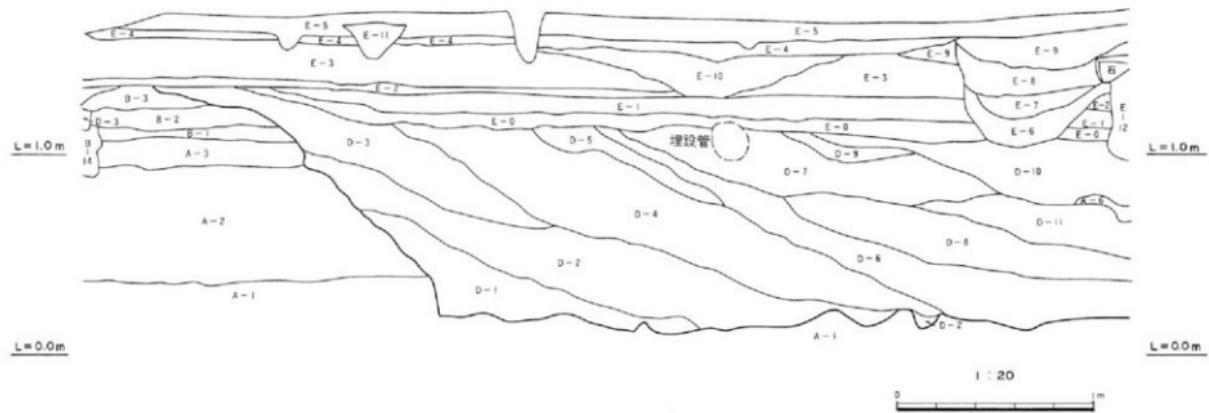
A'
L=1.35m



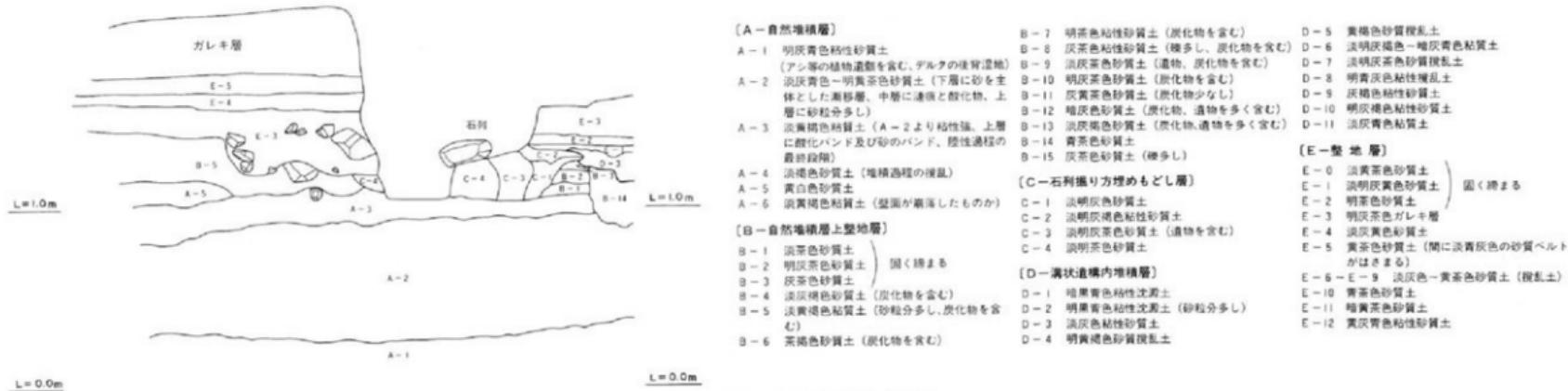
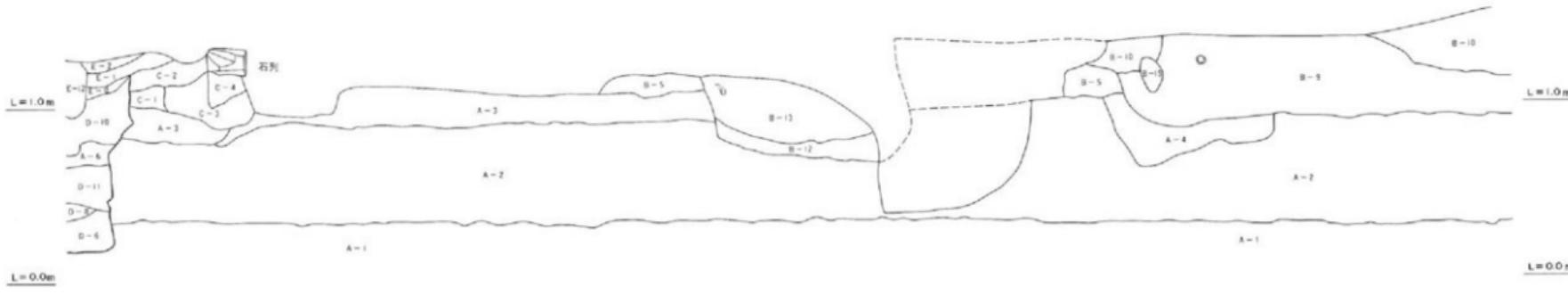
第4圖 石列道模及第1号里程碑出土状况

現道アスファルト面

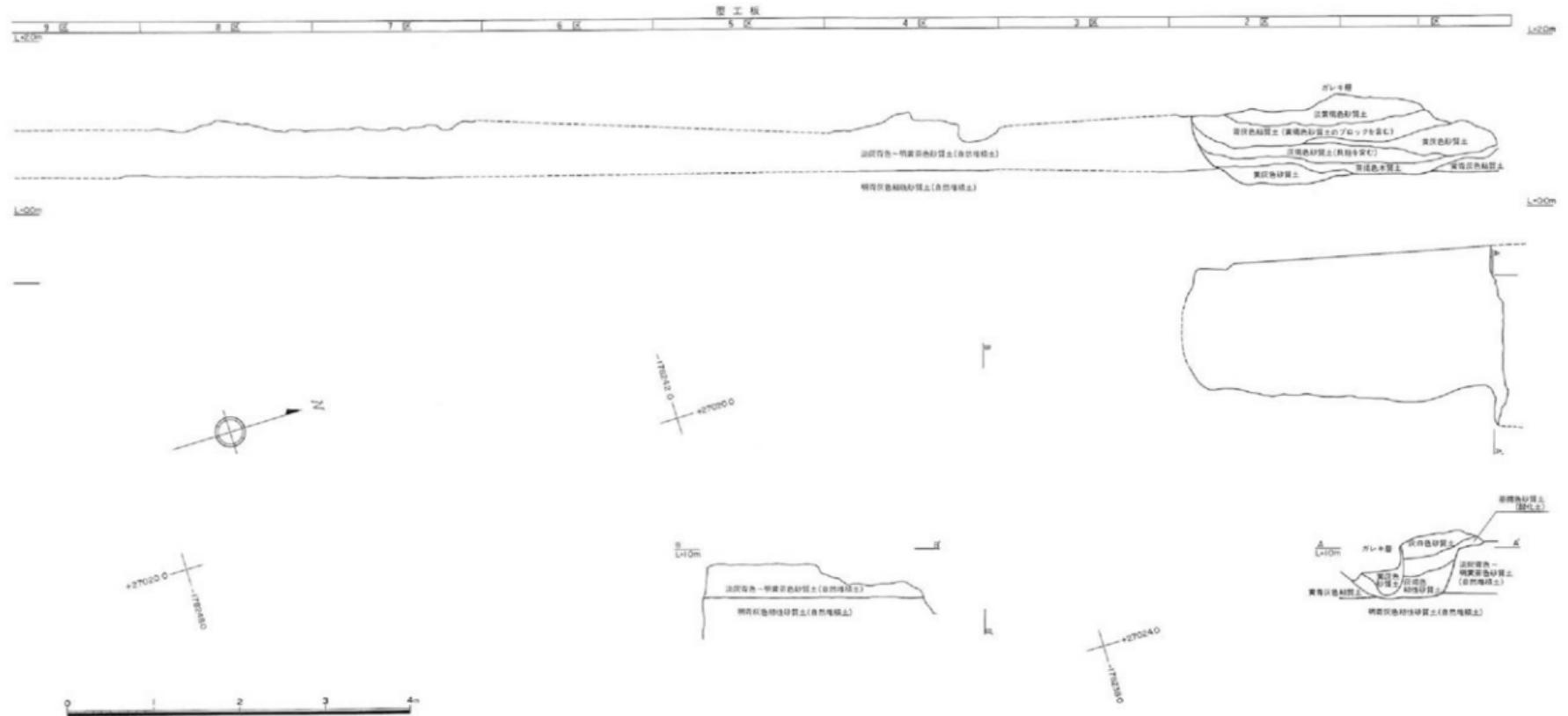
ガレキ層



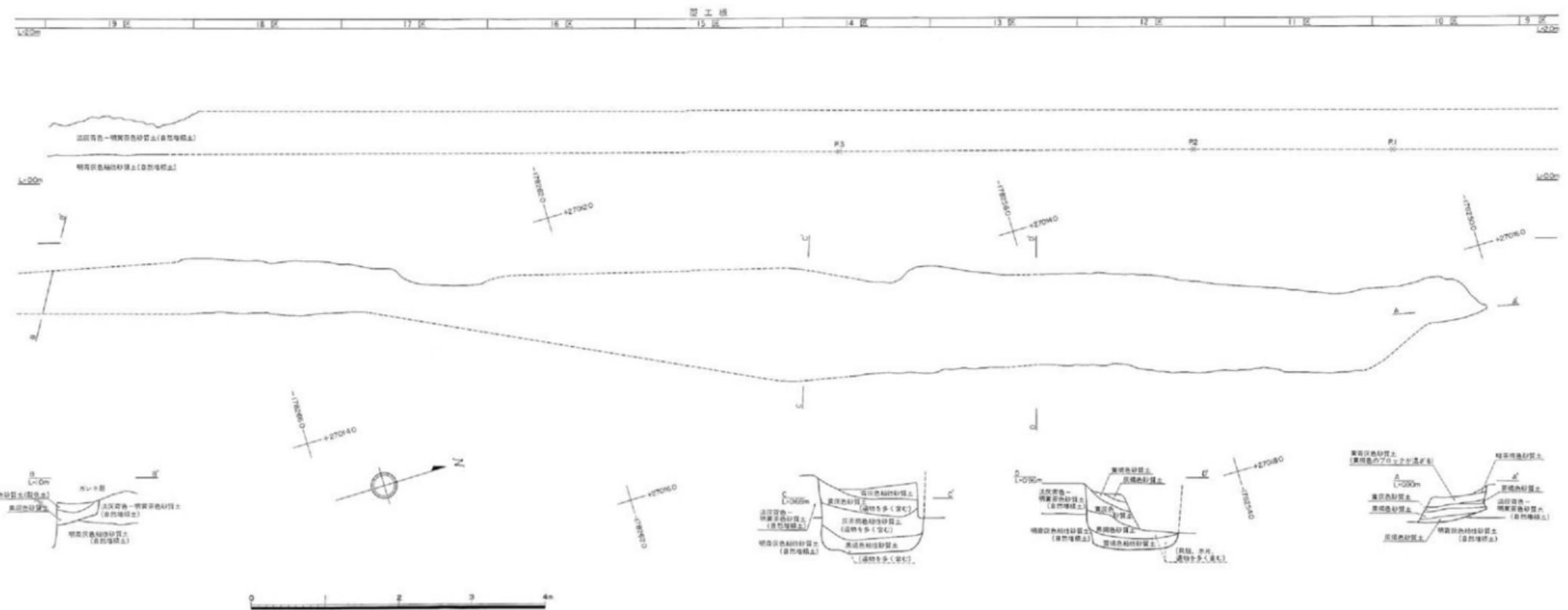
第5回 土層断面図 西面(上), 東面(下)



第6圖 土層斷面圖 北面(上), 南面(下)

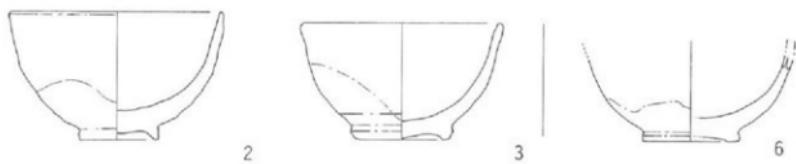


第7回 第1号溝放破柄

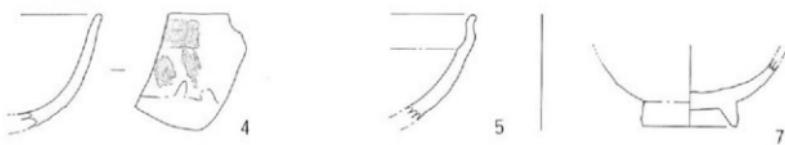


第8回 第2号溝状道標

碗A類



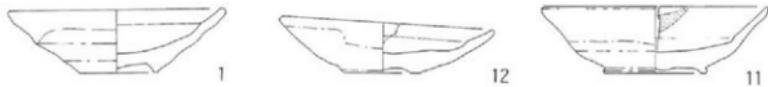
碗B類



皿A類



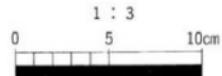
皿B 1類



皿B 2類

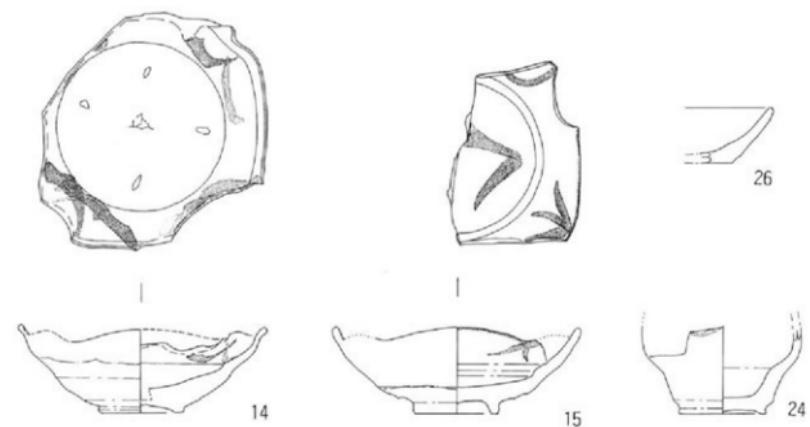


皿D類



第9図 出土遺物実測図(1)

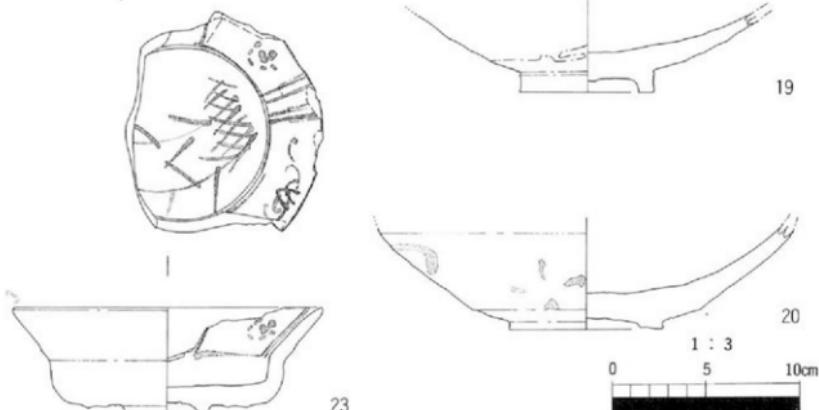
皿C類



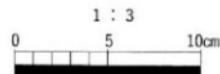
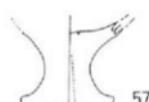
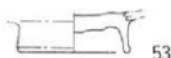
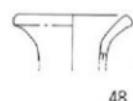
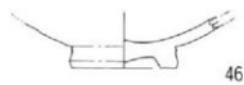
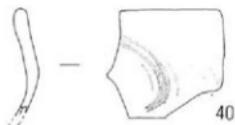
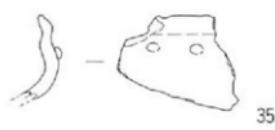
大皿A類



大皿B類

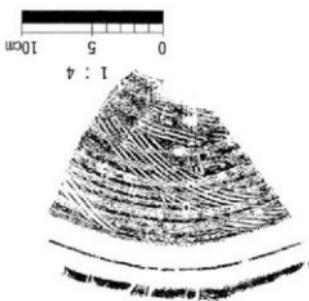
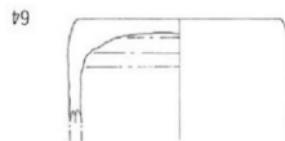
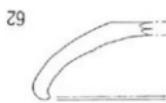
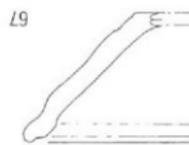
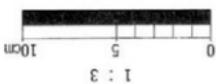


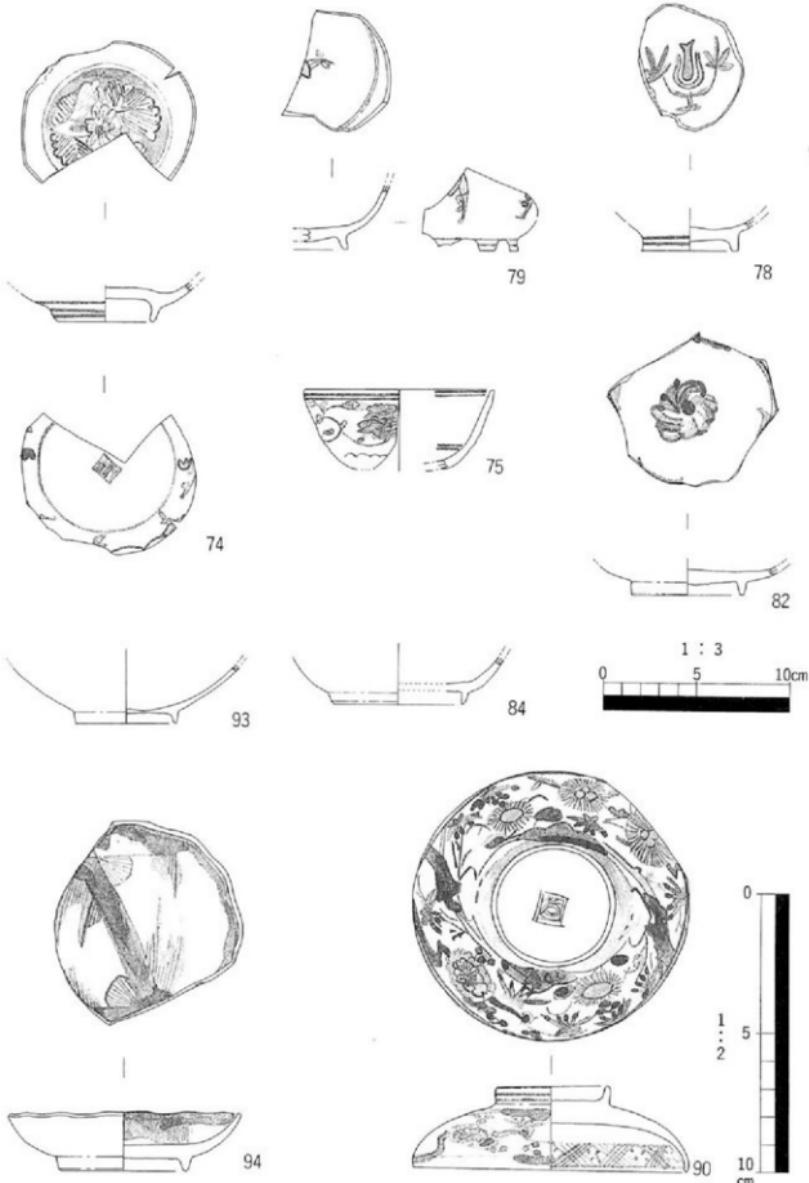
第10図 出土遺物実測図(2)



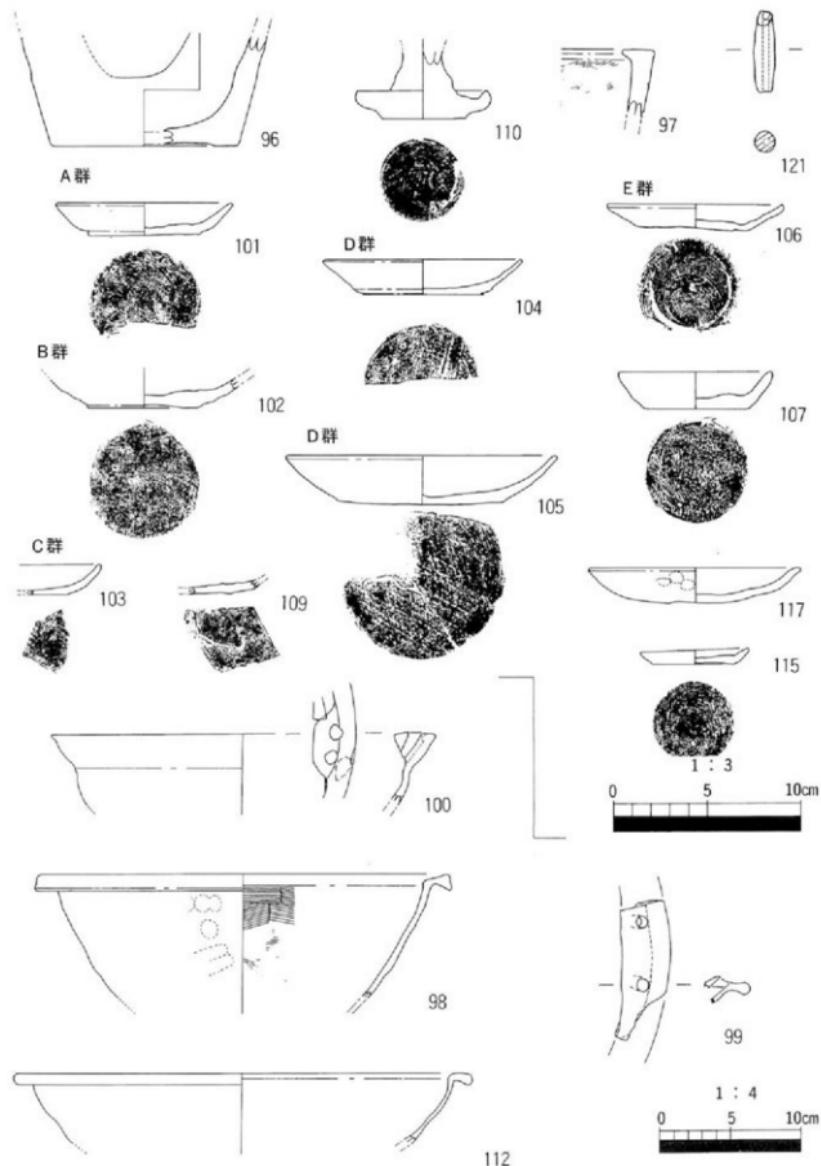
第11図 出土遺物実測図(3)

第12圖 出土遺物實測圖(4)

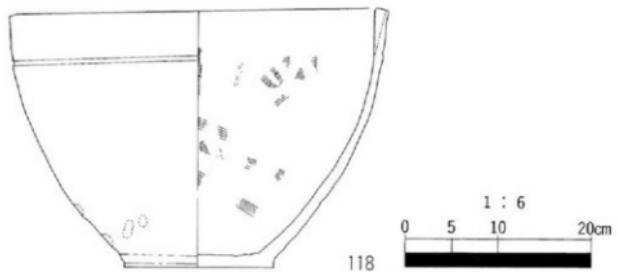
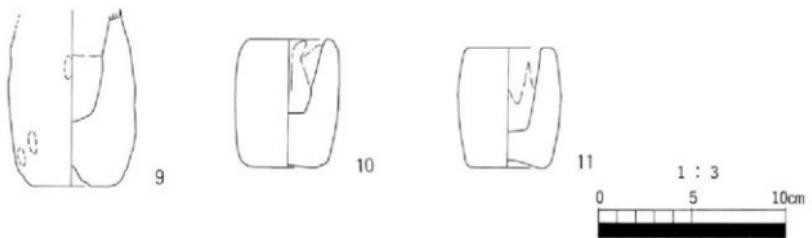
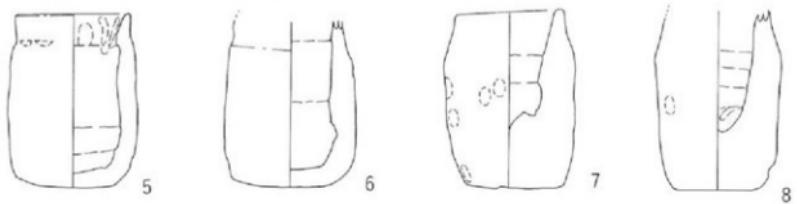
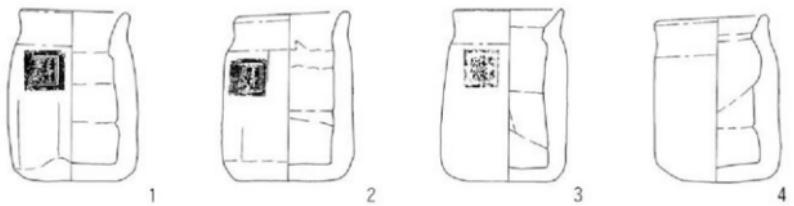




第13図 出土遺物実測図(5)



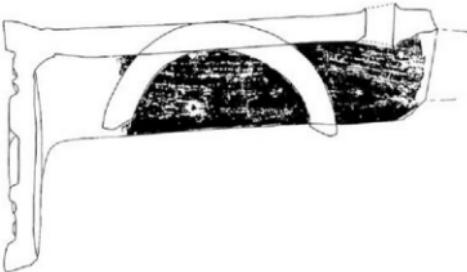
第14図 出土遺物実測図(6)



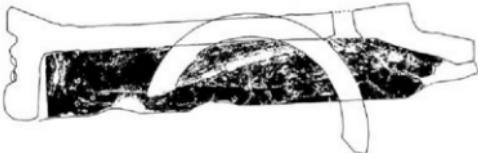
第15図 出土遺物実測図(7)



2



4



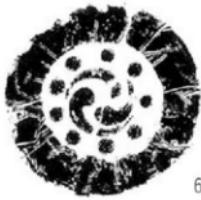
1



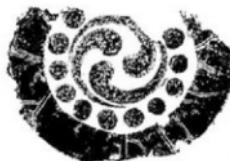
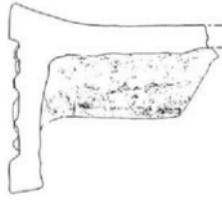
8



7



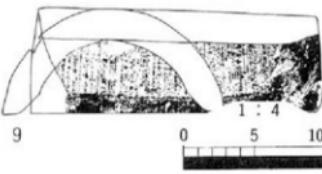
6



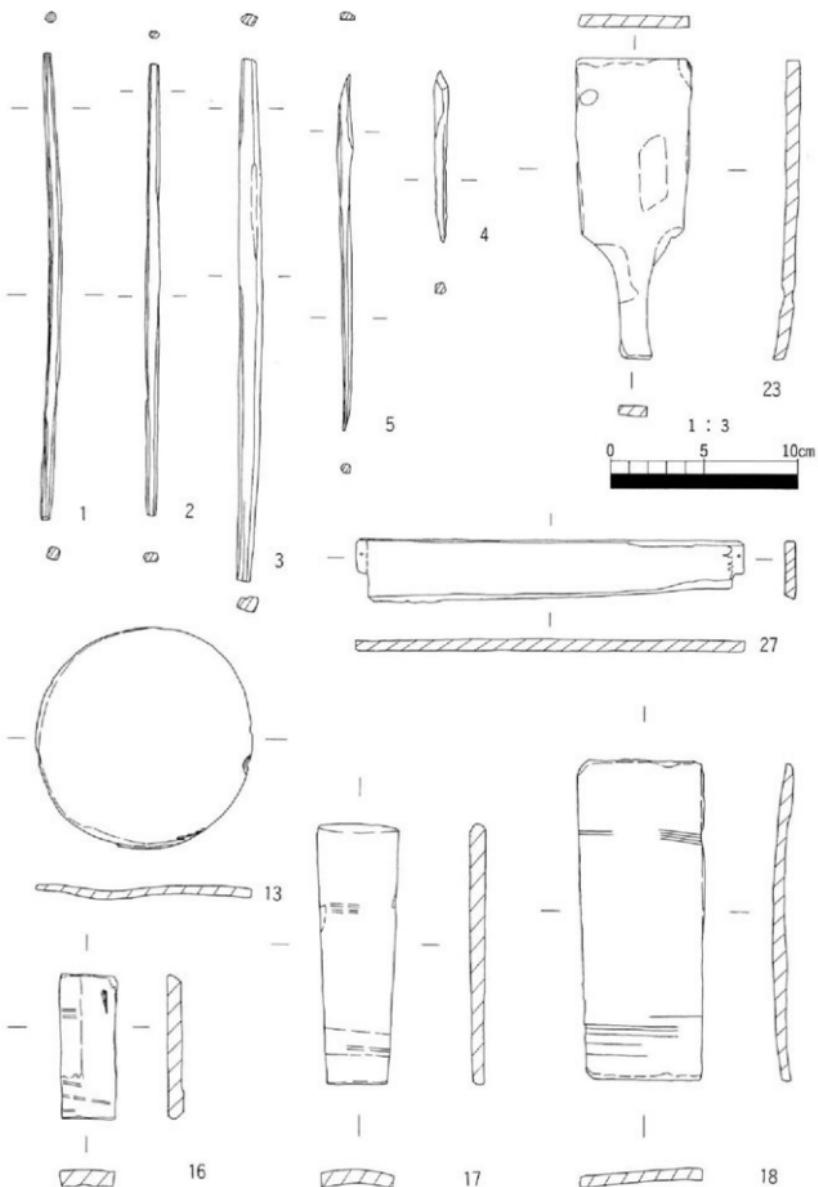
5



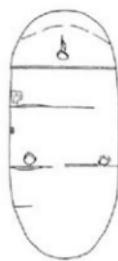
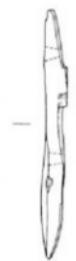
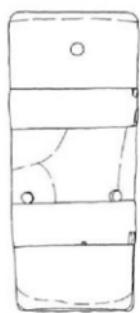
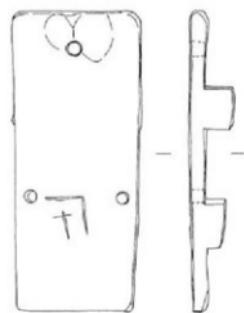
3



第16図 出土遺物実測図(8)

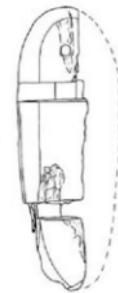
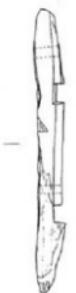
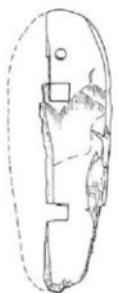
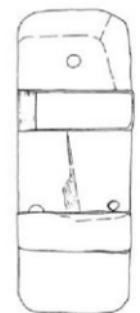
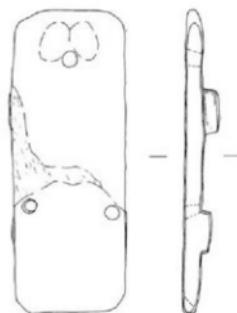


第17図 出土遺物実測図(9)



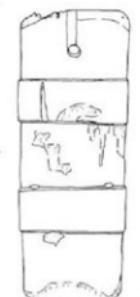
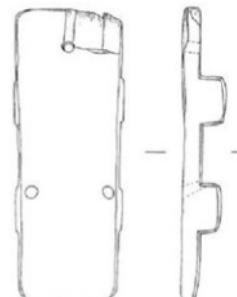
6

7



8

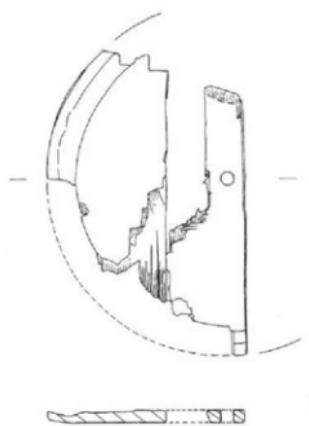
10



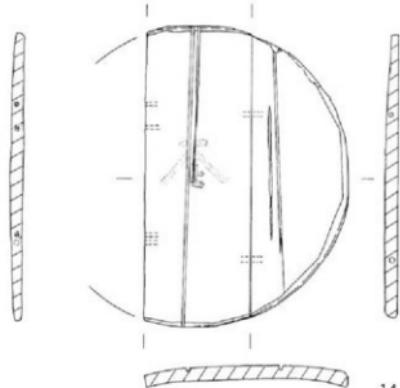
9



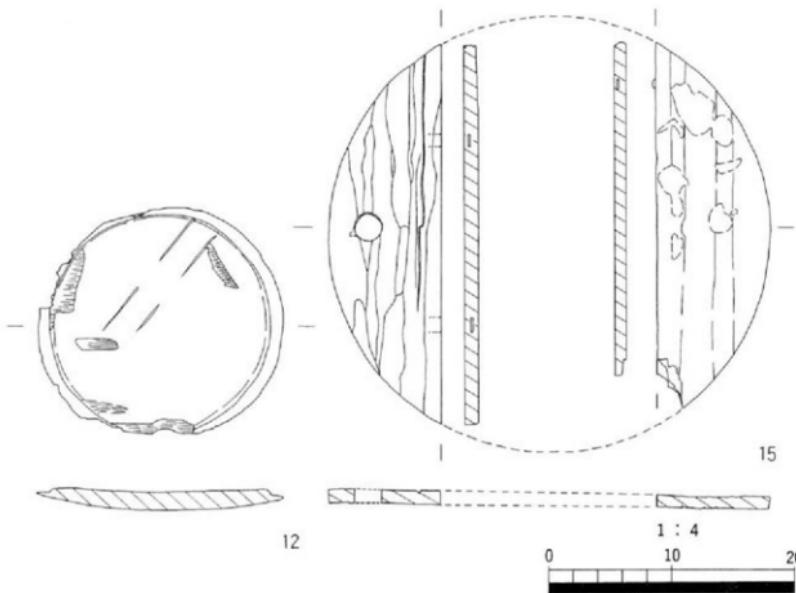
第18図 出土遺物実測図(10)



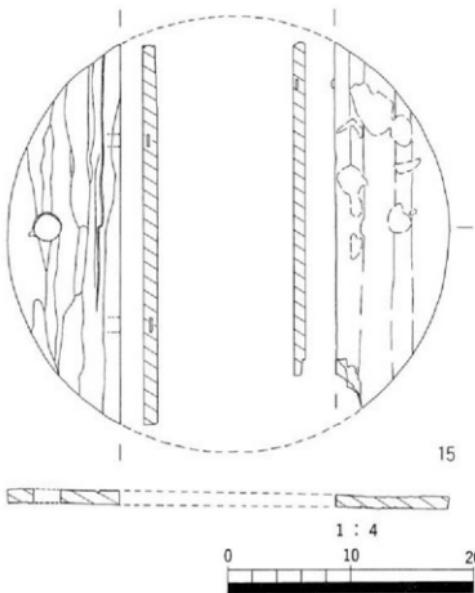
11



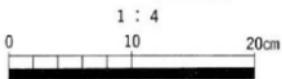
14



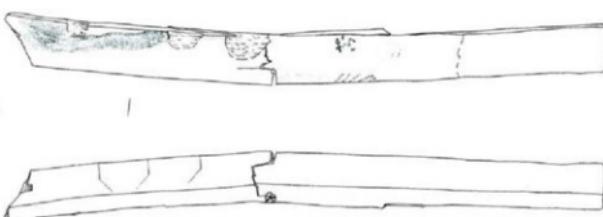
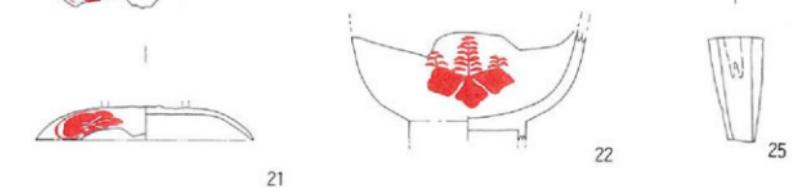
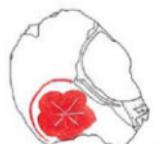
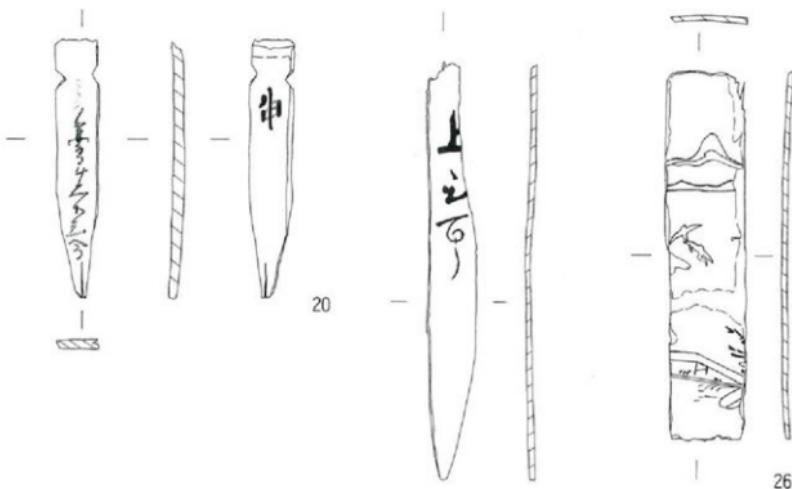
12



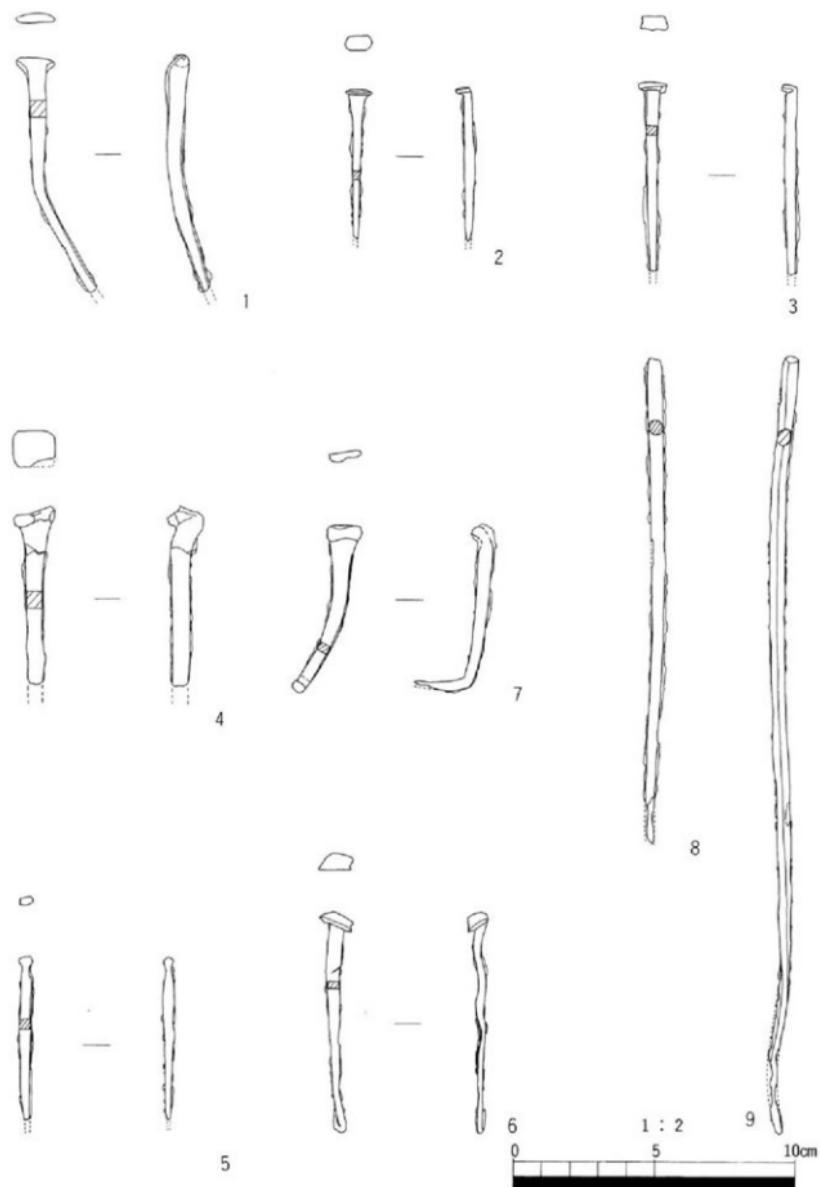
15



第19図 出土遺物実測図(1)

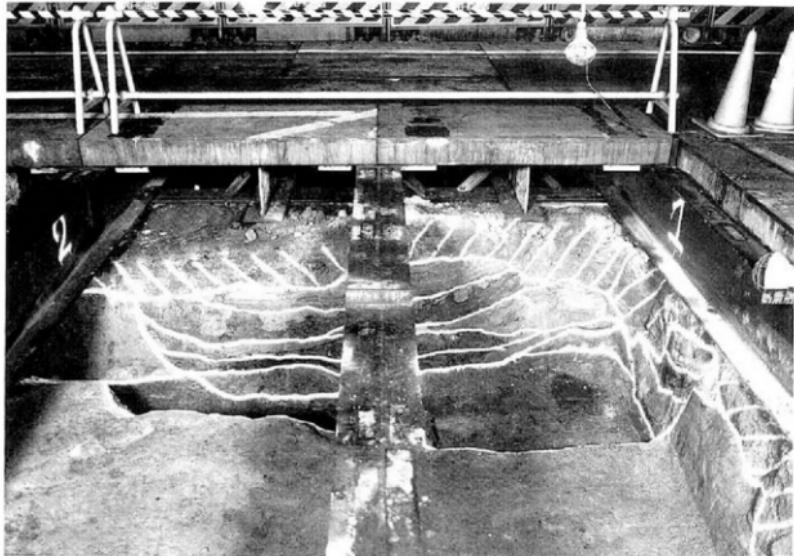


第20図 出土遺物実測図(2)



第21図 出土遺物実測図(3)

図 版



a. 第1号溝状遺構遺景（東より）



b. 第1号溝状遺構近景（東より）

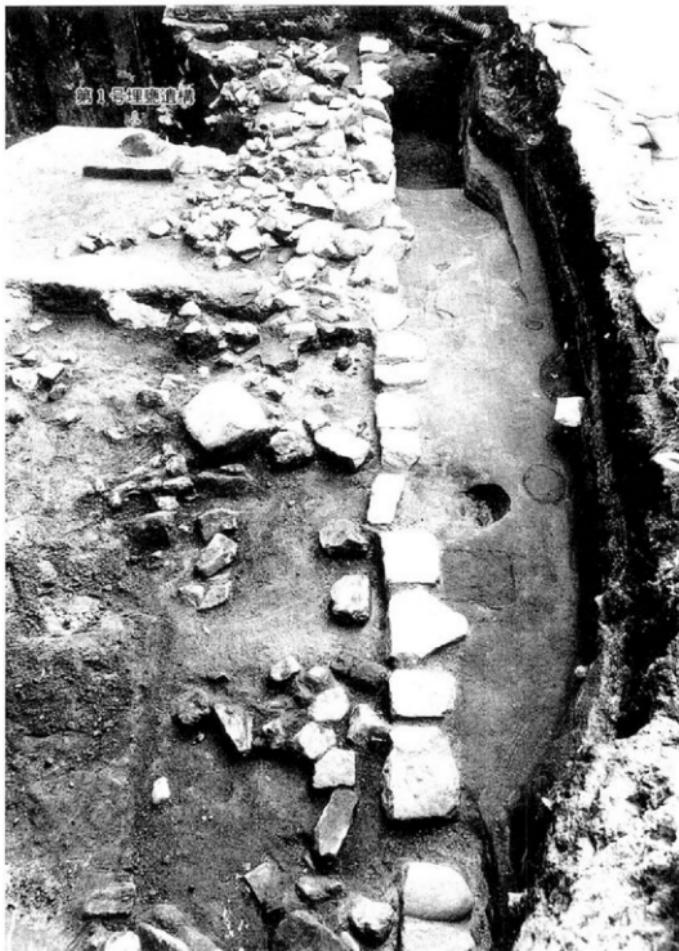
図版 2



a. 第2号溝状遺構土層断面 (10W・北より)



b. 第2号溝状遺構土層断面 (14W・北より)

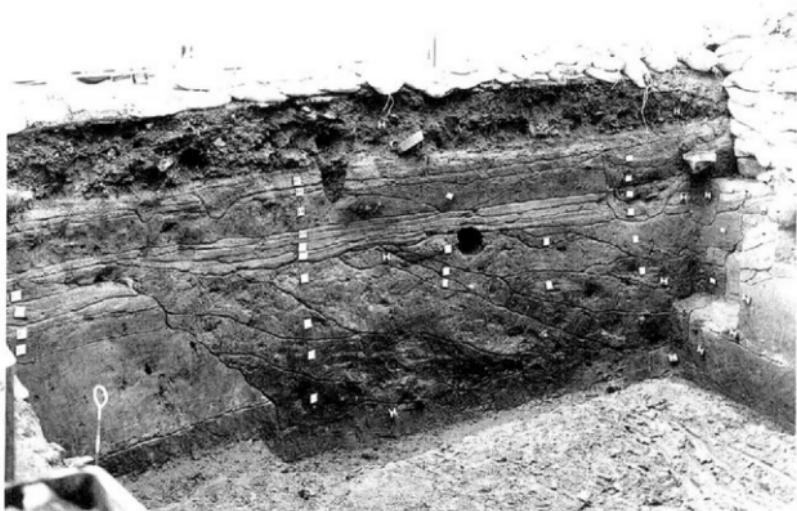


石列遺構及び第1号埋葬遺構（北より）

図版 4



a. 第3号溝状遺構（西より）



b. 第3号溝状遺構土層断面（東より）



a. 第1号埋甕遺構（南より）

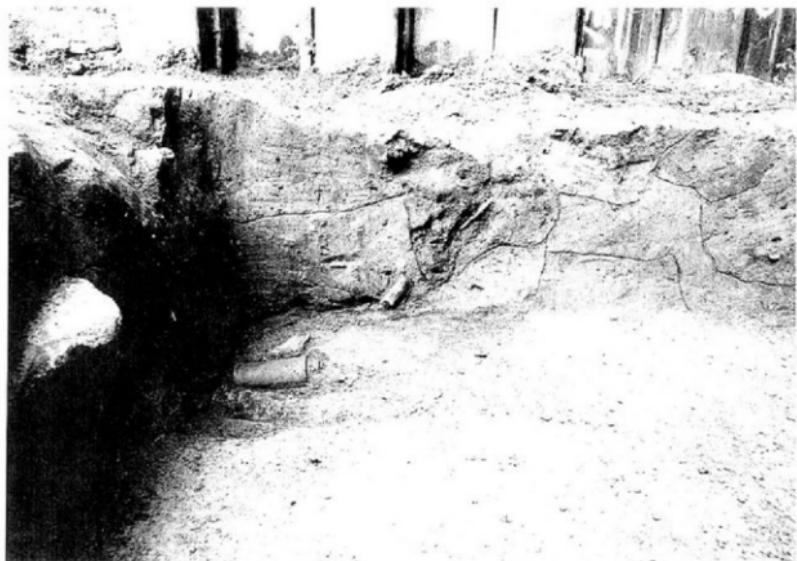


b. 第2号埋甕遺構（南より）

図版 6

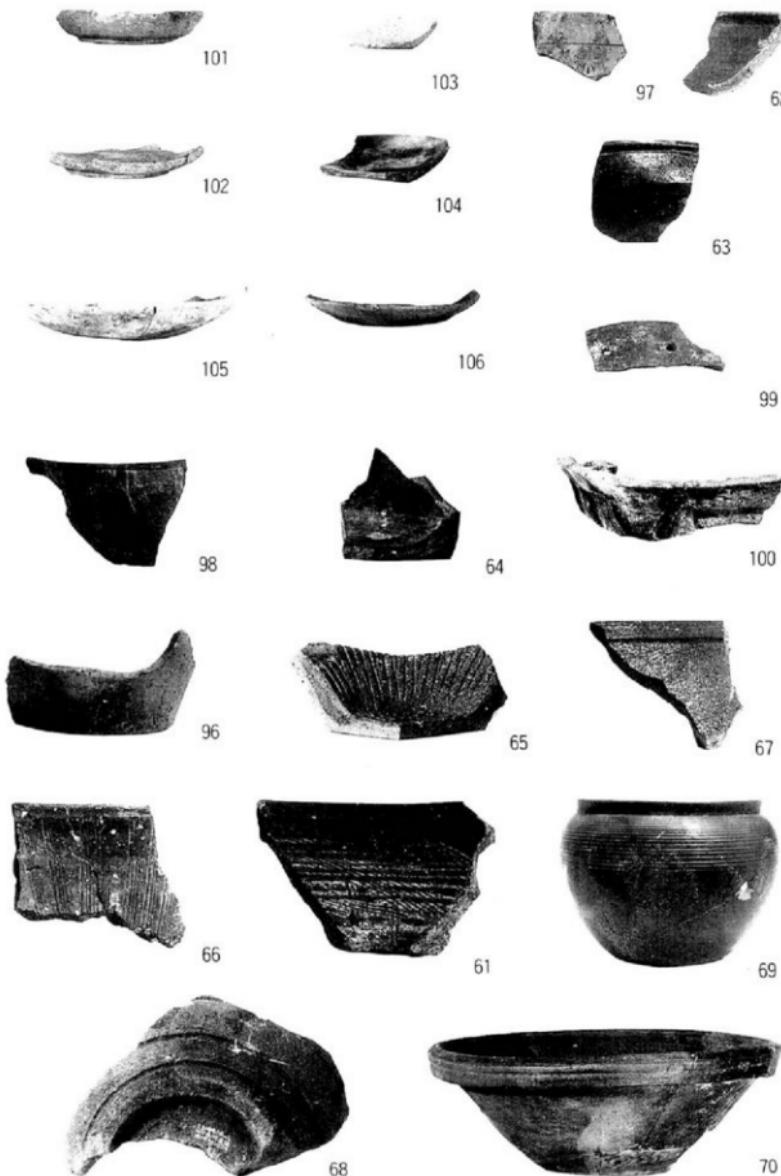


a. 第3号埋甕遺構（南より）



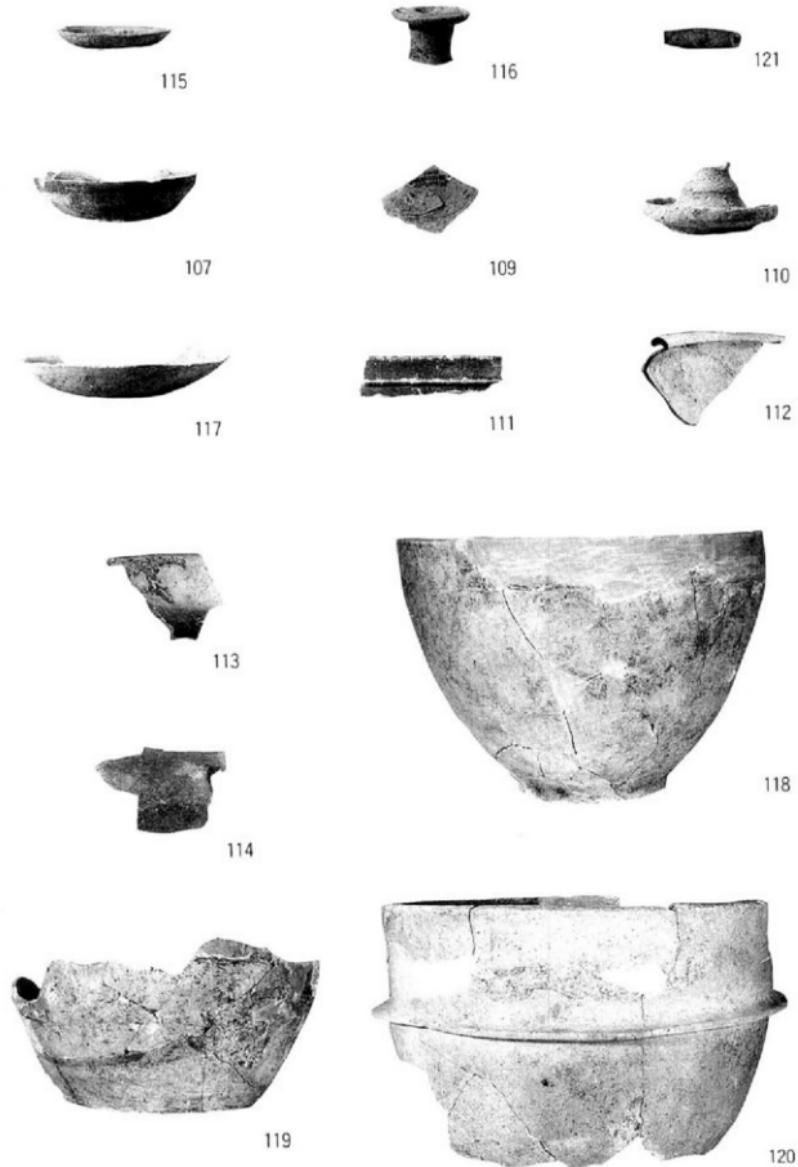
b. 土坑土層断面（南より）

図版 7



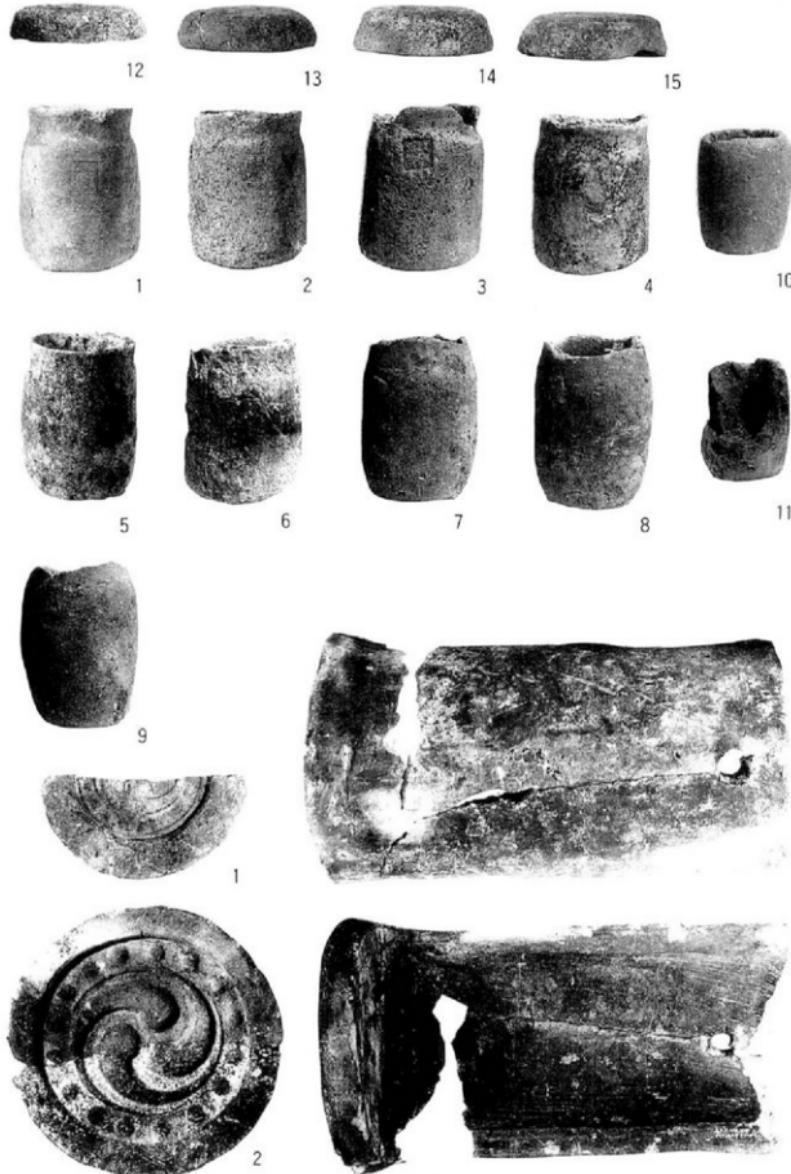
出土遺物 (1)

図版 8



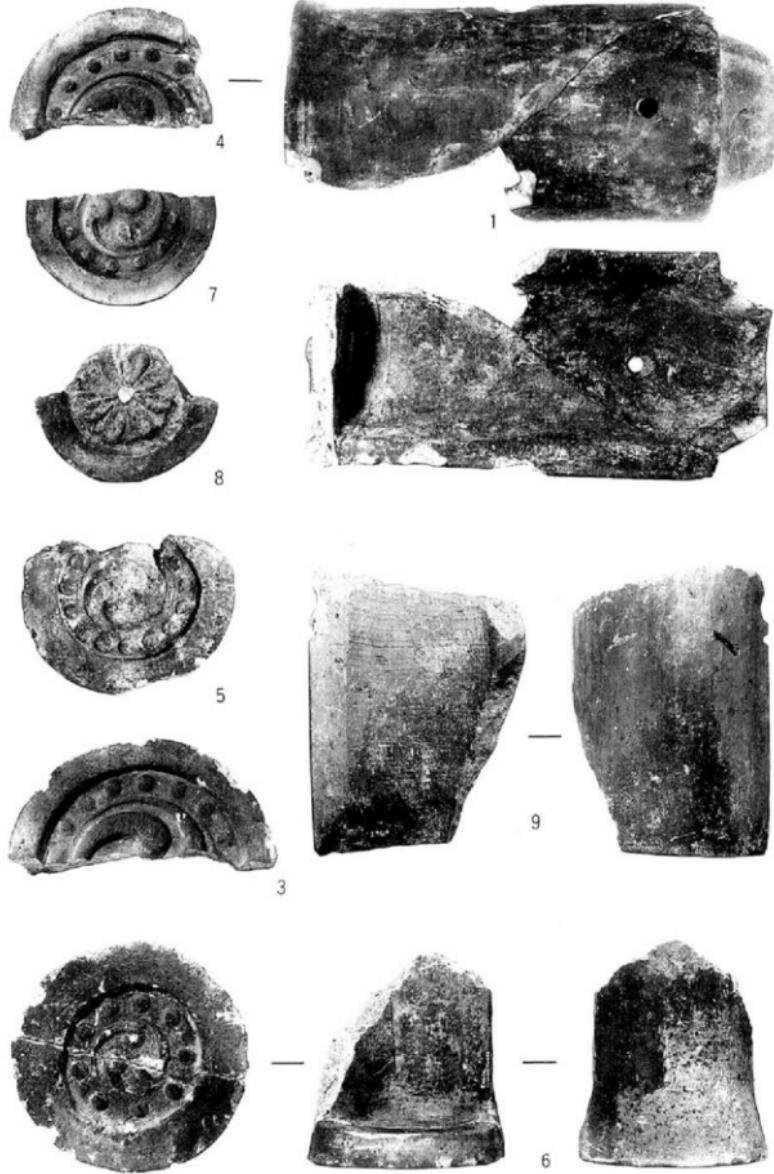
出土遺物 (2)

図版 9



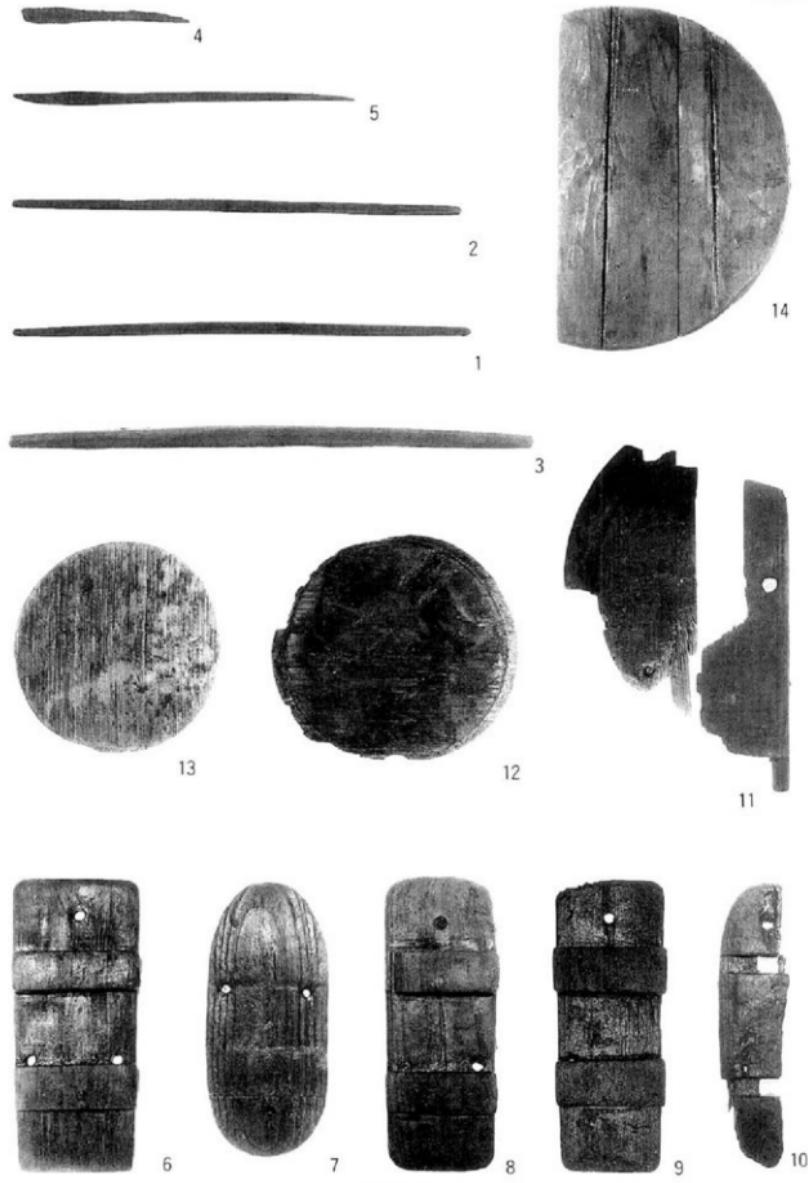
出土遺物 (3)

図版10



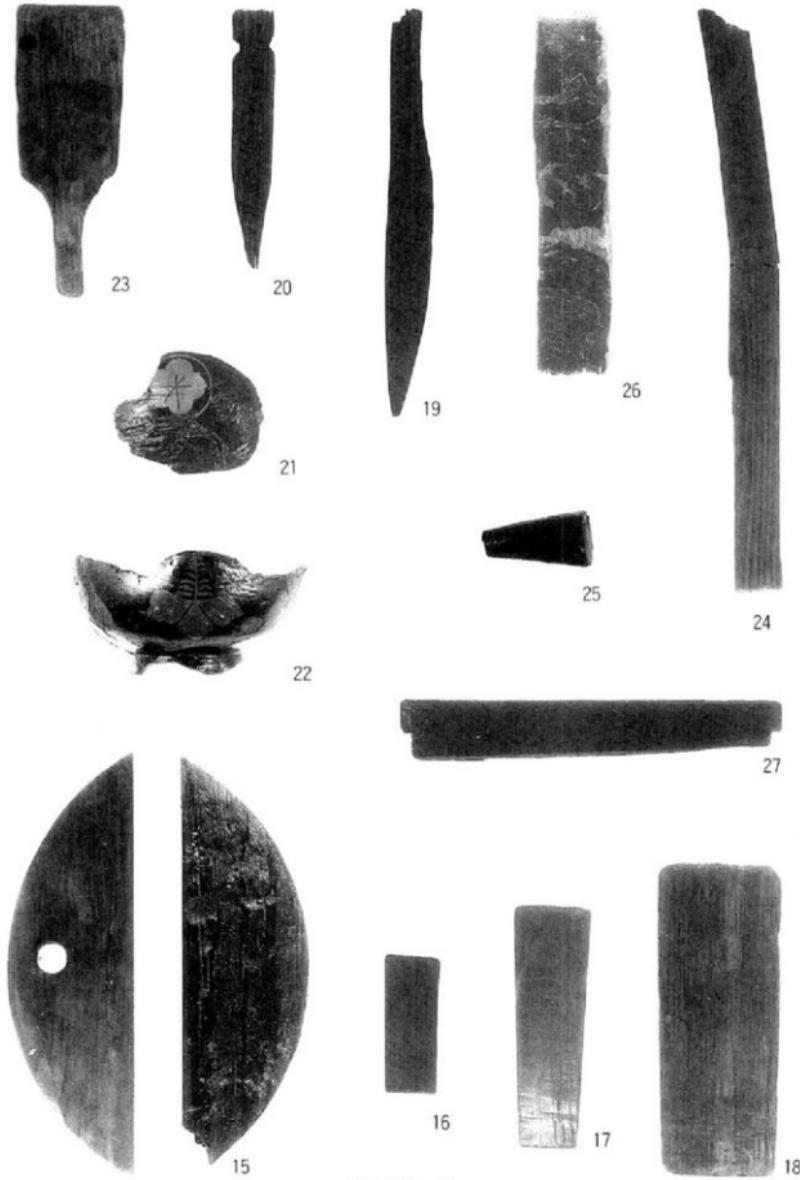
出土遺物 (4)

図版11

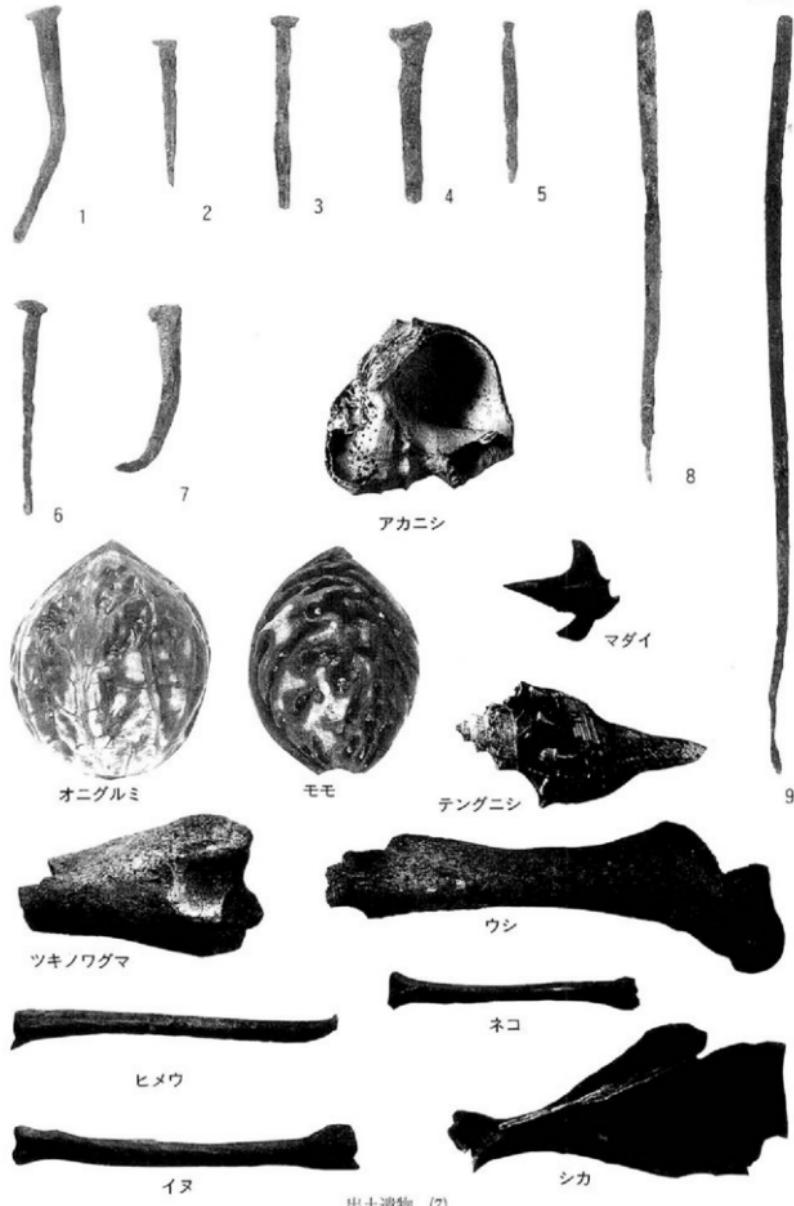


出土遺物 (5)

図版12

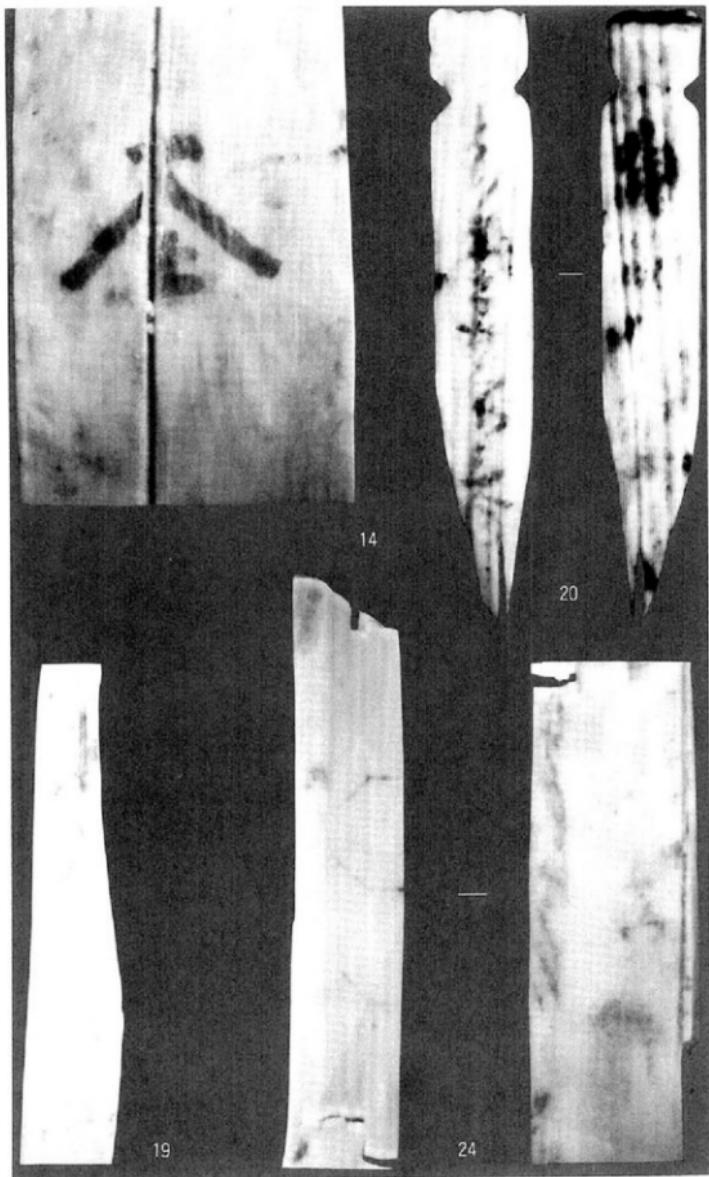


出土遺物 (6)

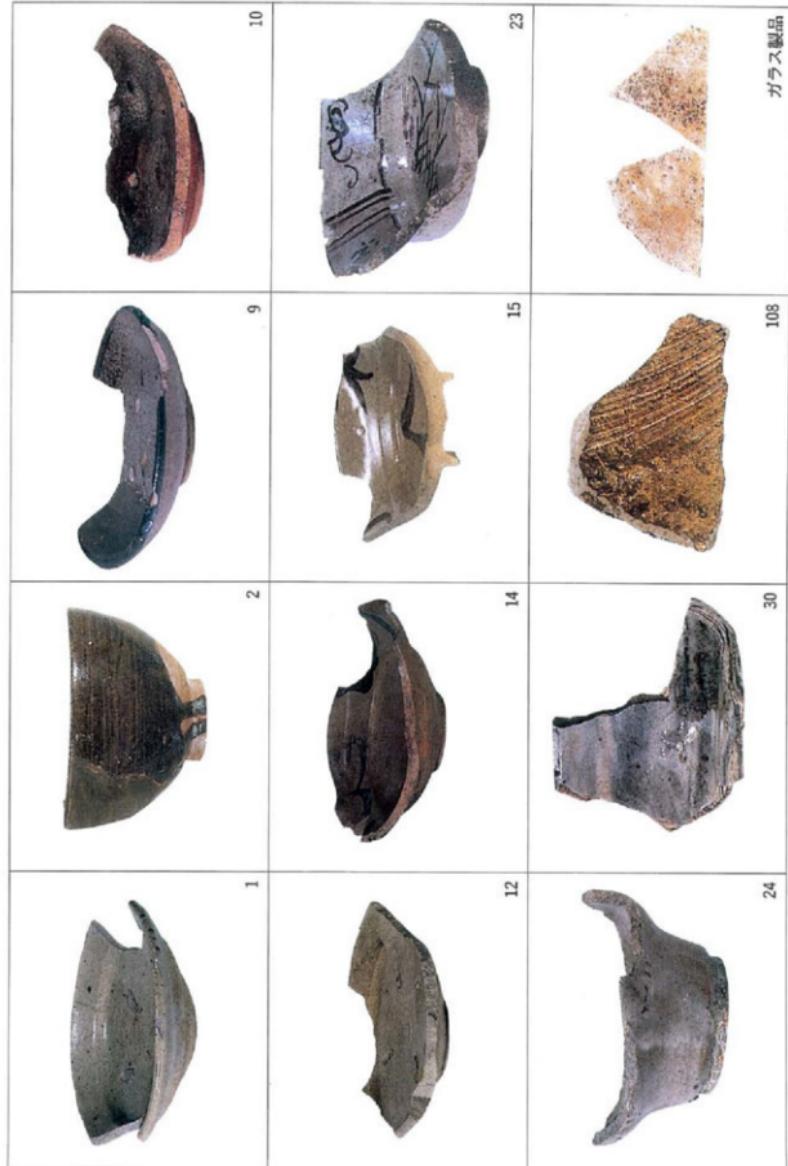


出土遺物 (7)

图版14



墨书红外线写真



出土遺物 (8)

図版16

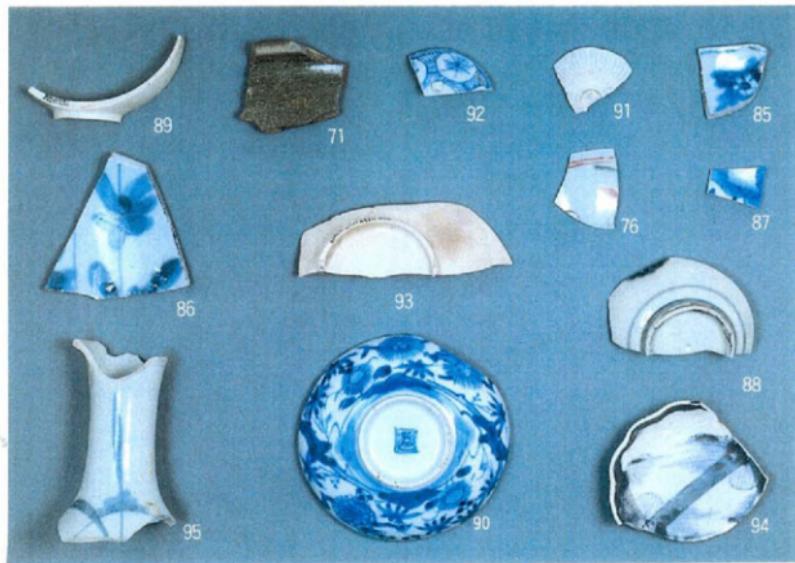
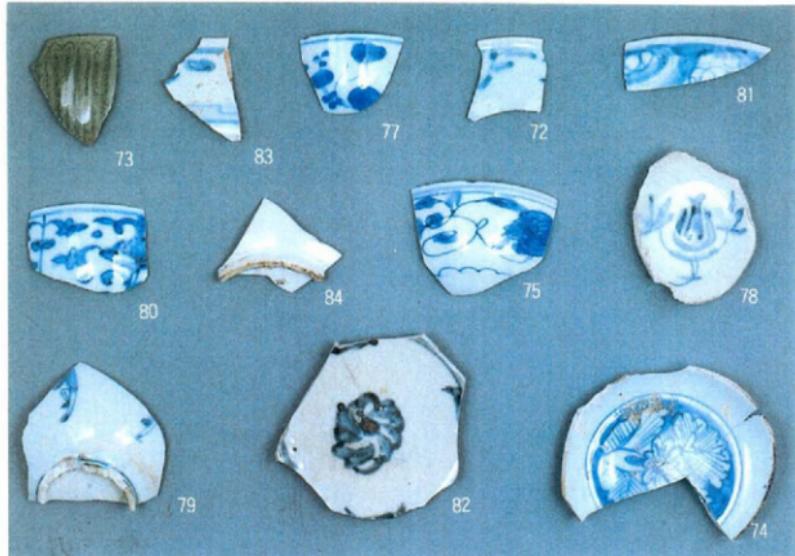


出土遺物 (9)



出土遺物 100

图版18



出土遺物 (1)

姉広島市歴史科学教育事業団調査報告書 第12集
新交通システム建設工事事業地内埋蔵文化財発掘調査報告III

広島市中区基町11番外所在

広島城県庁前地点

1994年3月

編 集 行 財団法人 広島市歴史科学教育事業団

広島市中区国泰寺町一丁目4番15号

T E L (082) 248-0427

印 刷 産 興 株 式 会 社

広島市中区舟入南1丁目1番18号